

---

# IS インフィニット・ストラトス 【白い閃光】

かめ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス 【白い閃光】

### 【Nコード】

N5257S

### 【作者名】

かめ

### 【あらすじ】

この作品はIS学園とORCA旅団が戦うという内容であり、acfaの内容をある程度知っていなきゃ理解出来ない事も多々あると思います。それでも良いと仰る方はfrom脳をフル回転して下さい。

尚作者はこう言う物は初めてなので文章が下手くそで読みづらいと思いますが生暖かい目で見守ってください。

## 1話 プロローグ

血と火薬の匂い入り交じり死体に薬莢、瓦礫が散乱した地面。その戦場に、もはや男の姿も戦車や戦闘機などの兵器の姿はどこにもなかった。

10年前【篠ノ之 束】によって発表された。インフィニット・ストラトス通称ISもともと宇宙空間の活動をもとに開発されたマルチフォーム。

当初は注目されなかったが、ISの発表から1ヶ月後事件は起こった。

各国の2300発のミサイルが一斉にハッキングされ日本に発射された。

だがその半数が、IS【白騎士】の手によって迎撃された。これによってISの関心が一気に高まった。

その従来の兵器の性能を

軽く凌駕し圧倒的な力を持つIS。

その力を恐れ、そしてISを日本が独占していることに不満をもつ各国はIS情報の開示を要求してきた。このままでは第三

次世界大戦が起きてもおかしくない状況追い込まれてしまう。それだけは何としても避けたかった日本にとっては否応なしにIS情報を提供する以外選択肢はなかった。

それが火種となり新たな戦いを呼ぶのに時間はかからなかった。

ISによる新たな争い、即ち企業どうしの戦いが多くなっていた。他の企業の妨害、IS情報を盗む、など様々だ。企業は金で傭兵を雇いこれらを行わさせている。特にIS操縦者の傭兵は【リンクス】と呼ばれ、ISのことを【ネクスト】と呼ばれていた。

大きな戦争こそ無いもののISの登場前よりも遥かに戦いは多くなっていた。

そしてISの最大の特徴、それは女性にしか扱うことができないことだ。

それによって男女の立場が逆転してしまい女性優遇の社会、女尊男卑が成立してしまった。そしてISの登場によって戦場はもはや男の居る場所ではなく、女の場所になっていた

そしてもうひとつ大きく変化したものがある。ISを応用して作られた【クレイドル】だ。高度7000mを半永久的に飛行する全長4kmの居住型航空機。表向きには人類の新たな居住区としているが実際は【ネクスト】の襲来によって安全ではなくなった地上から企業達が逃げるために作った物だ。

【クレイドル】には一般の人間もいるので企業どうしが争うことは滅多にない。

だが【クレイドル】は飛び続けるには大量のエネルギーを消費するため、人々から不満の声が後を絶たないでいる。

## 1 / 5話 設定・用語集（前書き）

これから専門用語をちよくちよく使って行きますので、是非読んで下さい。

意味がわからないかもしれませんが何とぞよろしくお願いします。

## 1 / 5話 設定・用語集

説明が下手なので都合良く解釈してください。

~~~~~自己紹介~~~~~

オリ主

【和泉亮平】

イズミリヨウヘイ

彼はもともと企業に属しているただ1人の男の傭兵

オリ主機体

【ホワイト・グリント】

純白のカラーリング

軽量で装甲は厚くない、むしろ少し薄いぐらい

武器・・・主に二挺の突撃型ライフルと背中には二つの分裂ミサイル。これは 最初に大型のミサイルを発射し、その後中から小型ミサイルが16発発射される仕組み

~~~技術・技の解説~~~

【コジマ粒子】ネクストはISとしての動力源を使わず、コジマ粒子と言う粒子で動いている。

コジマ粒子（わからない方はガンダム00の緑色のGN粒子だと思ってください）。

それでも意味がわからんと言う方はブーストの部分から緑色の粒子が出ていると想像してください。（）についての詳細な情報は不明とされている。追記ですが原作の【コジマ汚染】はありません。

【PA＝プライマルアーマ】・・・ネクストが持つ絶対防御。コアからコジマ粒子を放出、放出されたコジマ粒子は各部の整波装置によって安定還流された防護膜。

攻撃を受けると安定還流が乱され防御効果は減衰する。

自動的に回復が可能。ただし激しい攻撃を受けると一時的にプライマルアーマが消滅する。

【QB＝クイック・ブースト】・・・ブースターに貯蔵したコジマ粒子をプラズマ化させ瞬間的に爆発的な推力を発生させる推進方法。

【OB＝オーバードブースト】・・・【コジマ粒子】をQBと同じ機構で一気にプラズマ化し長距離移動を可能にした推進方法。

PAに使用される【コジマ粒子】をまわし行われる。  
時速1000kmでの移動が可能、QBとの併用で時速2000k  
mまで出すことが可能

他にも【VOB】【AF】などもあります、今は出てきません。  
機会があればどんどん出して行きたいです。



## 1 / 5話 設定・用語集（後書き）

説明が下手なので都合良く解釈してください。

~~~~~自己紹介~~~~~

オリ主

【和泉亮平】

イズミリヨウヘイ

彼はもともと企業に属しているただ1人の男の傭兵

オリ主機体

【ホワイト・グリント】

純白のカラーリング

軽量で装甲は厚くない、むしろ少し薄いぐらい

武器・・・主に二挺の突撃型ライフルと背中には二つの分裂ミサイル。これは 最初に大型のミサイルを発射し、その後中から小型ミサイルが16発発射される仕組み

~~~技術・技の解説~~~

【コジマ粒子】ネクストはISとしての動力源を使わず、コジマ粒子と言う粒子で動いている。  
コジマ粒子（わからない方はガンダム00の緑色のGN粒子だと思います。）。  
ってください。

それでも意味がわからんと言う方はブーストの部分から緑色の粒子が出ていると想像してください。（）についての詳細な情報は不明とされている。追記ですが原作の【コジマ汚染】はありません。

【PA＝プライマルアーマ】・・・ネクストが持つ絶対防御。コアからコジマ粒子を放出、放出されたコジマ粒子は各部の整波装置によって安定還流された防護膜。

攻撃を受けると安定還流が乱され防御効果は減衰する。  
自動的に回復が可能。ただし激しい攻撃を受けると一時的にプライマルアーマが消滅する。

【QB＝クイック・ブースト】・・・ブースターに貯蔵したコジマ粒子をプラズマ化させ瞬間的に爆発的な推力を発生させる推進方法。

【OB＝オーバードブースト】・・・【コジマ粒子】をQBと同じ機構で一気にプラズマ化し長距離移動を可能にした推進方法。

PAに使用される【コジマ粒子】をまわし行われる。  
時速1000kmでの移動が可能、QBとの併用で時速2000k  
mまで出すことが可能

2話 『えっ！！男子が2人も…』（前書き）

今回からストーリーリリーが始めます。矛盾しているかもしれませんが何とぞ寛大な心で呼んでください。



と【一夏】は心の中で1人で虚しくボケとツツコミし悲しくなっていた。

まあ雨が降りそうな天気でも困るけどな

そんなこんなで今日も平和なIS学園、のはずだった。

ホームルームの時間になり副担任の【山田真耶】先生がやって来た。その後には千冬ねえ もとい、【織斑先生】が入って来て教室の右端に立っている。

『今日は皆さんに大事なお知らせがあります。』

『

少し戸惑った表情を見せた【山田】先生が、何か大事なことを話そうとしているのがわかる。だが俺にとっては1、2時間目にある2組との実習訓練がある、その為にアリーナに行って着替えグラウンドに猛ダッシュしなくてはならない。そちらの方が俺にとっては重大だ。それにファースト幼なじみと同じクラス、セカンド幼なじみの転校と決闘、イギリス令嬢との決闘、そんなこんなで大抵のことは驚かない自信が俺にはある。

『うちのクラスに転校生が2人きました。』

その言葉に女子が騒ぎ始めた。

そんな騒ぎも数秒もたずに【織斑】先生が『静かにしろ!!』の一言で教室は静粛を取り戻した。

『では入ってください。』

ガラッ!と扉が開いた。

この時俺はどんな顔をしていただろうか。口を開けマヌケ面していた様な気がした。

30分前 校長室にて

『では三年間一生懸命頑張ってください。』

『では、【織斑】先生よろしくお願いします。』

『はい。 よし、2人とも行くぞ。』

【織斑】先生に言われるがまま俺【和泉亮平】は、金髪的美男子と

共に校長室を出た。

『しっかしあれだな、まさかもう1人男子がいるとは思わなかったわ。』

『う、うんそつだね僕もまさかもう1人いるなんて、思わなかったよ』

『あつ俺は【和泉亮平】って言うからこれからよろしくな』

『僕の名前は【シャルル・デュノア】よろしくね【和泉】くん。』

『あ〜〜【亮平】で良いよこれから三年間一緒にやって行く仲間だからな。』

『うん、わかった【亮平】僕のことも【シャルル】でいいよ。』

『よし挨拶はすんだな、では行くぞ。』

この時俺は一つの革新を得た。この先生は規則には厳しい人だ、この人に逆らったら後々厄介だな。あんまし目立たない様にしよう。俺は一目見ただけでそれだけの事を察知し、1人勝手に納得し顔を上げた瞬間、「パーン」頭に強烈な平手打ちが飛んで来た。

『人の話を聞け、このバカ者が』



早速目をつけられてしまった。なんだか不幸だあーと叫びたくなつた。【シャルル】が苦笑いしながらこちらを見ているが、これ以上怒られるのは面倒なので、とりあえず先生の話しを聞くことにした。

『お前達は同じ部屋だ。わかったな？わかったならハイと答える。』

『ハイ！』 『ハイ』

『おい【和泉】次に私の前でふざけた真似を試してみろ、地獄を見る事になるぞ』

『すみませんでした。』

そんなこんなで無事に教室にやって来ることができた。

『よし呼んだら入ってこい』

その一言を残し【織斑】先生ともう1人の先生は教室に入っていた。

しばらくしてから先生の合図があったので俺と【シャルル】は教室に入った。

一目で俺は【織斑一夏】が誰だかわかった。目を大きく開け口をポカーンと開けている。うわーバカキヤラっばいな、そんなことを思いながら、【シャルル】は自己紹介をしたので続いて俺も挨拶をした。

その瞬間何かが弾けたかのように一斉に女子が騒ぎ始めた。誰がなんと言っているのかなんてまるで聞こえない。その時だった

『静かにしろ！バカ者共が！！』

こっちの怒号の方がよっぽどうるさい位だ。窓ガラスがビリビリ震え、今でも割れそうな気がした。静けさを取り戻した教室に先生がさらにも一言。

『次は2組とIS実習だ遅刻したものはグラウンド10周だ。』

以上。後【織斑】しばらく2人の面倒を見てやれ。』

『はい』

挨拶が終わり【シャルル】が【織斑一夏】のところに行ったのでついて行こうと思ったが、それよりも早く【織斑一夏】が立ち上がった。

『女子達が着替えるからまずは教室をでるぞ』

そう言うと【シャルル】の手を引っ張って教室から出ようとした。その時【シャルル】がビクツとしたが大して気にも止めなかった。

『俺は【織斑一夏】【一夏】って呼んでくれ。』

俺達は実習の度にアリーナの更衣室で着替えなくちゃならないから早めに馴れてくれよ。』

『りょうかい。俺の事は【亮平】って呼んでくれ。』

『僕のことも【シャルル】でいいよ。』

そう言い3人はアリーナに向かった。

息を切らしながらなんとかアリーナ更衣室まで3人はやって来た。

授業開始まで残り8分

『ったくなんなんだよあの女子の数は』

『ごめんねいきなり迷惑かけちゃて』

『そりゃしょうがないさ学園には俺達以外男子がいないんだからな、つてもうもつこんな時間かさっさと着替えるぞ』

と言い【一夏】はワイシャツを脱ぎ始めた。その瞬間【シャルル】はワッ！と驚いた表情で背中を向けてしまった。

『む、むこう向いててくれる。』

『そりゃ俺は良いけど【一夏】は着替えを覗く趣味が、あるかもし』

パァーン！！

見事に【亮平】の後頭部に拳がクリーンヒットし【亮平】は後頭部を抑えそのまま、うずくまってしまった。

『んなわけあるか。』

『いつてえ〜〜〜冗談に決まってるだろ。』

『まあ何でも良いけど早く着替えるよ?』

????????????????そこにはもう着替え終わっている。【シャルル】がいた。

(俺の方が早く着替え始めたよな?)

『【シャルル】お前着替えるの早いな。どうやって着替えたんだ？』

『え？ま、まあ色々とねハハハ』

曖昧に答える【シャルル】その頃まだ【亮平】はうすぐまったままだった。

そして授業開始まで2分を切っていた。

授業始まる前にもうひとつ走り。

2話 『えっ！！男子が2人も…』 (後書き)

【ラウラ】がいつ登場するかわかりません。

3話 『俺と「シャルル」が?』 (前書き)

遅くなってしまいました。

そろそろ企業達やAF出そつが迷っています。

### 3話 『俺と【シャルル】が?』

準備体操なんぞしなくても良いくらい体は温まっていた。授業開始と共に整列をし先生の指示を待っていた。

『よし!専用機持ちの【オルコット】と【凰】前に出る。』

『え〜〜めんどくさ〜』

『こつ言つのは見せ物見たいで気が進みませんわ。』

あの2人は2組の中国代表の【凰 鈴音】と1組イギリス代表【セシリア・オルコット】だ。何故かいつもいがかみあっているのが気になっている、【鈴】は俺と幼馴染みだ【篝】の後の幼馴染みだから通称セカンド幼馴染み。

すると、2人に【織斑】先生がぼそつと何かを喋った。

すると絶不調だった2人が一気にやる気を取り戻し、目に輝いきを戻した。

『【一夏】今、先生何て言ってたの?』



『俺に聞くな。』

【亮平】はニヤニヤしながら俺を見ていた。

『なんだよ!?!』

『いや別に、羨ましい奴だなんて思ったただけだ。』

『?!?!?!?!?!』

やる気を満々になった。【セシリア】と【鈴】

『相手は誰なんです。私は【鈴】さんでもかまいませんわ。』

『ふん、ぶっ潰してあげる』

『慌てるなバカ者』

『【和泉】と【デュノア】お前らが相手をしろ。』

『『『『え？』』』』

【一夏】に良いところを見せたい2人と転校生2人は、見事なハモリで驚いた。

『先生、俺と【シャルル】は今日初めて会ったんですよ？それなのに2対2って無理がありますよ。』

『黙れお前に拒否権などない。』

『私を甘く見るなよガキが黙って従え。』

『はい。』

（はあ〜なんで入学早々にこんなことになったんだ。）

『【デュノア】もそれでいいな？』

『はい』

『よし。準備にかかれ。』

『私は【凰 鈴音】よろしく』

『私は【セシリア・オルコット】と申します。手加減はしませんわ？よろしくって』

『いやいやそんな可哀想な事はできるわけないだろ。俺が手加減してやるよ。』

『私のブルーティアーズを舐めてもらっては困りますは。』

まあいいでしょう、では全力でかかって来なさい。』

『【シャルル】先行してくれ、俺はそれに合わせるから。』

『うんわかった。』

『人の話を最後まで聞きなさい！！』

『面倒くせー奴だな。何で対戦相手の話を最後まで聞かなくちゃいけないんだよ。』

『~~~~~もう我慢なりませんわ!~!【りん】さん全力で行きますわよ。』

『そのつもりよ!~!』

『では始めっ!~!』

その声と同時に【ブルーティアーズ】と【甲龍】は空高く上がりピツトと龍砲が降り掛かってきた。

【亮平】と【シャルル】はすぐさま回避行動をとり【シャルル】が前に【亮平】が後ろの形をとった。

【シャルル】は直ぐ様、右手にマシンガンを左手にライフルを装着し【鈴】に向かって打ち始めた。

【鈴】は回避行動をとりながらも尚も龍砲を打ってきた。

そこで【亮平】は背中にある左右の分裂ミサイルを打った。しばらく

くしミサイルが分裂。一発一発の威力は弱いが複数当たればそれなりに驚異だ。

『こんなの全然くらはないわ!』

【鈴】は【シャルル】に急接近をし双天牙月で目の前にいる【シャルル】に切りかかった。右手をブレードに換装し受け止め、左手のライフルを近距離で打った。

『くう!!--』

『わたくしを忘れてもらっては困りますわ。』

ブルーティアーズのビットが【シャルル】を四方から囲み打とうとした瞬間、2基のビットがライフルによって打ち落とされた。

『わたくしを忘れてもらって困りますわ”』

『私の真似をしないでください?』

こんどは俺に向かってライフルを打ち始め、それプラス甲龍の龍砲が俺と【シャルル】を集中砲火してきた。流石にこれを全部回避す

るのは不可能だ少しずつP Aが削られていった。

『もらった!?!』

【シャルル】の目の前に【鈴】が現れ、今度は双天牙月出はなく龍砲を打とうとしていた。

この時【鈴】【シャルル】【亮平】は一直線上連なっている。

(これで【シャルル】が当たれば大ダメージ、避けても【亮平】には全体に当たるわ。)  
どっちにしても致命傷よ、さあどうする?)

『【シャルル】避ける。』

『え?うんわかった。』

すると【シャルル】は勢いよく右に回避を行った。

『よし【亮平】もらったあ!?!』

しかし【亮平】は驚くべき行動に出た。避けようとするどころか前方に向かって二挺のライフルを打ちながらQBを行い突撃しにいった。甲龍はライフルをくらいながらも龍砲を打った。

龍砲とQBは互いに勢いを相殺し【亮平】はバランスを崩す事はな

かったがホワイト・グリントのエネルギー残量は残り半分を切っていた。  
爆煙が立ち込めている。段々煙が晴れてきたお互いの距離は1m。  
そこで【亮平】は左右のミサイルを1発ずつ甲龍に向けて発射をした。

『なっ!!』

この距離で避けれる筈もなく2人は大爆発に巻き込まれた。

『きゃあー』

落下する甲龍をなんとか立て直したはいいが、状況を理解するのに少しかかってしまい隙を与えてしまった。

『うっー頭いたーい。』

『油断大敵!!』

『えっ?』

【亮平】は右手にパイルバンカーを装備をとっつき一発ぶちこんだ。

【りん】のエネルギー残量は0になった。

そこに【セシリア】は【亮平】に向かってライフルを打ち。

さらにミサイルを2発、発射し始めた。

【亮平】は素早く回避すると勢いよく【セシリア】から逃げる様に距離をとった。

『逃げる何て卑怯ですわ。正々堂々勝負しなさい。』

( たつくそりやどこの決闘だよ )

【亮平】は半分呆れていた。

『この戦いは2対2だぞそれを忘れてないか?』

『へ?』

【セシリア】が振り返った時には【シャルル】との距離は3mもなかった。【シャルル】はパイルバンカーを右手に装着させて。

『ごめんね、これ少し痛いから。』

そう言うと4発【セシリア】の腹に命中させてゲームセット。



4話 『亮平』それが弁当なのか……』

お昼休み中

昼休み今日は晴れているので【亮平】と【シャルル】をいれて、みんなで昼食タイム。

『はあ〜』

『どうかしたのか【セシリア】？』

『いえ、たいしたことではございませんわ』

『【一夏】女には男にはわからない悩みがあるんだから、あんまし野暮に聞くもんじゃないぞ。』

『あなたに関係してることですわ！！？』

『へっ。』

『さっきの試合納得できるはずがありませんわ。再戦を要求します。』

『

『俺は不正をした覚えはないぞ。』

『あんなのが戦いと呼べるはずがありません。』

『何言ってるんだよ。あれは2対2だぞ？最悪逃げるのは卑怯だとして、1人に集中し過ぎてもう1人を忘れるなんてあり得ないだろ。』

『うっ』

【セシリア】は何も言う事が出来なくなってしまい反論する言葉を探している内に【鈴】が割り込んできた。

『てかさー何で甲龍の龍砲やブルー・ティアーズのライフルとミサイルを喰らっても平気なのさー？』

『あーあれはな、俺のホワイト・グリントはエネルギーが回復する仕組みなんだよ』

『って言うことは【亮平】のも第3世代なんですよ、どこの国なの？』

『あの緑色の粒子はなんなの？』

『【亮平】が使ってたイグニッションブースト少し違ったような感じがしたけどなんかあるのか？』

『あれ？【一夏】と【シャルル】は弁当忘れたのか？』

質問攻めになってしまい、これ以上は自分の素性もばれかねない程の身の危険も感じて来るのです。すぐさま話題を切り替えてしまった。

『ああ』 『うん』

『では皆の分を少しずつ分けるとしよう。』

【篝】珍しい提案を出した。  
それを聞いた【鈴】と【セシリア】の目が一瞬光った。

『しょうがないわね。』

『わたくしもかまいませんわ。』

『おお！皆助かるぜ。』

『みんなありがとう。』

【鈴】の弁当は、大きめのタッパに酢豚がぎっしり詰まっていた。

『【鈴】酢豚作ってきてくれたのか！！ 懐かしいな。』

『まあ今日は時間があつたからね。』

『それじゃいただきます。くうくうやっぱり美味しいなー！！』

『皆も食べて見るよ！美味しいぞ。』

そう言うが手が伸びたのは【シャルル】と【亮平】の2人だけであつた。

『どうした2人共食べないのか？』

『わ、私は別に』

『わたくしも今日は遠慮させてもらいますわ。』

【鈴】は2人にとって【一夏】を奪う敵でしかなかった。その敵の料理を食べるなぞあり得なかった。

『ごほん、【一夏】さん今日はわたくしも早起きをしこんなものを作ってきましたわ。どうぞ食べて見てください。』

次は私の番だ！と言わんばかりに【セシリア】はバスケットを開け、皆にサンドイッチを渡した。（勿論【篤】と【鈴】は食べていない）

『ではいただきます。』

もぐもぐもぐもぐ……もぐもぐ……。

それぞれの口の中は甘いのか辛いのか酸っぱいのかしょっぱいかわからない。さらにそんなに大きくはないのに、なかなか呑み込む事が出来いと言う異様な感覚に襲われた。次第に顔からは妙な汗が吹き出していた。

『どついでしゅうか？』

【一夏】は迷っていた。ここで本当の事を言うべきか、はたまた事実を曲げ嘘を教えるか。

『まですっ！っ。』

【亮平】は【一夏】よりも先に答えを言ったのだ。【一夏】は心の中でありがとつと呟いた。

『なっ！嘘を仰らないでくれませんか。』

また騒動が始まった。何故【亮平】と【セシリア】ここまで違うのだろうか？

『【一夏】さんはどう思います？』

（何でそこで俺に振るんだよ。）

2人が【一夏】の顔を見て（美味しいでしょ。）（不味いだろ。）と目で訴えていた。

『僕は美味しいと思うよ。』

突然の答えに【一夏】は【シャルル】の方を見た。明らかに我慢し

ている顔だ。あれを食った俺から見たら一目瞭然だった。それをチヤンスと思った【セシリア】は

『やはりあなたの味覚がおかしいのではありませんか。』

『んなわけねだろ!!』

『それより【亮平】の弁当は何なんだ?』

【一夏】はどんどん悪い方向に行っているので話題を変えて方向転換しようとした。

『あなたの料理なんてたかが知れていますわ。』

『は?嘗めんなよ』

そう言うと【亮平】は水筒と半透明のタッパを出した。中身は白色だった。

(まさかご飯だけなのか?)しかし【亮平】の料理は【一夏】の予想を大きく上回った。

中には白い麺だけがタッパを占領していた。

『【亮平】それはまさか。』

『あつ！それって日本のそうめんって料理だよね。』

『じゃあその水筒の中身は……』

『つゆだけど』

『やっぱし』

【シャルル】を除いて4人は呆れた顔で【亮平】を見ていた。そして【一夏】の方向転換も敢えなく失敗予測不可能な方に行ってしまった。

『ふん、そんな麺を茹でるだけのもの、料理と呼ぶにはふさわしくありませんわ。』

『サンドイッチだって適当になんか挟むだけで、はい終了じゃねか。』

( いや 【亮平】 弁当にそうめんはどうかと思っぞ。 )

そんな感じで【一夏】は【亮平】に軽いツツコミを入れていた。唯一【シャルル】だけがそうめんに興味を持っていたが箸を使えない



【シャルル】がそうめんを持ちつゆに浸し食べると言う、高等技術はなくあえなく断念。

気を取り直して【篝】の方を向き。

『【篝】はどんな弁当なんだ？』

『私はたまたま時間があつたから作ってきただけだ。』

それは日本人ならではの弁当であった。（逆に言えばどこにでもある普通の弁当だ。）

『お〜旨そうだな。じゃあさっそくこの唐揚げをいただきます。』

「ずるずるずるずるずる。」

『おっこれ凄く上手いな。』

『そうか、旨いか。そうかそうか、美味しいか。』

「ずるずるずるずるずるずる。」

【篝】は喜びを隠そうとしているが相変わらず隠しきれなく顔に出ていた。

（【篝】は表情にでるタイプなんだ。）と【シャルル】ふと気づいた。

『【箒】も食べて見ろよ。ほらあーん』

そう言い【一夏】は【箒】に唐揚げを食べさせた。

「もぐもぐ、うんいいもんだな。」

『あつこれって！日本の恋人同士がする食べ方だよね、なんかもどかしいね。』

「ずるずるずるずるずる」

『なあ〜に2人でイチヤイチャしてるのよ。』

『そうです。不公平ですわ【一夏】さんわたくしにもお願いします。』

『あんた何抜け駆けしようとしてんのよ。』

また【箒】【セシリア】【鈴】が騒ぎ始めた。

「じいじいじいじい」

『『『うるさい!?!?』』』』

とそうめんをすすっていた【亮平】に怒号の一言。流石にこの状態では返す事が出来ず【亮平】は食べるのをやめてしまった。  
(あいつも災難だな。)と【一夏】さふと思った。

いまだに3人は言い争っている。  
その時

「ピンポンパーンパーン」

『【和泉】今すぐに指導室にこい。』

『あつ千冬姉だ』

『なんかしたの?』

『俺に聞かれても困る。』

あの3人には聞こえてないようだ。まだ騒いでいる。【亮平】は2人に見送られ屋上を後にした。

「キーンコーンカーンコーン」  
どっちら昼休みは終わったようだ。

『さてと行くか。』

『うん』

『おい。いかないのか?』

【鈴】 【セシリア】は溜め息をつきながらこちらに来た。何故か【  
箒】だけは満面の笑みであった。

5話 『てめーら少しは遠慮って事をしれー？』 (前書き)

少し長くなってしまいました。

段々更新が遅くなるかもしれません。

5話 『てめーら少しは遠慮って事をしれー？』

## 食堂

【亮平】は食堂で1人晩飯のカレーを食べていた。

『おーーーい【亮平】』

『……………』

『おいってば…！』

『おお【一夏】どつした？』

『どつした？じゃねえだろ』

『ずっと呼んでたのに気づかなかったの？』

『ああ、しめん』

いつの間にか【亮平】の周りにはいつもの面々が座っていた。

『一緒に食べようと思ってただけど部屋にいなかったから食堂に来てみたんだよ。』

『そうか、悪かったな。』

『そんなに集中して何を考えてたんだ？』

『…あゝあれだ、そろそろ臨海学校だから準備しなきゃなと思ってたんだよ。』

『そつだな今度3人で一緒に買い物にでも行くか。』

『あっそれ良いね。』

『おお賛成!!』

流石に男の会話に割り込む訳にも行かずたじろんでいた。

『それより学年別トーナメントの方が先でしょう。』

ピキーン!!

その【鈴】の言葉に【篤】と【セシリア】がいち早く反応した。それは最近あることが噂になっているからである。

その内容とは、学年別トーナメントで優勝するとその人は、【一夏】と付き合う事ができる。と言うものだ。（無論本人は知らない。）  
3人は不適な笑みを浮かべながら互いに火花を散らしていた。

『3人ともどうしたんだ?』

『なっ何でもない。』

『【一夏】には関係ないことよ』

『たいしたことではございませんわ。』

『?? まあそれなら良いんだけど。』

『それより【一夏】さん昼休みではできませんでしたので、はいあーん。』



『あんた何抜け駆けしようとしてんのよ。』【一夏】ほらあーん。』

『お前らずるいぞー!』

『【箒】はさっきしてもらったでしょ。』

『あれはあれだ。』

などとまた何か騒ぎ始めた。あきないのか?と【亮平】呆れながら眺めていた。【シャルル】も笑いながらみていた。

『【シャルル】 【亮平】 部屋  
』 『ただいま』 『』

あの後、食べあいつこを見た同じクラスの奴らが“今なら【織斑】君にご飯食べさせて貰えるよ”などの噂が広まり、クラスの全員が来てパーティー状態となってしまうた。

30分位騒いでいた所、【織斑】先生が来て全員こっぴどく怒られ

てしまった。

『まったく、あのクラスうるさくて面倒くせー。』

『僕は楽しくて好きだよ。』

『度が過ぎたら、ただうるさいだけだ。』

【亮平】は上着を脱ぎ始めた。【シャルル】は慌て【亮平】に背を向けた。

『どうかしたか？』

『うつん何でもないよ。』

『なあ、【シャルル】』

『ん？なに。』

【シャルル・デュノア】のデュノアってあの企業のデュノアと何か

『関係があるのか？』

『うん。僕の父がデュノア社の社長なんだ。』

『って言う事は社長の息子ってことか。』

『そう言う事になるね。』

『ふーん……』

『どうかした？』

『あっ！いや深い意味はないから、ふと気になって聞いて見た。』

コンコン！

『あっ俺が出るわ。』

そう言うと【亮平】は玄関に行き扉を開けた。そこには【山田】が生がいた。

『【和泉】君丁度良かった。』

『？』

『【織斑】先生からの指示で【和泉】君は来週の学年別トーナメントには出れません。』

『は？』

『理由は直接私に聞きにこい。との事です。ではおやすみなさい。』

ボタン

『何だったんだ？俺は出れないのか。まっ妥当な判断だな。』

『先生なんて言ったの？』

『ん？ああどうやら俺は学年別トーナメントに出れないらしい。って着替えるの早くないか？』

『そ、そうっ、あっそっだ【一夏】がね毎日放課後ISの特訓をして  
いるけど一緒にどうだっって言ってたよ。』

『ほお、そりゃ面白そうだな。』

コンコン！

『はい！って【一夏】か。』

『俺じゃ悪いのかよ。』

『いや別に、ただ今【シャルル】から【一夏】と一緒に特訓しない  
かって聞いたばかりだったからだよ。』

『そうだったのか。で来るか？』

『もちろんだ！』

『で【一夏】はどうして来たの。』

『部屋で一人で居るのも暇だったから、遊びに来てみた。』

『遊びによってトランプ位しかないぞ。』

『十分だ！トランプにだって色々なゲームがあるんだから。』

『玄関じゃなんだから【一夏】も【亮平】もとりあえず中に入ろう。』

『そうだな』

『おじやましてす。』

その頃

【セシリア】 【鈴】はいささか不自然に廊下を歩いていた。

『だいたい何であんたが私についてくるのよ。』

『別に、付いているつもりはありません。たまたま前に【鈴】さんがいるだけですわ。』

(こいつ【一夏】の部屋に行くつもりね。どう言ったって行くつもりなんだろう。なら先手必勝!!)

後半の考えはもう声を出していた。

【鈴】がもうダッシュしはじめた。

『なっ！待ちなさい。どこに行くつもり

ですか?!!!』

『どこに行こうと私の勝手ですよ。』

(このままでは【鈴】さんに先を越されてしまいますわ。そうはさせませんわ!!)

こうして【鈴】【セシリア】との徒競走が始まった。フライングをした【鈴】だったが、だんだんと距離が縮まってきた。そしてコーナーに差し掛かり【鈴】が曲がるうとしたところ。

『きゅっ!!...』

何かにぶつかった。

『追い付きましたわ。』

走りでは私の方が早い…ようで…す…わ…わ…』

『ほう。お前らは私が寮長と知っていて、ここで徒競走をしているのか。良い度胸だな。』

ダラダラダラダラ

そこには仁王立ちしている【織斑】先生がいた。2人の背中からは汗が滝のように流れて、もう【一夏】をどちらが取ると言う問題ではなかった。

これから起こる地獄に2人は心底恐怖していた。

『まったく酷い目にあつた〜。』

『【鈴】さんが走るからいけないのでわないですか!!』



バチバチと目から火花を散らしているうちに【一夏】の部屋の前に着いた。

そこには【篝】が耳を立てて扉の前にいた。

『【篝】何してんのさ?』

『【篝】さん、あなたにそんな趣味があつたなんて。』

『ち、違う、これは【一夏】を呼んでいるんだか一向に返事がないんだ。』

もし【一夏】がいたら【篝】に、ひとりじめされてたかも知れない  
と思い、今【一夏】が居ないことに【鈴】と【セシリア】は感謝を  
した。

『どねどね』

【篝】と同じく【セシリア】【鈴】も扉に耳を当てた。

『確かにいないわね。』

『そうですね。』

『【篠ノ之】さん【オルコット】さん【凰】さん』

ギクッ!!

そこには【山田】先生がいた。一緒に【織斑】先生が居ないことにホッと胸を撫で下ろした。

『健全な男の子の部屋を盗み聞くのは感心しませんよ。』

『ち、違います。まだ消灯時間ではなのに【一夏】から返事がないので寝たのかなと思って。』

『あれ？【織斑】君ならさっき向こうに行きましたよ。』

『『『え？』』』

【山田】先生がさした方向は寮生の部屋だけしかないのだ。

はっ!?!?

(まさか【一夏】私たちの知らない女と仲良くなっているのか!！)

(そいつはどこのどいつよ!)

(【一夏】さん!！私達よりもその女を選ぶのですか!？)

そして3人はその方向に走っていった。もはや【織斑】先生が居ようが居まいが関係なかった。

『あつ!皆さん走らないで下さい。』

そんな言葉は彼女らには聞こえていなかった。

『負けたー!。』

『【亮平】は大富豪よわいな、それに比べ【シャルル】は強いな。』

『そ、そう。たまたま強い手札だったんだよ。』

『俺、お茶入れてくる。』

そう言い【亮平】は沸かしたお湯を取りに行った。

ピンポーン ピンポーン ピンポーン

『誰だ？騒々しいな。』

ドアを開けようとした。【亮平】の手が止まった。ドアの向こうには聞き覚えのある声が聞こえた。

『はあ~~~~』

『どうしたんだ【亮平】 誰なんだ？』

不思議に思った【一夏】が【亮平】のところに来て来た。

『お前に用だ。』

『？』

何を言っているのかさっぱりわからない【一夏】は取り敢えずドアを開けた。ベッドに戻った【亮平】は入れたばかりの暑いお茶を一気に飲み干した。

その行動を【シャルル】が不安そうに見ていた。

『大丈夫？』

『ああ、もう溜め息しか出てこないは。』

そしてドアが開いた。

『ここで良いんだな。』

『情報が正しければ【一夏】さんはこの部屋に入ったようです。』

あの後 【箒】 【セシリア】 【鈴】 は片っ端から部屋の確認と情報収集をして、やっとの思い出ここまで来ることが出来た。

『 【一夏】 さんを、たぶらかすなんてどこの女狐ですこと!?!? 』

『 あんたも対して変わらないじゃない。 』

『 【鈴】 さんそれはどう言う意味ですか!?!? 』

『 別に言葉のままの意味だけど。 』

『 なんですって? 』

『 静かに。では鳴らすぞ。 』

【箒】 の言葉に2人は黙りその様子を見守った。

ピンポーン ピンポーン ピンポーン

『それより見つけたらどうするの?』

『もちろん【一夏】の腐りきった性根を叩き直してやる。』

『そして女狐をもう二度と学校に来れないようにするのですわ。』

『あんたら以外にエグいわね。』

そしてドアが開いた。

『【一夏】!!』

『【一夏】!!』

『【一夏】さん!!』

『どうした? 3人ともそんなに慌てて。』

『【一夏】お前あの女に何をされた?』

『あの女って誰だ?』

『【一夏】！！女狐はどこにいるのよ殺してやる。』

『女狐、何のことだ？』

『とにかく失礼します。』

そして3人は一気に部屋に入った。

『あつ、みんなどうしたの？』

そこにはお茶を飲んでいる【シャルル】と頭を抱える【亮平】がいた。

3人の脳はありとあらゆる方法でこの状況を推測していた。

そして【鈴】が

『ここあんたらの部屋だったの？』

『お前らはわからないでここに来たのか？』

『それより【鈴】女狐ってなんだ？』



『あ、あれはえっーと何でもないわ。』

『そうですか。私達はてつきり。』

『てつきりなんだよ』

『あつ！わかった。もしかして【一夏】が知らない女の子とっ！？』

『あんたは余計なことを言わなくてもいいのよ！！』

『どの口がそのようなことを仰いましたか？』

最後まで喋らない内に一斉に【シャルル】の口を閉じた。

『俺は1人で居るのも暇だったから、せっかく男子が増えたんだから一緒に遊ぼうと思っつてな。』

『そうだったのか、なるほどな。』

『なら私達も一緒に親睦を深めましょう。』

『そうだな大勢の方が楽しいいな。』

【亮平】と【シャルル】の部屋は瞬く間に騒がしくなっていた。

『てめーら少しは遠慮って事を知れー？』

ボタン！！

『何をしているもう消灯時間は過ぎていくぞ。』

そこには【織斑】先生が、そして時計を見つめると消灯時間から既に30分オーバーしていた。

『お前らは余程私を怒らせるのが好きなようだな。なあ【篠ノ之】

【オルコット】【凰】【織斑】』

【織斑】先生の後ろでは、どす黒く禍々しいオーラが空間を歪めていた。

『お前からしていい。』

『はい。』

『【和泉】【デュノア】、今日は多目に見てやるわっとなと寝る。』

『はい。』

いっつして風は過ぎ去り長い長い、1日が幕を閉じた。

## 6話 これから

【亮平】は寝ていなかった。実際は今日の昼休みに【織斑】先生から、ある事を聞かされ眠ることが出来なかった。

【亮平】はそれを思い出していた。

### 昼休み階段

【亮平】は呼び出しをくらったので指導室に行っていた。大体何の為に呼び出したのかはわかっていた。

（はぁリンクスだったこともうばれたのか？まあ少し早い気もするけど、こんなもんか。）

リンクスは所属している国、又は所属している国の同盟国以外での入国は固く禁じられている。

さらに日本ではリンクスはおろか、IS関係者すら入国は厳しく唯一入国できるのは各国の上層部、全員合わせても10人程度だけだ。例えば日本人でも例外ではない。もとリンクスなら誰で有ろうと入国

できない。もし破れば死刑は免れない。

( まあいざとなればISで逃げればいつか。 )

『 失礼します』

そして【亮平】は指導室に入っていった。

そこは会議室らしく、大きな机で真ん中だけが空洞になっていた。昼なのに暗幕のカーテンが引かれ照明がついて一番奥に【織斑】先生がたっていた。

『 来い』

『 なんででしょうか?』

『 これを見る』

【亮平】は【織斑】先生から数枚の写真と資料を受け取った。顔は見えないが、黒いネクストが写っていた。

『これは？』

『ここ1ヶ月、アメリカ・中国・イギリス・フランスの様々な地域でそのネクストによる攻撃を受けている』

『どこに所属しているネクスト何ですか？』

『調べてみたがどこの企業にも該当する機体はなかった』

『どこにも属していないネクストか。見たところ、レイレナード製ですけど今でも使う奴がいたんだ』

『この他にも数機確認されている』

【亮平】はパラパラとめぐりながら見ていた。

『この体格って男っぽくないですか？』

『ああ、たしかにこんな体格の女は見たことがない。だがいないとも限らん』

『たしかにそうかもしれませんが、目的は何なんですか？』

『わからん、だがIS関係施設だけが狙われている。今の所日本に被害はない。それと未確認だがAFも確認されている』

『って言う事は企業が裏で糸を引いてるってことか。一番怪しいのはGA辺りですか？』

『確かにGAからの被害がすくないな』

GAとは第2世代ISの世界シェアを誇っているが第3世代ではなかなか開発まで着手する事が出来ないで低迷していて裏で密輸や裏取引などを行っている噂が流れている。

『まあそちらは調べておこう』

『【和泉】お前はこれをどうみる』

『まだ行動目的がはっきりしないからわかりません』

『ってなんでこんなこと俺に聞くんですか？』

『私が何も知らないと思っていたか？』

『えっ？』

『世界でISを使える男が3人になりしかも2人は日本人だ帰国したなら今までの動向を調べない筈がないだろ』

『と言う事は俺がラインアークの専属リンクスってことも？』

『当たりまえだ』

『しかもお前は【デュノア】と違って後ろ楯がないからな』

『後ろ楯？』

『【デュノア】の場合デュノア社から正式に資料が出てきてこちらからは調べることが出来ないことになっている。

ただ、この時期に【デュノア】が編入されたのが気になるが』

『へ〜〜なんで今ここにいるのに俺は無事なんです？』



『被害が出始めてから私もこの資料を見て、男かと疑問に感じた。そしたら丁度良い時期にお前が来てくれたから利用さしてもらった』

『ひでえ。まあ俺は特記事項のお陰で三年間楽しく学園生活を送れるからいつか!』

『調子に乗るなよガキ』

【織斑】先生は一段と冷徹な言葉で一瞥した。

『その気になれば退学させ牢獄にぶちこむこともできる。そのことを忘れるな』

『はい。それでなんで転校さしてくれたんです?』

『もし仮にあれが男だとしたら、【一夏】に接触する可能性が高い』

『だから俺に警護を?』

『そつだ』

【亮平】は改めて、この先生の恐ろしさがあった。

『あの一拒否権は？』

『ない！！』

試しに聞いては見たが見事に断られてしまった。

『なるべく一緒にいるだけで良い何かあったらすぐに報告しろ』

『はい。では失礼します』

『ああよろしく頼む』

最後の【織斑】先生の表情は、まさに弟を心配する姉の顔であった。

【亮平】は布団から起き上がり時計を見た。時刻は既に3時を過ぎ

ていた。

【シャルル】は寝息をたてながら静かに眠っている。

(明日もあるから一杯水を飲んで寝るか)

ジャー

キュッ

ゴクッ

『なんか外は大変な事になっているな、ここまで飛び火しなきゃいけない』

ボフッ

そしてまた【亮平】は布団にダイブし眠りについた。

本編はこれで終わりです。

ここからは、これから現れる兵器や企業について簡単に説明します。

#### 【企業】

主に【GA】 【オーメル】 【インテリオル】の3つのグループに別れている。

#### 【GA】グループ

#### 【GAアメリカ】

北米アメリカ最大の企業。IS第2世代生産最高のシェアを持つが、世界が第3世代に入った今、なかなか着手出来ずにいて苦悩している。【デュノア】社とは深い同盟関係にある。

#### 【MSACインターナショナル】

GAグループの企業価値一端を担うと言われるほど重要視され、電算機 センサーなどの電子系を母体とするハイテク企業。

#### 【クーガ】

ロケットエンジン技術に専門性を発揮する軍事企業。

【BFF】

アメリカ第2の規模を誇る企業。民族的な対立を引きずっている【オメル】との折り合いが悪い。

【オメル】グループ

【オメル・サイエンス・テクノロジー】

西アジア発祥の企業。昔壊滅した【レイルナード】を取り込み力を  
ました。  
一時まで【ローゼンタール】を前に立てていたが近年ではグループ  
のトップとしている。

【ローゼンタール】

凡用的でバランス感覚に優れ、象徴性を重視した兵器を製造している。

【アルゼブラ】

南アジアを実質支配している企業。【オームル】グループの一員として扱われているが、【オームル】との関係は同盟に近く、独自色を持つ近距離戦闘を重視した兵器を開発。

#### 【テクノラート】

ロシアの軍事企業。ロシアの軍備の9割を占めている巨大企業だ。今は【アルゼブラ】の傘下にある。

#### 【インテリオル】グループ

#### 【インテリオル・ユニオン】

ヨーロッパ第1の企業で様々な事業をしている複合企業でもある。近年独自のAFを使ったなどの噂が流れている。

#### 【アルドラ】

ヨーロッパの重工軍事企業。【インテリオル】グループの中では比較的実弾を重視している。

#### 【トーラス】

【インテリオル・ユニオン】の支援を受け成立した新興企業。エネルギー分野、ハイテク分野、特にコジマ技術に高い専門性を発揮す

る。

その他

【デュノア】社

ヨーロッパでは珍しく【G A】に所属している。第3世代での技術水準が低く兵器のほとんどが第2世代だ。裏では密輸や裏取引などの黒い噂が流れている。

中では【G A】も癒着しているとか。

【レイルナード】

昔【篠ノ之 束】によって壊滅された企業。

理由は初代A F【ソルディオス】を開発した為らしい。ORCA旅談の謎の男？が操縦している機体の企業。

【ライン・アーク】

企業による支配とクレイドルを批判する地上最大の勢力、自由と民主主義をかかげているため3大勢力からは敵視されている。

世界は未だに【G A】グループがトップに立っている

しかし第3世代に入ったISによって【オーメル】や【インテリオ

ル】が成長しているのが現状で近々トップは【オーメル】になると予想されている。

地域別に見ると

アメリカが【G A】グループ

ヨーロッパが【インテリオル】グループ

アジアが【オーメル】

の形で別れている。



## 6話 これから(後書き)

次回から遂に【ラウラ】が登場？

そしてORCA旅団のクロースプランが始動するとかしないとか

7話 『私は認めん』(前書き)

やっと出て来ます【ラウラ】

## 7話 『私は認めん』

昨日も昨日で大変だったが、今日も朝から大変であった。

新たな転入生【ラウラ・ボーデヴィヒ】その生徒は昔【織斑】先生がドイツで教官として【ラウラ】を指導していたらしい。だから【織斑】先生のことと教官と呼んでいる。

それだけなら2日連続転校生となり不思議なクラスで終るが、『私はお前を教官の弟と認めない！』と言い【一夏】の頬に平手打ちをしたのだ、もちろんそれを見てた恋心を抱く【セシリア】と【篝】の2人の怒りのボルテージはMAXになったのだ。

現在 放課後 アリーナ

【一夏】

【亮平】

【シャルル】

【篝】

【セシリア】

【鈴】の

6人がアリーナで【一夏】の特訓を手伝っていたが、その内3人は怒り心頭でISについて教えていた。

『だから！！シュツと避けてサツと行ってバキツとするのだ。何故そんなこともわからんのだ？』

『感覚よ感覚あんたの頭じゃたいした事考えられないんだから？』

『もう1回教えてさしあげますわ。まず一時的にイグニッションブーイストをし、そのあと斜め45度上昇し切りつけるのです。何故1度で理解できないんですか？』

怒りの矛先は【ラウラ】から【一夏】へと変わった。これはほとんど八つ当たり状態に近かった。

（俺なんかしたか？.....）

.....駄目だ思い出せない。って言うか全く身に覚えがない

『『『ちよつと！！聞いてるの？』』』

『はい！聞いています』

『はあく〜あいつも大変だな。もしかして毎日あんな事してるのか？』

『僕ちょっと助けに行って来るよ』

『おお、行ってらっしゃい』

『【一夏】一回僕と相手してくれない？』

『ああ良いぜ。悪い少し待っててくれ』

3人を差し置いて【一夏】と【シャルル】は一戦交えはじめた。

『うおー』

開始直後【一夏】は雪片二型を構え突進を始めた。

【シャルル】はライフルを二挺構え、【一夏】が追い付かないスピードで下がりながら、ライフルを撃ち様子を見ることにした。

【一夏】は【シャルル】のライフルでエネルギーを消費するが怯まず突っ込んで行った。

だがいつこうに追い付かず段々奇立ちしはじめた。

『くそっ』

【一夏】は我慢しきれずにイグニッションブーストを使用し一気に近ずき【シャルル】に一閃入れようとした。

『いつけえー！！』

だが【シャルル】はその行動を読んでいたかのように、一気に上昇した。

【一夏】の雪片二型は獲物が空に逃げてしまい空振りをしバランスを崩してしまった。

【シャルル】は反転し同時に両手をマシンガンに換え【一夏】のエネルギーを鉛の雨で奪っていった。

『くっ！まだまだあ！！』

【一夏】は一度態勢を立て直す為にイグニッションブーストで距離を取った。

『甘いよ【一夏】！！』

【シャルル】は次にスナイパーライフルに切り替え狙撃し始めた。  
【一夏】のイグニッションブーストが逆に裏目に出てしまったのだ。  
【一夏】が失敗だと思った時には遅かった。正確無比な射撃によってエネルギーは0になった。

『【一夏】は突っ込み過ぎなんだよ』

『確かにそれはあるな！刀一本で突進しかしないなら犬でもできるからな』

ガクッ

『そこまで言わなくなった』

『イグニッションブーストをもっと上手く使わなきゃ』

【亮平】はスナイパーライフルとライフルを出した。

『まあ撃つてみる』

ライフルを【一夏】に渡した。

『これって俺が使えるのか？』

『ああ本人が承認したなら基本的には使える』

『これで良いのか？』

『もうちょっと脇を閉めて肩の力を抜いて。　そう』

そして【一夏】は50m先の簡易ターゲットに狙いを定め次々と射ち始めた。

バンッ！！

バンッ！！

バンッ！！



バンツ！！

『ふう』

『まあまあだな　じゃあ次にスナイパーライフルだな』

『おっ』

バンツ！！  
バンツ！！

バンツ！！  
バンツ！！

『お〜〜こんなに感じが違うんだな、なんかこうこっちの方が速いな！』

『やっとわかったか。スナイパーライフルは普通のライフルと違って射程距離やエネルギー防御の貫通性が高いんだよ』

『でも【一夏】の射撃センスって良いよね』

『このまま俺も銃を使った戦闘で、学園1位目指すか!』

ゴン!!

『調子に乗るな!』

笑い合っている3人を見ていた、端っこの3人が怒りを露にしていた。

『なんで【亮平】と【シャルル】の言葉なら素直に聞くのよ』

『納得出来ませんわ。私の論理的な説明がなんで理解できないんですか』

ピンポンパンピンポン

『【デュノア】君【織斑】君【和泉】君すぐに研究室に来て下さい』

『なんだ？』

『取り敢えず行って見よう』

『じゃすぐに戻って来るから』

『ぬぐぐぐぐぐぐぐぐぐ』

【箒】 【セシリア】 【鈴】 は録な返事が出来ないまま3人を見送る事になってしまった。

『あーーもうっ？ イライラする』

【鈴】 はガンツガンツとアリーナなの壁を蹴りながら鬱憤を晴らしていた。

『【鈴】さん今回は私も怒りが収まりませんわ。一戦しましょう』

『今の私は手加減出来ないわよ！！』

『ふん！―上等ですわ』

『中国の甲龍とイギリスのブルーティアーズが資料の方がよっぽど様になっているな』

アリーナの二階部分にあたるハンガーから【ラウラ】が見下しながら一言吐いた。

『【ラウラ・ボーデヴィヒ】』

『あいつが【一夏】をぶった奴ね』

『少し相手をしてやる かかって来い』

『【鈴】さん引っ込んでいてくれませんか？あれは私がやらしてもらいます』

『何言ってるの私がやるに決まってるでしょうが！―！』

『ふん！！私は2人係で構わないぞどうだ？かかってきて来い』

『は？何あいつどうぞ思う存分私を叩きのめしてください。って言うている様に聞こえたんだけど』

『【鈴】さん転校生ですよ、きっと何もわからないから頭が混乱してるのでしょ』

『ふん！！やはりなああの教官の唯一の汚点と同様大したことはないな所詮は烏合の衆か』

『あんた汚点って誰の事よ！！』

『返答次第ではただじゃ起きませんわ』

汚点が誰の事かは【セシリア】も【鈴】もすぐにわかった。そして【一夏】を馬鹿にされ【セシリア】も冷静ではいらなかった。

『茶番はいいからさっさとかかって来い』

『望み通り叩きのめしてあげますわ』



8話 『ラブリ』 (前書き)

最近キャラの性格がこれで良いのかと疑問に思う時があります。

8話 『ラウラ』――!』

その頃 研究室

資料のチェックとISデータを上層部に提出するらしくて急遽データを収集するはめになったらしい。  
そして今は最終チェックの結果待ちである。

『そう言えばなんで【亮平】はなんで学年別トーナメントでれないの?』

『えっ? 【亮平】出ないのか?』

『なんか俺の手続きだけ遅れているらしいんだ』

『災難だな』

『まあこれで終わりって訳じゃ無いから別に良いんだけどな』



そこ女性の研究員が小走りでこちらに駆けつけて来た。

『チエックが済みました以上で終わりです。急に呼び出してすみませんでした。』

研究員は深く一礼してすぐに走り去ってしまった。

3人はアリーナに戻るため研究室を後にした。

『じゃ行くか!?!』

『あいつらまだいるかな?』

『カンカンに怒っているんじゃないか?』

『僕もそんな気がする』

『ん?どうしてだ?』

『【一夏】それは素なのか、それともわざとなのか?』

『駄目だよ【亮平】、【一夏】は全く気づいていないから』

『だろうな、戻ったらなんか一言かけてやれよ』

『「ただいま」だろ?』

ガクッ

2人が一気に落胆し頭をおとした。

(こりゃ結構な唐変木っプリだな)

(【箒】や【鈴】は昔からいるのに気づいてもらえてないんでしょ  
?あれはきつと治らないよ)

などを小声で囁きながら【一夏】を見ていた

『どっした?』

『いや なんでもない、なんでもない』

いつの間にかアリーナの入り口まで来ており、いつも通り更衣室からアリーナに入ろうとしたが、何やら騒がしかった。

『誰か闘っているのか？』

『たぶん【セシリア】と【鈴】だと思っよ』

『きつとそれだな』

『じゃ少し2人の戦いでも観覧席で見に行ってみるか』

『そうだね。【亮平】はどうするっ？』

『俺は先にアリーナに入ってるわ』

『わかった』

『じゃあね』

そして【亮平】は【一夏】と【シャルル】と別れ1人ハンガーに向

かった。

ハンガーには【篝】が拳を硬く握りながらそちらを見ていた。何だと思い【亮平】もそちらに向いた。

ブルーティアーズと甲龍は【ラウラ】のISシュバルツレーゲンと闘っていた。

だが闘いと呼ぶにはあまりにも酷かった。

【セシリア】と【鈴】のISのダメージ負荷が限界まで達しそうなためアラームがひっきりなしに鳴っている。

ダメージが限界まで達するとISは解除される。本来ならば鳴った時点で闘いを止めなければならぬが止めていない。

【ラウラ】は【セシリア】達の首をシュバルツ・レーゲンのワイヤーで固定し自由を奪ってさらに近接戦で追い撃ちをかけていた。

なぜ誰も助けに行かないかやっと理解できた。

専用機持ちの2人があんな目にあっているのだ、他の者が行っても状況は変わらない、むしろ無闇に行くと逆に状況を悪くしかねない。それがわかっているから【篝】は何も出来ずに見ていたのだ。

『【ラウラ・ボーデヴィヒ！！】』

【亮平】の声に【ラウラ】は殴るのを辞めた。

『ほう！【和泉亮平】元リンクスか、お前の方が少し相手になる

だろう』

【ラウラ】は【セシリア】と【鈴】を放り投げレールカノンの照準をこちらに合わせ始めた。

【セシリア】と【鈴】は投げられ地面に一回バウンドしたのと同様にISが解除された。

あのままあれが続いていたらどうなっていたかわからなかった、最悪の結果になっていたかも知れない。

観覧席に到着した【一夏】と【シャルル】も同じく驚いていた。

『えっ!!!!どうなっているの?』

疑問に思った【シャルル】をよそに何かを察知した【一夏】は白式を機動して観覧席の透明な防御壁を雪片式型で破壊し【ラウラ】に一直線に向かって行った。

『【ラウラ】ー!!!!』

【一夏】に気づいた【ラウラ】は【亮平】に撃つのをやめ突っ込んで来た【一夏】に向かってAICを発動し動きを抑えた。

『なんだこれ？動けねー』

『お前がいなければ教官は！！』

その瞬間【一夏】の目の前にシュバルツ・レーゲンのレールカノンが姿を表した。

AICで動けなかった【一夏】に避ける事は出来なかった。

『死ね！！』

『つつ！！』

【一夏】は目を閉じた。  
レールカノンが発射される直前に

バンツ！！バンツ！！  
バンツ！！バンツ！！

『くっ！！』

【ラウラ】は背後から【亮平】のライフルをくらい、その衝撃でバ

ランスを崩しAICが解除されなんとか【一夏】は脱出ができた。

『【一夏】！！【セシリア】と【鈴】を頼む！！』

『おっ！わかった』

『逃がすと思うか！！』

【ラウラ】はレールカノンの照準を【一夏】に合わせ撃った。

ドオン！！

当たってはいなかったロックオンをされた事を知った瞬間【一夏】はイグニッションブーストをしてなんとか避けた。

『【亮平】！！』

一足遅れて【シャルル】が【亮平】の横に到着した。

『【シャルル】【一夏】の援護に回ってくれ』

『えっ?でもっ』

『頼む』

『……………わかった』

『元リンクスと闘うのは始めだが、1人だけで良いのか?』

『お前がいつ【一夏】を狙うかわからないからな』

『お前をさっさとやって【織斑一夏】を倒しに行く』

『元リンクス嘗めない方が良いぞ』

【ラウラ】と【亮平】はただ立っていた。

だが2人の周りの空気はピリピリとして見ているものは無駄に唾を飲んでしまう程の緊張感にあった。

距離にしておよそ10m。

ビュン!!



かまいたちの如く【亮平】は【ラウラ】に向かって真っ正面にQBを行った。

『お前も考えなしのバカだったか』

【ラウラ】はAICを発動するため右手を【亮平】にかざした。

ビュン

『なに!?!』

AICに捕まるはずだった【亮平】は【ラウラ】から見て左手におり既に【ラウラ】の方に向けてライフルを構えていた。

【亮平】は接触する寸前にもう1回右にQBをし、さらにその余力を使いターンをしたのだ。

距離を取られ更に相手に不意を突かれた【ラウラ】がレールカノンを構えた時には遅かった。

【亮平】は分裂ミサイルを発射していた。

ドゴオン！！

辺り一面に小さなクレーターが幾つも出来ていて、砂埃と塵が舞っていた。

『なかなかやるな』

『元が付いてもリンクスだからな一応』

この撃つか撃たれるかの状況下で職業柄か本能か、元リンクスと生まれながらの軍人は楽しんでいた。

シュバルツ・レーゲンから複数のワイヤーが飛び出し上空から【亮平】を襲った。

ドスッ！！ドスッ！！  
ドスッ！！

【亮平】はジグザグにQBを行いながら移動しワイヤーを避けつつライフルを撃ち続けた。【ラウラ】はワイヤーを操作すると同時にレールカノンで【亮平】近くの地面を数発撃った。

【亮平】は砂埃で何も見えなくなっていた。

『ちっ』

『捕まえたぞ』

【亮平】は砂埃で何も見えなかった所、突如黒い影が現れとっさに下がろうとしたが【ラウラ】のAICを発動の方が速かった。

『『【亮平】！！』』

【一夏】と【シャルル】が2人をなんとか無事な所まで届けた。  
が【亮平】との距離が離れ過ぎていて、いくら白式のスピードがあつても5秒以上かかってしまう。

『あつけないものだな「元」リンクス』

ニヤリ

【ラウラ】には【亮平】の笑みが理解できなかつた。

(所詮はったりだ)

【ラウラ】はレールカノンを構えた。対する【亮平】はPAの展開

をやめた。

?????

ますます【ラウラ】は理解が出来なくなつた。

ホワイト・グリントのコアにコジマ粒子が集まり【亮平】を30cm程の膜で覆つた。

『やめんか!』』

アリーナの隅から隅まで聞こえそうな声が【亮平】と【ラウラ】の闘いに終止符を打たせた。  
そこによつやく【一夏】と【シャルル】も着いた。

『【千冬】姉……』

『学校では【織斑】先生と呼べと言つてるだろ』

『はー』

『練習は構わん、だがアリーナを破壊する事態になれば止めない訳に行かないわかるな？』

『『『『はい』』』』

『この決着は学年別トーナメントでつける。良いな』

『ああ』

『教師にはハイと言えと言っているだろ！！』

『はい』

『教官がそう仰るのであれば』

『【デュノア】もそれで良いな』

『はい』

『ではこの件はこれで終了だ』

こうして【ラウラ】が売り【セシリア】と【鈴】が買った喧嘩は結果は【ラウラ】の圧勝。

その後の【亮平】とは決着がつかず引き分けという形で幕を閉じた。

9話 『ありがとう』

アリーナ更衣室

『あれ？【一夏】はどうしたの』

『【一夏】なら2人が心配だから先に上がって病院の方に行ったよ』

『そう。……………じゃあ僕も行くね』

『【シャルル】』

『何に？』

『何でいつもアリーナのシャワー使わないでわざわざ遠い寮の使ってたんだ？』

『今日ぐらい一緒に浴びようぜ、なっ！！』

【亮平】が【シャルル】と肩を組んだ瞬間

『あ、あ、うわぁー！』

【シャルル】はビクツと跳ね上がり血相を変え走り去ってしまった。

『何なんだあいつ？』

寮の廊下

(バレたかな嫌バレてはいないよね うん)

心の中でそう呟きながら【シャルル】は廊下を歩いていた。

『後で【亮平】に謝っとかなきゃ』

【シャルル】は自室に戻り暫くベッドの上で横になってた。



『……………シャワーに入るう』

ブルルル、ブルルル

その時【シャルル】の携帯がなった。

『はい』

『【シャルル】様お久しぶりです。例の件ですがお父上様が急いでいます。早急にデータの収集をお願いします』

聞き覚えのある声が聞こえ【シャルル】の様子が急変した。

『……………うん わかってる』

男の声のトーンは変わらずに常に一定のテンポで喋り続けた。

『もう1つ情報があります。【デュノア】様が転校した時、もう1人男【和泉亮平】が転校してきましたね』

『うん』

『その男は元ラインアークに属していたリンクスです。』

『えっ?』

『ラインアークと我が社の関係は最悪です。 奴等の弱点を知るためにもそいつのISのデータもお願いします』

『……………』

『お父様もあなたの事を期待しています。 期待を裏切らないようお願いします』

『わかってる』

ツーツーツー

【シャルル】は携帯をベッドに投げシャワーを浴びに行った。

【シャルル】は悩んでいた。このままみんなを騙し続け学園生活を送るか、家系や過去の事を全て消し去り一からまたやり直すか、自問自答を繰り返していた。

病院

『よお！！大丈夫か？』

『【亮平】なにしに来たの』

『別にちょっと心配だから来たんだよ』

『ふーん！あなたにも優しさがあるんだ』

『お前俺を何だと思ってるんだ』

『一つ疑問に思ったのですが【亮平】さんあんた最後に使おうとした緑色のやつ何なのですか。』

『あ~~~~あれはなアサルトアーマ(AA)って言うやつだ』

『それはどんなやつなんですか?』

『それは企業秘密』

『は?』

『それより何であそこまで酷いやられ方になったんだ?いくら頭に血が昇っているからって』

亮平は慌てて話題を反らし始めた、それに【一夏】も加わり完璧に話が変わり【亮平】は安堵した。

『そつだよ2人とも強いのかな』

『わかった！もしかしてお前ら【一夏】の事をバツかわあ』

『あんた本当に一言多いわね！！』

『その口なんとかならないんですの！！』

話を最後まで言い終わる前に【セシリア】と【鈴】は【亮平】を抑えた。

『おいおい2人ともいくら傷が浅いからって暴れる必要ないだろ』

その時だ

地震か？そんな事を思わせる程の地鳴りが治療所いっぱいに響いた。  
ダンッ！！

扉が開くのと同時に部屋いっぱいに女子が集まった。

『何なんだ？』

『これ!?!』

『はっ?』

そこには学年別トーナメント変更のお知らせが書かれていた。

『なになに、今回のトーナメント戦ではより実践に近づけるため二人一組とする。』

『【織斑】君私と組もう』

『悪い俺【シャルル】ともう約束しちゃったんだ』

『ん〜ならしょうがないっか他の女子に盗られるより断然いっか!?!』

『じゃあ【和泉】君一緒に組もう』

）”じゃあ“って俺はついでかよ（

『俺は手続き上の都合で出れないんだよ』

“む〜”とふてくされながら女子達はゾロゾロと去っていった。

『お前いつ【シャルル】と約束したんだ？』

『いや、ついとっさに口走っちゃまった』

『では約束してないのですね！〜！』

その言葉に【セシリア】と【鈴】はグイッと【一夏】に寄った。

『なら私と組むわよ』【一夏】

『いえ、』【一夏】さん私と組みましょう』

（うわ〜）【一夏】のやつスゲーモテモテだなおい（

『駄目ですよ!』』

入り口の前には【山田】先生が立っており【セシリア】と【鈴】に注意した。

『【オルコット】さんと【凰】さんの機体ダメージレベルがBに達しています。その程度の怪我で済んだのもほとんど奇跡に近いんですから』

『うっ』

『悔しいですわ』

このままでは【一夏】を他の女子に取られてしまう、【尊】と組んでしまったら最悪だ。しかも優勝なんてしてしまったら付き合ってしまう。

出場出来ない2人にとってそれだけは避けたかった。

『じゃ【一夏】あんだ【シャルル】と組みなさいよ』

『そうですね。みんなに言ったのなら、それは守らねばなりませんわ』



『でも俺だけで勝手に決めても【シャルル】が迷惑するだろ』

『なら俺から後で聞いといてやるよ』

(ナイスですわ【亮平】さん)

(あんたたまには役に立つじゃない)

『そうか、じゃよろしく』

【セシリア】と【鈴】の治療が終わるまで待とうとしたが、まだまだかかりそうなので【一夏】と【亮平】は先に寮に戻る事にした。

『それにしても大事にいたらくて良かったな』

『全くだ。ただ心残りなのは……………』

『？』

『【織斑】先生の乱入で、あいつとの決着がつかなかったことだ』

バタツ！！

【一夏】は寮の入り口の段差につまずいてしまった。

『どうしたんだよ【一夏】体調でも悪いのか？』

『いや何でもない、そして俺は何も聞いていない』

『は？』

『あっそうだ！今日も後で遊びに行つて良いか』

『え〜〜また来るのかよ。騒がしいのは連れて来るなよ』

『なるべく連れて来ないようにするよ。それじゃまた後で』

『おっ』

【亮平】と【一夏】は互いの部屋の方に曲がり

ガチャ

『ただいま』

ガタッ

ガタッ

どうやら【シャルル】はシャワーを浴びてるらしい。【亮平】は奥  
に行こうと歩き出したとたん

ボタンー！

『ジャージ忘れちゃった。』

バスルームから【シャルル】が下着姿で飛び出して来たのだ。

【亮平】の存在に気づいた【シャルル】はその場で硬直してしまっ  
た。

【亮平】の方も【シャルル】の姿を見て放心状態となっていた。【  
亮平】は昨日もジャージを着ていた【シャルル】の姿を見てた制服  
を着た姿も見てた、なのに何も来ていない時の方が胸が大きい様に  
見える。

って言うか普通に大きい！！

バタン！！

スーハー

【亮平】は部屋を飛び出し一回深呼吸をし落ち着くように自分に命  
令した。

そして覚悟を決めもう一度扉を開けた。

そこには普段と同じ様にジャージを着てベッドに座っている【シャ  
ルル】がいた。だが胸は大きい。

『ただいま』

『お、おかえり』

【亮平】は迷った。自分の部屋なのだがまるで未開の地に1人放り投げられた気分だった。取り敢えず【亮平】はベッドに座り黙っていた。

【亮平】に落ち着きが戻ってきて今置かれてる状況を整理し何となく理解する事ができた。

『僕はね……………』

ふと【シャルル】が話し始めた。

『本妻の子じゃないんだ。母が死んだときに父の部下の人から迎えが来てデュノアの養子になったんだ。実際にお父様と会って話したのはほんの一時程度なただけだね。そして僕にIS適正が高いとわかるとISの訓練をさせたんだ、その後だよ……………』

直後【シャルル】の代わりに【亮平】が話し始めた。

『世界でISを使えると言う男が出たから父親からこの学園に男として転校しデータを盗んでこいと命令された。そんなところだろ』

『……………うん』

【シャルル】はこれから言う事を全て【亮平】に言われ呆然としそしてその推理力に驚いていた。

『で、お前はこれからどうしたいんだ？』

『……………』

『【シャルル】は女だとバレた今どうしたいんだ？』

『……………』

コンコン！

『不味い！！【シャルル】一先ずこっちに』

『入るぞ〜【シャルル】【亮平】まだ晩飯食ってないみたいだから一緒に食べようぜ…って、どうしたんだ【シャルル】具合でも悪いのか？』

咄嗟に【亮平】は【シャルル】をベッドに入れ何とか誤魔化した。

『ああちよつと具合が悪いつて言うもんだからな』

『大丈夫か？』

『うん。寝てれば治るから大丈夫だよ』

『そっか【亮平】どうする？』

『行くわ、準備するから先に行つててくれ』

『おっ』

ボタン

『ふうーなんかあったか』

『ありがとう』【亮平】

『礼は今言う事じゃない、それに【一夏】にもいつか本当の事を話せよ』

『うん……』

『じゃ行ってくる』

ボタン



一時間後

ずっと【亮平】の言っている事を思い出していた。

“お前はどっしたいんだ？”

(はあ〜〜僕はどっしたいのかな)

バタン

『ただいま』

『おかえり』

『あれ？【シャルル】胸隠したのか？』

『また誰か来たら困るしね。駄目だった？』

『いや、後で【一夏】が遊びに来るらしいから丁度良かったんじゃ

ないか』

（ ）【一夏】後でくるんだ

『それより晩飯持って来たぞ。』

『ありがとうこれって』

『そう蕎麦だ昨日【シャルル】食べたそつな顔をしてたからな』

『えっ僕そんな顔してた？』

『ああ「食べたい」って顔に書いてあったぞ』

『からかわないでよ』

『ハハハほら箸』

『ありがとうっ！っ！っ！』

『どつした？箸苦手なのか』

『練習はしているんだけど中々上手く出来なくて』

『しゃねーな、ほら箸を貸せ食べさせてやる』

『えっえっ！？いや、悪いよ』

【シャルル】は【亮平】に悪いと考え、断る思いよりも恥ずかしさで断る思いの方が強かった。

『【シャルル】は1人で何でも抱え込み過ぎなんだよ、もう少し他人を頼れよ』

『……………それとさっきは悪かったな昨日会ったばかりなのに』

『づづん、僕の方こそ……………』

『この話はまた後で話そう今はほら食べる』

『づづん』

ズルズルズルズル

『美味しいねこれ!!』

『……………ねえ【亮平】 僕ね答えはまだ出ないけど皆に話そうと思っただ、

どうするにせよこのまま嘘はついてたくなんだ』

『良いと思うぞ、 まああいつらには先に話して置くべきだな』

『うん』

『なあ【シャルル】俺からしたら何でそこまで親父に執着してるんだ？一時間も話した事ないんだろ』

『それでも僕の父親だから…………父がいなかったら僕は生まれなかった』

ダンッ!!

【亮平】はおもいきり箸を机に叩きつけ【シャルル】は思わずビッ!!…と反応してしまった。

『そりゃ親がいなかったら子はできない、そりゃあそうさ……だけどな親が命令したら子が絶対従わなくちゃいけない理由なんてない！親がダメなことをしているのなら尚更だ！！』

【亮平】の言葉に【シャルル】は呆然と聞いていた。

『子に罪を着せる奴を親なんて呼ばないんだよ！！』

『……………【亮平】ありがとう。僕の為にそこまで考えてくれて』

『別にこれは俺個人の考えだ、【シャルル】には【シャルル】の考えがあるだろ』

『でも僕の事なのにそこまで考えてくれて嬉しい。ありがとう【亮平】』

さっきまでの俯いていた表情と全然違う満面の笑みで【シャルル】は【亮平】に礼を言った。

(そう言えば女なんだよな【シャルル】って。

やばい女って意識したら妙に心臓の音が大きく聞こえてくる)

『?どつしたの【亮平】』

『な、何でもねえ』

コンコン

『誰かな?』

『【一夏】だろ……………どつする?【一夏】に本当の事……………』

『ごめん、まだ心の準備が出来ていないんだ』

『謝る必要なんてないだろ、今はその時じゃないだけだから』

『うん』

ガチャ

『何だ【亮平】も居るのか、何で出ないんだよ』

『ごめんごめん、今【シャルル】に蕎麦食わしてたんだよ』

『そうだったのか邪魔して悪かったな』

『邪魔じゃないよ、丁度今食べ終わったところだからね』

『じゃまたトランプでもするか』

『は？またトランプかよ』

『しゃねーだろこれしかなうんだから。あつ！！もしかして【亮平】  
また負けるからやりたくないんだろ』

『んなわけねーだろ。別に俺はトランプでも構わねーぞ！』

『【シャルル】もするか？』

『うん。やろうかな』

今ある幸せを大事にし、これから何をすべきかを改めて考えると【シャルル】は決心した。

10話 『どうした【メルツェル】』

アメリカ GA社

薄暗い一室で2人の男が佇んでいた。

『どうした【メルツェル】』

『時期もあるクローズプランを始めよう』

【メルツェル】と呼ばれている男は、もうひとりの男に淡々と告げた。

『その事だか……少しだけ待てないか？』

『パートナーか……』

『ああ一度見ておきたくてなそれに状況は既に手遅れだ、今更焦る必要もあるまい』

『ならば俺が見に行こう』

『



『お前がか……良いだろうヴァオーでも連れていけ』

『そうさしてもらおう』

日本 IS学園 アリーナ

学年別トーナメントまで残り2日

『だ……か……ら!!【一夏】お前全体を見てないんだよ、2対2のタッグ戦なんだからせめて相手2人がどこに居るか把握しとかなきゃタッグ戦の意味がないだろ』

この日も放課後はトーナメント戦に向けて【一夏】と【シャルル】は猛特訓をしているのであった。  
少し違う所はいつも居るはずの【篝】がないというぐらいだ。

『ちよつとタンマー!!これきつすぎだろ』

『はあ?あんたの実力じゃ優勝なんて夢のまた夢なんだから私達が直に教えてんでしようが』

(いや別に俺は優勝しようなんて思ってないんだけどな)

『なんか言った?』

ギクツ!?

『な、なんも言ってるええよ』

『【一夏】さん今の力では優勝出来ませんわ。私達の為にも頑張ってください!...!』

【セシリア】と【鈴】はISの使用は許可されているが、この前の喧嘩でトーナメントには出れないため【一夏】と【シャルル】をなんとかしても優勝させる為に【亮平】と交代で指導に当たっていた。

『ん?何で【セシリア】達が俺らのこと応援してるんだ?』

『えっ？いや…それは』

（ “他の女子が優勝すると【一夏】さんと付き合ってしまうからですわ”なんて言えるはずがありませんし…………… ）

『あれだろ【ラウラ】を倒して欲しいって事だろ？』

（ ナイスフォローですわ【亮平】さん！！ ）

【亮平】のフォローからさらに【シャルル】が一言付け加えた。

『確かに！！【ラウラ】が一年生で現時点最強かも知れないしね』

『でも【ラウラ】以外なら大したことないんじゃない？』

『たしかに【ラウラ】以外なら【シャルル】だけで行けるだろ』

『えっ！？それは流石に無理があるかも』

『まあ、いざとなれば【一夏】を盾にして【シャルル】が止めを刺せば良いんだよ』

『おい【亮平】今何って言った？』

『確かにその手もあるわね』

『へ??？』

【一夏】は【鈴】が【亮平】の意見に同意したのが意味不明だった。

『ですね。一番最適な闘い方かもしれませんね』

『へ??？』

【セシリア】も【鈴】の意見に賛成だったことで【一夏】はさらに啞然とした。

『ちょっと待てー!!!お前ら俺を何だと思ってんだよ!!!』

『違うよ【一夏】、【一夏】は1人だけを集中的に狙っていて、【

「一夏【が危なくなったら僕が助けに行くって事だよ』

『……………』

『【一夏【お前なんか勘違いしてないか？』

『……………』

【一夏】は自分が話の中心に居るのに乗り遅れてしまいとても惨めな気持ちでいっぱいになってしまった。

『鍵は【一夏】がどこまで相手の食らい付いて行けるかと【シャルル】の適格な援護が重要だな。

トーナメントなんだから気軽にやれば良いんだよ！！』

『そんなんでは駄目ですわ！！』

『そつよやるなら本気でやりなさいよ！！』

『2人ともやけに気合い入ってるんだな』

『えっいや別に!!!』

『そ、そんなことはありません』

『仇をとって欲しいんだろ?』

『ま、まあそう言う事になりますわ。あまり人に仇打ちなどは頼みたくありませんから』

『それならがんばらなくちゃいけないな』

『うん。頑張ろう【一夏】』

『よし!!ならまだまだ特訓するぞ』

『待て!!せめてもう少し休憩を』

『問答無用!!!!』

ドオオオオン!!!!

【亮平】はミサイルのハッチを開け【一夏】に盛大にミサイルをプレゼントしてあげたのだ。

アリーナ更衣室

『やっと終わったぁー』』

『お疲れ様【一夏】。はい』

【シャルル】は【一夏】にスポーツドリンクとタオルを渡した。

『おうサンキュー【シャルル】』

『たつく情けないな【一夏】は【シャルル】を見習え』

『無茶言つな!』

『それじゃあ僕は先に帰るね』

『おっ』

タッタッタッタッ

『なあなんで【シャルル】はこのシャワーを使わないでわざわざ  
寮に戻るんだ？』

『いろいろ事情があるんだろあいつにも』

『ふう〜ん』

『よいしょっ』

『なんだまだ練習するのか？』

『馬鹿言え【亮平】達のせいでやる気と体力が0だよ』

ピンポンパンパンポン



『【織斑】君【織斑】先生が呼んでいますので至急職員室まで来て  
ください』

『なんだ？』

『ほら呼んでるぞ、急がないとまた怒られるぞ』

『わかってるって』

『【一夏】は【亮平】に別れを告げてシャワー室を急ぎ足で去った。』

夜

【亮平】 【シャルル】 部屋

『あー美味しかった！！日本にはいっぱい美味しい料理があるんだ  
ね』

『だろ!!今度は寿司でも食べてみるよ』

『うん!!』

【亮平】と【シャルル】はお互いの正体があったが【シャルル】の考えが決まるまで普通に暮らそうと言っつ考えにした。

コンコン

ガチャ

『よお!!』

『またか、お前は他にする事ないのかよ』

『ない!!』

『はぁ~~~~まだうるさいのがないだけましか』

『お前何でそこまで嫌うんだ?』

『別に嫌いじゃないけどお前といるところさくなるから嫌なんだ』

【亮平】が愚痴りながら引き出しからトランプを取り出し【一夏】に渡した。

【一夏】は【シャルル】がうつ向いている事に気づき心配そうに訪ねた。

『大丈夫か【シャルル】』

『【一夏】話があるんだ』

(俺だけに……【亮平】にはもう話してあるのか?)

その後【シャルル】は【亮平】に話した事を一言一言静かに話していった。

『……………』

『……………』

『……………』

部屋は静寂に包まれた

【一夏】は不意に立ち上がり

『そんなの親が間違ってる!!』

【シャルル】がそんなことをする必要なんてない!!』

くすっ

シャルルがふと笑い【一夏】は首を傾げた。

『な、なんだよ』

『じめん【亮平】と似たような事を言っただもん』

『えっ。』

『はあ〜何でお前と考えが被るんだよ』

『仕方がないだろ別にパクったわけじゃないからな』

『だけどなー』

( 【亮平】 ったため息ばかりだな )

【亮平】の愚痴を聞き流し【一夏】は話を進めた

『じゃシャルルはこれからどうなるんだ？』

『わからない……………女だって2人にバレちゃったから本国に呼び戻されて牢屋入りかな』

『なら俺達が知らないふりをすれば済む話しだろ？』

『いや時間がたてば怪しまれるよ』

『ならどうすれば』

『解決方法ならある』

その言葉に【一夏】と【シャルル】は【亮平】の方を見た【亮平】は話しを続けた。

『俺が【シャルル】にホワイトグリンツのデータを渡しちゃえば良いんだよ』

『!?!?』

『どつと言つ事だよ!?!』

『さすがに白式のデータが流出したら一大事だ、その点ホワイトグリンツはまだ日本に属していないし以前に盗まれた事にすれば良いんだよ』

『そんなのだめだ!』

『最善の策だろそれに決めるのは俺達じゃない【シャルル】だ』

『駄目だよ!』』

【亮平】 【一夏】の会話に【シャルル】が割り込んできた。

『僕の為に誰かが傷つくなんて、それにあれからずっと考えていたんだ……』』

『答えは出たのか?』』

『うん僕はここにいたい。そして皆と一緒に生活して生きたいんだ』』

『それが【シャルル】の出した答えなら誰にも文句は言えないな』』

『でもいつまでも嘘を通せないだろ?』』

『なら大丈夫だ』』

『どっつして?』』

『これだ』』

【亮平】は鞆の中から手帳を取り出しパラパラとめくっていた。

『この手帳の特記事項によれば生徒は在学期間の三年間はあるとあらゆる機関、組織、団体に属さないんだ』

『と言う事は？』

『【シャルル】は三年間はデュノア社に属していないんだ、その間に解決法を探せば良いんだよ』

『なるほど！！』

『……………』  
【亮平】 【一夏】ありがとう僕のなんかの為に……  
まで考えてくれて』

『【シャルル】お前が困ったなら俺達は助けるぞ』



『友達だからな』

『ありがとう』

【シャルル】はもう一度【亮平】と【一夏】に深々と頭を下げお礼を言った。

『その事ですが……………やめさしてもらいます』

『何を寝ぼけた事を言っている！！事の重大さをお前はわかっているのか？』

『わかっています。それがいけない事だっことも、友達を裏切ることでも』

『お前誰かにそそのかされたのか？』

『誰かにもそそのかされてなんかいません自分の考えです』

『自分のしている事がわかっているのか？必ず後悔をすることになるぞ』

『友達を裏切る方が後悔します』

『貴様〜〜』

【亮平】は【シャルル】の携帯を取り上げ

『てめえの指図なんか受けねーよこれは【シャルル】が決めた事なんだから』

『誰だ貴様は』

『俺は元ラインアークのリンクスだ』

(ラインアーク？リンクス？【亮平】が？)

【一夏】には何を言っているのかわからなかった。だが【亮平】と【シャルル】の父親の会話は続いている。

『貴様が【シャルル】そそのかしたのか今すぐに【シャルル】と替われ』

『今さら親ぶってんじゃないね!』

バキッ

【亮平】は【シャルル】の父親にありとあらゆる文句を言い【シャルル】の携帯を反対方向におもいきり曲げゴミ箱に捨ててしまった。

『あー!』

『あー!ー!悪いつい腹がたっちまって』

『うつん別にいいよ元々電話以外で使うなって言われてたし』

『【シャルル】は【亮平】がリンクスだって知っていたのか?』

『うつん。』

『【亮平】お前何で俺には言わなかったんだよ』

『聞かれなかったから』

ゴンッ

【一夏】の怒りの鉄拳が【亮平】の頭部を直撃した。

『【シャルル】を見習え』

寮長部屋（【織斑】先生）

『何でいつも勝手な事をするんだお前は』

『ついその場ののりで』

ザクッザクッザクッ

【織斑】先生は容赦なく【亮平】にカッターやらシャーペンやらなにやら投げつけてきた

(何でこの姉弟はよく人に暴力を振るうんだよ)

『あつぶね〜』

『お前がややこしい事にしたからだ』

『それってどついつことですか』

『【デュノア】の父親は【デュノア】を返せと申し出てくるだろう』

『でも千冬姉【シャルル】は特記事項やらで守られているんだろ?』

(勤務時間外は千冬姉で良いんだ)

【亮平】は秘かにいらぬ知識を頭に入れ納得をしていた。

『だがそれと関係なく来るだろうな。  
たつくこつちの身も考えるバカ者』

『すみませんでした』

【亮平】は一応謝ったが後悔はしていなかった。

『今日の所はもう戻れ後はこっちでなんとかする』

『ありがとうございます』

【織斑】先生は1人椅子に座りテーブルに向かってお茶を飲んで  
いた。

(【デュノア】がまさか自分の口から告げるとはな、あれはきつと  
【亮平】が手助けしたのだろうな……………以外だな)

【織斑】先生はお茶を置き再び書類に目を通し始めた。  
これからの事を考えると【織斑】先生は憂鬱な気持ちなりかねない

でいた。

【亮平】 【シャルル】 部屋

『ふうーなんとかなったな』

『……………【亮平】』

『なんだ？』

『僕の本当の名前は【シャルロット】なんだ』

『それってつまり【シャルル】の母さんがつけた名前ってことか？』

『うん、それでね……………これから2人の時だけで良いから【シャルロット】って呼んで欲しいんだ』

『俺は良いけど【一夏】には言わなくて良いのか？』

『今は【亮平】だけに呼んで欲しいんだ』

【シャルロット】は顔を赤くさせながら【亮平】に頼んだ。

『あ、ま、まあ【シャルル】……………【シャルロット】がそれでも良  
いのなら俺はかまわないけど』

【シャルロット】は赤くさせた顔を上げ

『ありがとう！…！』

【シャルロット】は【亮平】に抱きつきそんな勢いだった。

【亮平】も顔を少し赤くさせながら頭を掻いていた。

『ね、ねるか【シャルロット】』

『…！…！』



7月 クレイドルは安定期に入った。誰もがそう考え企業は来るべき経済戦争の激化に備え始めた。

まさにこの時、濁り水はゆっくりと流れ始め様々な思いが人々を呑み込もうとしていたのだ。

11話 『寝坊したー！ー！』

学年別トーナメント当日

この日は授業は全て休みとなり生徒は5日間に渡り闘いが繰り広げられる。

ここ第3アリーナではとにかく広い、全生徒はもちろん教師や各国の要人などをいっぺんに入れることができる程の大きさだ。

会場内ではアナウンサーが次に行われる一年生について説明をしていた。

『さあ今年は何が起こるかはわかりません！！なんとって過去最多の専用機持を持つ学年ですから、皆さんしかと目に焼き付けておきましょう』

アリーナ休憩室

これから試合を行う者や負けて涙を流す者など様々な人が往き来し

ている場所で【一夏】と【シャルロット】は椅子に腰をかけていた。

『【一夏】どうしたの？』

『いやまさか一回戦目から当たるとは思わなかった』

【一夏】はトーナメント表を見ているそれにつられて【シャルル】もトーナメント表を見た。

『確かに。しかもまさか【篝】も一緒にいるとは思わなかったよ』

そう。【一夏】と【シャルル】の一回戦目の相手は【ラウラ】とまさかの【篝】である。

『でもやるしかないな』

『うんそうだね』

一時間後

【シャルル】 【亮平】 部屋

『寝過ごしたー！！何でよりによってこの日に寝坊するんだよ』

騒いだところで時間が戻る訳ではなく時計の針は既に13時を回っていた。

『まさかもう終わってないだろうな』

【亮平】は急いで制服に着替え部屋を出て走り去った。

アリーナモニター室

バンツ！

【亮平】は勢い良く扉を開けた。そこには【織斑】先生【山田】先生【セシリア】【鈴】がいた。

ハアハアハアハア

『どうしたのですか【亮平】さん？』

『まさかあんた寝坊したの？』

『えっそうなのですか？』

『ハアハア……そうなんだけど……でも【一夏】の試合に何とか間に合ったからいつか』

ギロン

『【亮平】お前遅刻をしたのか？』

『げ!!!』

ガッン!!

『グヘエ!!』

その途端【織斑】先生の方向から分厚い辞典の様な物が【亮平】  
のおでこにヒットして仰向けに倒れ込んでしまった。

(俺を殺す気かよあの先生は!!!)

そんな事をしている内に【一夏】達の試合がもう始まってしまっ  
ていた。

『【織斑】君と【デュノア】君のコンビネーションは抜群ですね』

『そうだな【ボーデヴィヒ】は【篠ノ之】を邪魔者としか見ていないため実際は2対1だ』

【織斑】先生が言うように【一夏】と【シャルロット】のコンビネーションは最高だった。

しかも開始早々に【一夏】はずっと【ラウラ】を狙い、ピンチになったら【シャルロット】が助けるまさしく訓練の成果が出ている。

『あっ！！【篝】がやられた』

『これで本当の2対1ですわね』

(これは勝負があつたな)

【亮平】が【一夏】達の勝利を核心したとき事件は起こった。

モニター室が5秒間真っ暗になりやがて非常用電源が作動し暗い部屋は更に暗さを増した。

『なんだ！！』

『ハッキングです。何者かが学園の防衛ネットワークにハッキング

をしています』

『応戦しろ！！』

『無理です！スピードが速すぎて間に合いません』

『くっ！！』

『さらに学園から南東1000kmの地点でこちらに直進する熱源があります。速度はおよそ時速250km4分後に学園に到着します』

『ち！次から次えと熱源の大きさは？』

【織斑】先生の声が部屋を満たしていたが何もできずに【織斑】先生は下唇を血が出そうなぐらい噛んでいた。

『大きさからしてISだと思われます。ハッキングなおも続いており第3防衛ラインまで突破されました。』

『一旦ネットワークの回線を切って再起動しろ！！』



『無理です！！学園の防衛機能全て乗っ取られました』

するとモニターのすべてがエラーと表示されモニター室の唯一の出入口に部厚い防護扉が降りてきた。

【亮平】はダッシュで扉まで走りスライディングでギリギリ部屋を脱け出し急ぎアリーナに向かった。

アリーナ会場

【一夏】は【ラウラ】の暴走をなんとか食い止め、今は教師達の後を【ラウル】を背負いながら【シャルル】と【篝】と一緒にいつか行った。

『大変だったね【一夏】』

『まったくだ。勝ったは良いけど二回戦目に行けるのか？』

『どつたるつな』

『その事は今会議中です。もうすぐ結果が出て来ると思います』

ガシャン

ガラガラガラガラ

『『『!』』』

【一夏】や【シャルル】【箒】は何が起こっているかわからなかった。

『なんだ?』

アリーナを出ようとした瞬間、観覧席や出入口などに防護扉が降りてきて、【一夏】【シャルル】【ラウラ】【箒】と教師4人は広いアリーナに閉じ込められてしまった。

ダン!ダン!

『クソツ！なんだこれ開かねー』

『3人とも私達の前から離れないで』

『本部応答願します。本部応答願します』

『どうやら無線は使えないらしいな』

『何が起こつていると言うのだ』

『わかんないけど良いことではなさそうだね』

ガシャン！！

ドオオオオオオン！！

何かがありーナの天窓を破り落ちてきた。

教師達が一斉に【一夏】と【シャルル】【箒】の前に立ち警戒体勢を取った。埃が落下した周囲を舞っていて見えなかったがやがて晴れてきた。

そこには両手にライフルを背中には大型ミサイルとグレネードをしよっている黒いのISが立っていた。

【一夏】の白式や【亮平】のホワイトグリントとは全く違い厚い装甲が重量感を漂わせており搭乗者を守っていた。もちろん顔は見えない。

『…I……Sなのか？』

『そのISのパイロットただちにISを待機状態にし床に伏せなさい』

『あれが【織斑一夏】か……………【和泉亮平】はどこにいる？』

(男なのか?)

『喋らないで武装を解除しなさい』

男は教師の言葉に耳を貸さずに辺りを見回していた。

『仕方ありません。』

実力行使し殺さずに戦闘不能させます各機注意して』

『了解！！』

教師達の乗る打鉄は謎の黒いISに攻撃を仕掛けた。  
黒いISは緑色の粒子を出しながら後退し始めた。

(あれは【亮平】と同じやつなのか?)

その動きはあまりにも白式やホワイトグリントとは比べほどにならないほど遅かった。  
だが遅い動きとは思えない程次々と敵のISの攻撃を捌きながらライフルで応戦していた。

ダンッダンッダンッ

『やあー！ー！ー！』

黒いISのライフルをかわし2機の打鉄の刀が相手を捉え切りかかった。

『あまいな』

ビュン

『え?』

ドオオオオオン!!

【一夏】にとって黒いISが使ったミサイルは、今まで見たミサイルの中のどれよりも大きく爆炎が天井にまで達し、辺り一面黒煙に包まれ黒いISがその中からでてきた。

爆発でできたクレーターの真ん中には直撃した2人の教師は倒れ込んでいた。

『残り2人か……………』

【篝】はISがなく【一夏】と【シャルル】のISはエネルギーがなくなっただけで見てることしか出来なかった。

そのあと闘いは長くは続かなかった。

ライフルで相手を牽制し止めはグレネード、完璧な戦術で残りのISを倒した

【メルツェル】のISの被害がまったく言うほどなかった。

『1機で4機のISを倒すなんて…』

『何て奴だ』

黒いISは教師達が戦闘不能な事を確かめると【一夏】の方に寄ってきた。

【一夏】は【ラウラ】を【シャルル】に預け【一夏】は皆をかばう様に前に出た。

『【織斑一夏】だな？』

『だったら何なんだ』

『お前と【和泉亮平】に話がある』

『話をするだけなら何で闘う必要がある』

『我々はリンクスだからな入国は許されてはいない』

(リンクスって【亮平】が前にしてたやつか)

『それは闘って良い理由にはならない!?!』

『話を聞く気はないのか?』

『ああ、ない!?!』

『ならしょうがないな、消えてもらっ』

ドン!ドン!ドン!

『?』

大きな物音の先には何もなかった。正確に言うと塞がれた部厚い扉の向こうから謎の音が聞こえた。

ダァン!

『 『 『 』 』 』 』 』 』 』 』  
【亮平】



無理矢理開けられた扉の向こうにはISに搭乗した【亮平】の姿があった。

11話 『寝坊したー！ー！』 (後書き)

ヴァオーはタンクではなく重量二脚に変更さしてもらいます。

12話 『断る!!』 (前書き)

ORCAメンバーで自分なりにお茶会を開いてみました。  
これであってるかな？

12話 『断る!』

『あれがラインアークのリンクスか……………』

【亮平】は何も言わずにただ辺りを見回して状況を確認し、そして目標を定めたかのように黒いISを睨んだ。

キイイイン!!

OBの耳に刺さる様な高い音が【亮平】の周りを包み込み緑の光となり相手に向かっていった。

【亮平】はOBの速さで黒いISに向かってドロップキックを食らわせ、男を50mぶっ飛び壁にめり込ませた。

『大丈夫か【一夏】【箒】【シャルロ……………】【シャルル】』

『おっ』

『おっ』

『ああ…助かったぞ』

黒いISの男は何事もなかったかの様に悠然と立ち上がりこちらを見た。

『3人とも少し離れてろ』

そう言うと【亮平】は3人から離れ黒いISの元に迫った。

『何故こんな事をしてんだ』

『俺の名は【メルツエル】そしてこれはオープニングだ』

『答えになってねえよ』

【亮平】は膝を軽く曲げ重心を落としライフルを黒いISに構えながら、どのように奴を倒すのかを考えていた。

『……………お前に会ったためだ』

『何の為に』

『我々の仲間にならないか？』

『は？わざわざ勧誘しに来たのかよ』

『我々は企業を恨んでいる連中に過ぎない、その点お前と我々は似ているだろ？』

『一緒にすんな、少なくとも俺はテロなんて考えなかった』

『だがお前は企業を憎んでいる筈だ、お前の両親を殺したあの事件  
忘れた訳じゃあるまい、だから自由と民主主義のラインアークに行  
った。違うか』

ズバツ

【亮平】は左手のライフルをブレードに変え切りかかるが【メルツ  
エル】は難なく避けてしまった。

『ストーカーが趣味なのかなお前達は』

『どうだ我々の仲間に……………』

『断る!』!』

『そうか……………ならば考えが変わるのを期待しよう。【織斑】と違ってお前はこっち側を知っているからな出来れば仲間になって欲しい』

『期待しないで待って』

【亮平】はライフルを構え横に移動しながら撃ちはじめた。【メルツェル】は上空に飛び同じく二挺のライフルで撃ちはじめた。

『今までのIS施設襲撃事件はテメーらの仕業か』

『その通りだ』

『何の為だ』

『それを話すわけにはいかない』

『ああそうかよ』

【亮平】は右側だけの分裂ミサイルを打ち【メルツエル】を攪乱しブレードで奴の左のライフルを切り裂いた、【メルツエル】がライフルを捨てたライフルはすぐに爆発をした。

『終わりだー！！』

ライフルを切った後【亮平】は最小限の動きと最速の速さで【メルツエル】胸をブレードで突つこうとした。

ビュン！！

『あまいな』

【メルツエル】は短いQBで後ろに下がり【亮平】の攻撃を避け背中中のグレネードと大型ミサイルを【亮平】に向けた。

『くっ』

ドオオオオオン！！  
ズドオン！！



爆風と衝撃が【一夏】と【箒】そして【シャルル】を襲った。

『【亮平】！』

『【亮平】！』

『【亮平】！』

【亮平】生きてはいるが決して無事ではなかった。

ミサイルによってPAは0になり続いて襲ってきた、グレネードによって左腕の装甲と武装は大破して、ポタポタと肩から手にかけて地面に血が滴り落ちていた。

『勝負はあつたな』

『俺を連れて行く気か？』

『同士になるか確かめに来たただけだ強制する気はない、ならないのならここで死んでもらう』

『そいつは脅迫とも取れるんじゃないか？』

（PAは………少し回復してるな、弱いけど一発ならできるか）

ビュン！

『あばよー！ー！』

【亮平】はQBで一瞬にして間合いを詰めた、不意を突かれた【メルツェル】は何もできずにホワイトグリントのAAをもろに食らってしまった。

（この程度なら死にはしないけどこの距離ならダメージはでかいな）

【亮平】の想像通り生きていたがオープニングの機体からはバチバチと火花を散らしていた。

『形勢逆転だな』

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ！！

『な!?!』

割れた天井から左手と両背中にもガトリング装備し、右手には唯一バズーカを装備した重量級の白い機体がいた。

【亮平】どことなくオーピングと似ているなとふと感じた。

その白い機体は【メルツエル】を護る様に【亮平】に向けてガトリングを掃射していた。

ダメージをこれ以上食らえない【亮平】は一先ず【メルツエル】から離れて弾を避ける事にだけに集中した。

『大丈夫か【メルツエル】』

『【ヴァオー】か……ああ大丈夫だ』

『1分後には増援が来る撤退をしよう』

『わかった………ではラインアークのリンクス、また会うことになるだろうからなその時答えを聞かせてもらおう』

『答えを変える気はねえし、ここで決着をつけてやる!!!』

ホワイトグリントは右側の分裂ミサイルを2人に向けて発射した。

ダダダダダダダッ!!

ダァン!

『ちい!!!』

分裂した8発の小型ミサイルは白い機体のガトリングによって全て迎撃されてしまった。

『焦るなよ又そのうち会えるからよ!!俺の名前は【ヴァオー】こいつはグレディッツィアだよらしく』

『聞いてねえよ』

言葉を最後まで聞かずに【メルツェル】と【ヴァオー】は割れた天井後から抜け出し飛び去ってしまった。

それと同時に各部の閉じていたシャッターが開き、閉じ込められた生徒は解放され外から教師達が続々とアリーナに入って来た。

一先ず嵐は過ぎたのでISを解除して【亮平】は【一夏】のもとに行った。

『大丈夫か【一夏】【箒】【シャルル】』

『俺達よりも【亮平】の傷の方が心配だ』

『これか？大した傷じゃないだろ』

『いや大変だよ！すぐに見せに行こう』

『痛ててててて！【シャルル】左手を引っ張るな』

『【シャルル】は【亮平】の手を引き強引に到着した医療班に見せに行った。』

『あいつらあんなに仲が良かったっけ？』

『私にもわからん』

『【一夏】さん……！……！』

『うわあー!』

【セシリア】は【一夏】の胸に抱きついてきた。その後を追っていた【鈴】と、【一夏】の横にいた【篝】は怒り狂い【一夏】の両足を思いつき蹴り飛ばした。

『いつてええええええええ!何すんだよお前ら』

『【一夏】あんたって本当に最低ー!』

『お前は誰とでもそういう事をするのか?ならばその根性を叩き治してやる!』

『ま、待て2人も落ち着け!.....ギャー!.....!』

【メルツェル】と【ヴァオー】は潜水艦に帰還し今アメリカに向かっていた。

【メルツェル】は無線で男と現状の報告をしていた。

『どうだった【メルツェル】』

『駄目だなあれはきっと仲間にはならないな』

『そうか残念だ……………』

『だから殺しとけって言っただろ。何故殺さなかった？【メルツェル】』

突然無線の会話に1人の男が入り込んできた。その男を知っていた、もう1人の男が質問に答えた。

『【オールドキング】か……………まあそう言うな気が変わるかもしれないな』

『随分とガキどもに肩入れするんだな【テルミドル】』

【テルミドル】と呼ばれる男は淡々と告げた。

『実際にほしいのは【和泉】だけだな』

『どう言う意味だ？』

『お前には関係の無いことだ。無駄話もここまでだ【メルツェル】  
次期にクロース・プランを始めるお前は出れるか？』

『ああ問題ない』

『なら良かった。では成功を祈っている』

『了解した』

【メルツェル】と【テルミドル】と言う男は勝手に回線を切り【  
オールドキング】と言う男だけが残った。



【オールドキング】は独り言を言いながら何かを考えていた。

『ふん！所詮はお遊び集団か……………【織斑】と【和泉】って言ったか？殺そうと思ったが、あいつが仲間になりたいほどの人間か一回会って見たいな』

ブツン

13話 『To Nobles Welcome To The Earth』

急いなので間違っている部分があるかもしれません。

その時はすみません。

13話 『To Nobles Welcome To The Earth』

7月多くにとつて突然にそれは起こった。

正体不明の複数のISがアルテリア施設を同時襲撃しそのほとんどを成功させる。クレイドルはよつてたつエネルギー基盤を大きく揺るがされた。

そしてORCA旅団、旅団長【マクシミリアン・テルミドル】の名でごく短い声明が世界に発信された。

『To Nobles Welcome To The Earth

』

(高貴な人々よ、地球へようこそ)

それは空に住むすべて人々への明確な宣戦だった。

企業は安全な経済戦争を放り出し、凶器の反動勢力との戦いを余儀なくされた。

人々はおぼつかない足取りを初めて知ったかの様に恐怖した。

駅構内 昼過ぎ

日曜日雲ひとつない青空、そこから流れと来る涼しい風が、歩いて  
いる3人を優しく撫でていた。

あの事件から1日ORCA旅団と言われるテロ集団が企業に対して  
宣戦布告をした。

だがすぐに何が起こると言う訳でもなく、日本には一時の平和な時  
間が流れていた。

IS学園ではそれだけに留まらなかった。

【シャルル】はクラスの皆に自分が女だと言う事と、【シャルロッ  
ト】と言う名前だと言う事を打ち明けて、それを知った女子達は一  
斉に立ち上がり、【シャルロット】と同じ部屋の【亮平】を質問攻  
めにした。

【一夏】もその事を前から知っていたと知った

【篝】と

【セシリア】と

【鈴】が

【一夏】を殺しかけたり、【ラウラ】が

【一夏】の唇を奪ったりなど【一夏】にとっては最悪な日であった。

(結局【シャルロット】は【篝】達にあらかじめ言わなかったらし  
い)

『良い天気だな〜』

『まったくだな最近はずが続けていたからな』

『でもこうして3人で一緒に買い物に行けるなんてうれしいよ……  
……僕女って話して誘ってもらえないかと思っちゃって……』

『そんなわけないだろ！【シャルロット】は大切な友達なんだから』

『【一夏】ありがとう』

【シャルロット】は恥ずかしがりながら【一夏】に礼を言った。それから5分後、3人は到着したモノレールに乗り近場のシヨッピングモールに向かった。

『さて取り敢えず水着でも買いに行くか、その後にでも昼飯を食べに行かないか？』

『うん！行く』

『俺もそれに賛成』

『じゃ行くか!?!』

『……………』

『……………』

その会話を陰から見ていた2人は、目をどんより曇らせながらブツブツと何かを呟いていた。

『私の見間違いかな男子2人の間に女子が1人一緒に歩いている構図が見えるんですけど』

『いえ見間違いではございませんわ、私の目にも【鈴】さんと同じ物が写っていますわ』

『【一夏】……………殺す!?!』

そこには【セシリア】と【鈴】がこそこそと隠れながら【一夏】達の事を見ていた。端から見れば怪しいことこの上ない。

『あいつ【シャルロット】とは何も無いってこの前言ったばかりじゃない!』

『まさか【一夏】さんと【亮平】さんが【シャルロット】さんを狙っていたなんて、だから私達の事は興味がなかったのですね』

【鈴】は甲龍の右腕部分だけを装備して今すぐにも怒りの鉄拳を喰らわしてやりたい気持ちで一杯だった。そこを1人の銀髪眼帯少女が横切った。

『あなた!?!』

『【ラウラ】 あんたこんなところで何してんのよ!?!』

あの事件の後、多少は【ラウラ】とも打ち解けられたが、まだ溝は完全には埋まっていな状態であった。

『決まっている。嫁の動向を探りに来ただけだ』

そう言うと【ラウラ】はスタスタと歩き出して行った。

『何処へ行く気ですか？』

『決まっている嫁と一緒に行動を共にする』

『そんなの許しませんわ！！』

『なぜだ？』

『そ、それは……………今は【一夏】さん達の動向を探り、しかるべき証拠を見つけ問い詰めるべきです』

『そつよー！』

『成る程偵察行動か……………良かろう』

こうして3人の偵察隊は【一夏】【亮平】【シャルロット】の関係がどこまで進んでいるのか調べる事にした。



『あ！2人ともちょっと先に行つててくれないか？』

『うん良いけど、どうしたの？』

『いや大した事じゃないんだ少し見ておきたい物があつてな』

『なら一緒に行けば良いじゃん』

『いやすぐに終わるから先に行つててくれ』

【亮平】と【シャルロット】に告げると【一夏】は走り去ってしまった。

『じゃ行くか。』

『そつだね』

一方偵察隊は

『【一夏】さんどこに行つたのでしょうか』

『どっせハイレでじゅ、このまま【亮平】と【シャルロット】を追  
っわよ』

『賛成だ』

そして

『なあ【シャルロット】』

『どっしたの【亮平】』

『お前が【シャルロット】って言う名前みんな知ってるだろ？そこ  
でだ【シャルロット】に代わる名前を決めないか』

『えー！良いの！ー！』

『お、おお元々【シャルロット】って名前も2人だけの秘密だった  
からな』

まさか【シャルロット】がここまで食い付くとは【亮平】も以外だった。

『あんまし長いのは駄目だしな』

しばらく【亮平】は歩きながら考えており隣では【シャルロット】が嬉しそうに待っていた。

『【シャル】ってのはどつだ?』

『うん良いよ!良いよ!』

(まさかここまで喜んでくれるとは思わなかった)

【シャル】は今日が最高の日かのような笑顔で【亮平】もなんだか嬉しくなってしまった。

5分後【亮平】と【シャルロット】は水着売り場にやって来た。

『じゃあ15分後にここに集合な!』

『え!?!』

【シャル】は驚いたまさかそれぞれで買い物をするなんて思ってもいなかった。【シャル】が言い返す前に【亮平】は男性用水着売り場に歩き出してしまった。

(一緒に見て見てくれないんだ……………)

ここまで来て裏切られるとは思ってもいなかった【シャル】は残念そうに顔をうつむかせながら女性用水着売り場に歩いて行った。

【亮平】は一見選んでいるように見えるが、目には何も映らずにこの前の事件について考えていた。

(アルテリアを襲撃したつてことはクレイドルを落とす為か?それとも……………アルテリアのエネルギーを他に使う為か?)

『おい【亮平】』

『……………』

『【亮平】——？俺向こう見てくるからな』

(そんなに気合い入れて選ぶ必要あるかな？)

いつの間にか来た【一夏】は変な誤解をしたまま1人自分の水着を選びに行った。

【一夏】は【亮平】の返事を待たずに勝手に行ってしまった。【亮平】はまだ考えていた。

(それにあいつからが持ってたIS……………個人で手に入る筈がない、  
ってことは何かが裏で手を回してるのか？だけどコジマの技術は企業  
が独占している……………と言う事はやっぱりGA辺りが怪しいな…  
……………)

『【亮平】ちよつと来て！…！』

【シャル】は半分ボーとしていた【亮平】を、半ば強引に引っ張って行った。

『ちよ【シャル】どうしたんだよ?』

【シャル】から答えは帰って来なかった。聞いているが答えられないような感じであった。そしてわざわざグルツと遠回りし女性用水着売り場に2人は到着し【シャル】は前もって決めていた水着取り【亮平】と試着室に入って行った。

『どうしたんだよ【シャル】?』

ジーーーー

【シャル】は【亮平】の言葉に耳を貸さず試着室のカーテンの間隙から外の様子をつかがっていた。

『どこに行ったのですの?』

『まさかバレるとは思ってもしなかったわ!』

店の外にいる【セシリア】と【鈴】は辺りをキョロキョロと見回しながら【亮平】と【シャル】を探していた。

(はぁー見つかつたら絶対に着いて来るよね)

【シャル】は心の中で誰かに話しかけていた。

『おい【シャル】ってば!』

『【亮平】静かに!』

『おお悪い』

(ん?何で俺が怒られてんだ?)

すると【シャル】は水着を胸に当て小さな声で話し始めた。

『ごめんね、【亮平】に似合っているか見て貰いたくて……』

『じゃあ俺は外に……!?!?』

【シャル】はそのまま上着を脱ぎ水着に着替え始めた。

( ちよっ! ? 待っ )

【亮平】は急ぎ回れ右を行い【シャル】に背を向けた。

【亮平】は呆れて【シャル】の方を向いたら【シャル】は上着を脱ぎ水着に着替え始めていた。

( ちよっ! ? 待っ! ! )

【亮平】は急ぎ回れ右を行い【シャル】に背を向けた。

( なんてこつなっちまっただ? ..... 駄目だ答えが出ない )

肌と布が擦れる音が異様に大きく聞こえ【亮平】は緊張の色を隠せないでいた。

『もっ..... 良いよ』

『お、おっ』

【亮平】はゆっくりと【シャル】の方を向いた。

『どっ..... かな?』



『……………』

『【亮平】？』

ハッ！！

『なんでもないなんでもない！似合っているぞ』

(やばい見とれちゃった)

『本当に？』

『ああ良く似合っているぞ』

『じゃあこれにしようかな』

『お、俺は外に出てるからな』

【亮平】はこの空間から一秒でも早く脱け出したくカーテンを開けないようにゆっくりと出ようとした瞬間。

『お前らそこで何を騒いでいる!!』

ギクツ!?

【亮平】と【シャル】は固まったまま動かなくなってしまった。

(おい待てよ!こんな所を見られたら……………)

(どうしよう。ああやっぱ【亮平】を外に待たせていれば良かった  
!)

IS学園の生徒しかも専用機持ちの2人がこんな所を見つかったし  
まったら退学なんかでは済まない。【亮平】【シャル】は覚悟する  
しかなかった。

『……………』

『……………』

声の主は一向に來ないので【亮平】はこっそりとカーテンの隙間か  
ら覗いてみた。

すると店から10m位先の休憩所で【織斑】先生に叱られている【

一夏【セシリア】【鈴】の姿があった。

『なんである先生がいるんだよ』

よくよく見ると【山田】先生までいるではないか。

『出ない方が良いね』

結局【亮平】は【シャル】が着替え終わる3分間嫌な汗をかきながら、着替え終わるのを待った。

説教はまだ続いているらしく【織斑】先生に替わり今度は【山田】先生が叱っていた。

(こりゃ後10分はかかるな)

『【亮平】……………』

『どっつした？』

『この前の学園を襲って来た人達に仲間にならないかって言われたんでしょ？』

『 ああ 』

『 仲間になるの? 』

『 ……それはない…けど何故するのはわかる気がする 』

『 え? 』

『 自分達は安全な空の上に住み、地上の事は考えずに平気で戦争の真似事をする企業は許せない 』

【亮平】は小さな声ではつきりと語って言った。

『 それに俺の家族は企業によって殺されたんだ… 』

【シャル】は驚きを隠せないでいた。そんな表情を【亮平】は察した。

『 ?大丈夫だ。昔は昔だ今さら恨みを晴らそうとなんて考えないよ。それに俺を助けてくれた人に申し訳ないしな 』

『そうだったんだ……………』

『いずれ話そうと考えてたんだけど悪いなこんな場所で』

『うんうん良いよ。あとでまた話して』

『ああまた帰ったらな』

気づけば説教の声は聞こえず店のBGMや客の雑談だけになっていた。

『そろそろ良いかな?』

カーテンを開けると見知った顔はおらず一安心。

『じゃ【一夏】の奴でも探しに行くか!』

『うん』

数分後

『たつく今までどこにいたんだよ!?!』

珍しく【一夏】が怒っていた。よっぽど【織斑】先生からの説教が効いたらしい他にも【セシリア】と【鈴】がふてくされていた。何故だか【ラウラ】だけが満足そうな顔で買物袋の中身を眺めていた。

『なんで説教されてたんだよ?』

『2人を探していたら【鈴】と【セシリア】に会ってな、そしたら【鈴】が急にISで襲いかかって来たんだよ』

(それを見つかって怒られたって事か)

『じゃあなんで【鈴】はなんで【一夏】を襲ったんだよ?』

『それが聞いても教えてくれないんだよ』

『なんじゃそりゃあっ?』

『ふん!』

『じゃあさ、仲直りも含めて皆でランチにしない【亮平】と私で払うからな』

『なんで俺達が?』

【亮平】の疑問に対して【シャル】は【亮平】の耳にこっそりと話した。

『だって【一夏】が怒っているのは僕達のせいなんだし【一夏】と一緒にいたら【鈴】達とも会わなかったかもしれないでしょ?』

『まあ半分は俺達が悪い見たいなもんだからな』

『わかった!!【一夏】もそれで良いだろ?』

『ああ俺は良いけど……【セシリア】達は……』

『 『 『 行く! ! 』 』 』

即答だった

『 じゃあ決まりだね、——この辺で良いおみせがあるから——』



14話 『もー！！はつきり答えなさいよ！』（前書き）

しんかーさんに注意されたので小説の書き方を少し変えました。

14話 『もー！はつきり答えなさいよ！』

6人は仲直りの為ランチをしていた。

(うー！なんでシャルロットなのよ！！)

(一夏さんはおしとやかな人が好きなのですか？なら私だって負けてはいませんわ！！)

未だにシャルロットを一夏と亮平が狙っていると勘違いをしている鈴とセシリアは、料理が来ているにも関わらず、ずっと一夏を睨み付けてた。

それはもはや偵察と言つよりストーカーであつた。

(どうしたんだあいつら……………あ！もしかして)

『2人ともこれ食べたいのか？』

『いらないわよそんな物！！』

『今はそのような気分ではございません!』

一夏の勝手な解釈によりさらにセシリアと鈴は怒ってしまった。

(なんなんだ一体)

考えるが答えは出ない一夏、そんな一夏をよそに亮平とシャルとラウラは黙々と料理を食べていた。

『あー!亮平ご飯粒ついてるよ』

そう言うとシャルロットは亮平の頬からご飯粒を取ってあげた。誰も見ていないのならそのご飯粒を食べたい気持ちで一杯だったため頬を赤く染めながらご飯粒をしばらく眺めていた。しかしそこはシャルロットなんか思いとどめることができた。

『サンキュー!』

そんな何気ない会話にセシリアと鈴は少しだけ違和感を覚えていた。

ランチを食べ終え一夏、亮平、シャルロットたちは帰ることにしたのでセリア、鈴、ラウラも一緒に帰ることにした。多少寄り道などをしたので戻ってきた時には5時を過ぎていた。

【シャルロットとラウラの部屋】

『ただいま』

『……………』

『ほら【ラウラ】帰ったら”ただいま”でしょ』

『……………ただいま』

『うん！』

シャルロットは女だと話し流石に男と同じ部屋で生活させる訳には行かないと言うことで1人だったラウラと一緒にになった。

ラウラにとってはシャルロットは鬱陶しくて仕方がなかった。寝る時には服を着るとか、挨拶はしっかりとしろなどラウラにとってはうるさいだけでしかなく、ほとんどを無視していた。

シャルロットはラウラにとって不思議の塊だった。この前までいざこざがあつた間柄なのに、何事もなかったかのように親しくしてくれるなんて意味がわからなかった。

しかしそんなシャルロットをラウラは一目置いていた。

『ねえラウラそんなに大事に抱えているけど何買ったの？』

シャルロットがラウラのベットにおいてある紙袋に手をかけようとした瞬間

『触るな！！』

ラウラは懐からサバイバルナイフを取りだしシャルの首もとに突き付けた。  
あと数cmラウラ手に力を入れていたら頸動脈から血が出てたに違いない。

『ごめん』

何事にも優しく接してくれた友達に刃物を向けてしまいラウラは後悔をした。

『いや私の方こそすまなかった』

するとラウラはシャルロットに買い物袋の手渡した。

『え？いいの』

ラウラはナイフをしまいベッドに座り黙ってうなずいた。

カサカサ

『わぁ可愛いー！！ラウラも水着今日買ったんだ。なら一緒に行けば良かったね』

シャルロットに褒められてラウラは自分の水着の選択が間違っていないとわかり少しホッとした。

『ねえラウラ着てみてよ』

『え！？いや…臨海学校で着るのだから今着る必要は無かるっ』

『だってラウラ、一夏に見せるんでしょなら今着て確認しなきゃ』

『そ、それはそうだが……………』

いつも人の目を見て話すラウラだが今は視点が定まっておらず自分でも何をしているのかわからなかった。  
するとラウラは“ 定時連絡の時間だからまた今度な！！ ” などと言つて、部屋から飛び出してしまった。

『んーまだ早かったかな』

【一夏と亮平の部屋】

『ただいまっ』と』

一夏は買い物袋を机に置きベットに仰向きで横になった。

『ふうー今日は酷い1日だった』

『まさか織斑先生に会うとは思わなかったか？』

『ああ、まさかあんな所でも怒られるとは思ってもしなかった』

亮平は心の中で改めて一夏に謝った。  
そこに【シャルロット】がやってきた。

『亮平いるっ。』

『おおシャルロットどうしたんだ？』

ニヤニヤしながらシャルロットは一夏に言った。



『亮平の昔話を聞きに来たの!』

『おいシャル!』

『亮平、なんで俺には内緒でシャルロットには話すんだよ!』

『いや別に話すつもりだったんだけど先にシャルロットと約束したんだよ』

『ならついでに俺が聞いても構わないよな』

『ああそれで良いならな』

一夏とシャルロットを向かいに亮平がベッドに座ると亮平は恥ずかしそうに頭をかきながら話し始めた。

『ISが発表されて二年後、丁度クレイドル建造計画が立案されて一ヶ月後だな、オームルの会社で働いていた両親はクレイドル建造を反対するテロリストに占拠されたんだ、要求は簡単だ計画の廃止だ。』

だがこの計画は宇宙進出の大事な一歩だと考えている企業は、1週

間にも及ぶ交渉したが痺れを切らした企業が最終的に実力行使をしたんだ。

結果は犯人も人質も全滅する大惨事になったんだ』

『それで亮平は……………』

『俺はその後、叔父に引き取られたけど馴染めたくてなすぐに家を出たんだ』

亮平は一回お茶を飲んで一息つきまた話し始めた。

『そのあとは最初にレイレナードに行つて復讐心を燃やしたんだけど、1人の人物によつて壊滅し行き場のなくなつた俺は、色々な所を転々として復讐なんて考えなくなつて、最後にラインアークに行つたんだ。

そこでISが動かせることがわかりホワイトグリントを渡されリンクスになつたんだ』

亮平の話聞いた一夏とシャルロットの顔にはなんと行って良いかわからず困っていた。

『まっあの時ORCAが来たら確かに俺は入っていたかもな!!』

笑いながら話した亮平に一夏は怒った。それは織斑先生に怒られ俺に怒った時以上だった。

『何で笑いながら話す事ができるんだよ!』

『何でって昔話だからな過ぎたら笑い話だよ!同情や情けをかけてほしくて話した訳じゃない。』

『そこんとこわかってくれよ……………じゃこの話はこれで終わりだ』

一夏とシャルロットにとっては不完全燃焼のまま話が終わり亮平は自分のベッドに横たわった。

『亮平……………確かにお前の辛さは俺たちにはわからない、だけど友達なんだから相談くらいなら乗ってやれるからな!』

顔を上げると一夏とシャルロットは笑顔で亮平をみていた。

『ありがとよ!』

亮平は静かな顔で一夏とシャルロットに礼を言った。

話が一段落した時に部屋にノックがあった。

ガチャ

『よっ箒どうしたんだ？』

そこには木刀をギュツと握り絞めキツ！！と一夏を睨み付けた。

『覚悟——！！』

『な、何なんだよ！！』

咄嗟に一夏はまだ荷ほどのされてない亮平の荷物を盾に箒の一刀両断を受けきった。盾にされた鞆は木刀の直撃した部分から亮平の私物が儂く散った。

箒は木刀を振り上げ次に一夏の首もと目掛けておもいきり突こうとした。

一夏も箒が突いてくるたびに亮平の鞆で防いで行った。そのたびに鞆の欠片と亮平私物が落ちて行った。

『てめえらしい加減にしるー！ー！』

亮平は大声を出してやっと止まった。玄関には無惨な残骸だけが散らばっていた。さっきの感動的な空間は箒が来て1分もしないうちに崩壊してしまった。

『はあ〜〜来るとは思っていたけど、俺にとぼっちりがくるとは…』

…』

### 【食堂】

夕食の混雑の時間に丁度来てしまった一夏、亮平、箒、シャルロットは15分待ってやっと食事を取ることができ、今は一夏と箒以外は食べ終わっていた。

『すまなかった、自分だけが買い物に誘われなかったと思うと怒りが収まらなく』

『いや俺が怒ったのは、友達とか言っときながら、平然と人の物を』

盾に使う……こいつに腹がたつたんだ』

亮平は一夏の耳を強く引つ張り上げながら言った。

『イテテテ！悪かったって、そこに手軽な盾があつてな、つい咄嗟に取っちまった』

ごん！

亮平はトレイの角で一夏の頭を思いつきり殴った。

『ちゃんと壊した代金分払えよ』

『はい………』

『じゃあ僕は先に行くね。ラウラがもう帰ってるかも知れないしね』

『そうか、おやすみ』

『おやすみ』

『ではまた明日』

シャルロットは3人と別れると1人自分の部屋に戻って行った。  
突然シャルロットは2人組に捕まってしまった。

大声を出したいが口を手で塞がれ声が出なかった。

シャルロットはそのままトイレに連れてかれてれた。

『ぶはあ！………セシリアに鈴どうしたのさ！！』

『あんたに聞きたい事があるの』

『だからって無理やり連れて来ることはないしょ』

『とても重要な事なんです！』

いつもと違う2人の雰囲気シャルロットは息を呑んだ。

『シャルロットさんあなた亮平さんと付き合ってるのですか！？』

ポクポクポク チーン

『え！？なっなんで……そっそんな事を聞くの！！』

『どっなんですか！！』

『どっなのよ！』

シャルロットは赤くさせた顔の前で両手をブンブン振りながら答えた。

『そんなことないよ！！』

『じゃあ亮平の事は好きなの？』

『え、いや嫌いではない………けど』

最後の方は何を言ってるのかわからないぐらい小さい声で答えていた。

『もーはつきり答えなさいよ！』

『好きなのですか！！』



コク

シャルロットは顔を赤めかせながら小さく頷いた。

『頑張ってください！』

『へ？』

以外な展開だった、まさか応援されるとは思わず何を言えば良いか  
く黙っていた。

セシリアと鈴はシャルロットに応援をしてすぐさまトイレから出て  
いった。

『なんだっ たんだろっ』

トイレから出てきたセシリアと鈴はガッツポーズをしながら歩いて  
いた。

『良しライバルが減ったわ！』

『まさかとは思いましたがシャルロットさんは亮平さんが好きでしたか』

『だけど亮平も唐変木だったらシャルロットも可哀想に』

『亮平さんは一夏さんよりは空気が読めると思いますよ』

だどの話をしながら不敵な笑みを浮かべ廊下を歩いていた。それは周りは女子が2人を引くぐらい異様な光景だった。

15話 『海だー！ー！』 (前書き)

しばらく更新が不定期になります。

15話 『海だ——!』

どこまでも続く青い海と青い空、波の音、風に乗ってやっ来る塩の薫り。

それは全てが揃って始めて出来る巨大なアートと思わせる光景だった。

『海だ——!——!』

誰が言ったかはわからないその言葉を合図にクラスのひとつの女子が一斉に海に走って行ってしまった。

『たつくバスの中じゃ“酔った”とか“気持ち悪い”とか言ってたくせに着いた瞬間これかよ』

あきれた亮平の隣には一夏が苦笑いをしながら海を眺めていた。その光景は今世界規模のテロが起きてるなど微塵も感じさせないくらい美しいものであった。

『女の子って言うのはそう言うもんなんだよ』

振り返るとそこにはシャルとラウラが立っていたがラウラはなぜかシャルの後ろで隠れていた。

『お前は何をしてんだラウラ?』

『自分で水着を買ったんだけど似合っていないって言って、また制服に着替えようとしたから連れてきたの、ほらラウラ!』

『おいシャルロット押すな!』

ラウラはシャルロットに背中を押され一夏の前に無理矢理押し出されてしまった今さら引くわけにも行かずラウラは覚悟を決める事にした。

『あんまし……ジロジロ見るな……』

『おお悪い』

『いやお前がいやでないなら私は構わないが……』

前に出たのは良いが彼女が軍人とは思えない程に物怖じしていたあの普段は凜としてクールな軍人ラウラがこうまでなるとは恋とは恐ろしいなと他人事のように亮平は思った。

『変じゃないよね?一夏』

『ああ可愛いぜラウラ』

『可愛い…私が可愛い……………』

『大丈夫かラウラ。体調が悪いんじゃないか？』

一夏は顔が赤くなったラウラを心配して近づいたが、ラウラにとっては逆効果だった。赤くさせた顔を一夏に見られたラウラは恥ずかしくなり涙目になりながら海に走り去ってしまった。

『追った方が良かったかな？』

『そつとおいておいてあげな一夏』

一夏にとってそのあとは大変でしょうがなかった。

ラウラがいなくなり、ここぞとばかりにセシリアがオイルを塗れと要求したり（一夏はもちろん断ることができなかった）。それを鈴が邪魔して2人が喧嘩したり

亮平やシャルロット達とビーチバレーをしてたら織斑先生と山田先生が来て参戦するなどにかく大変だった。ただどー夏はまんざらでもなくこんな平和がいつまでも続いてほしいと思った。

夕日も沈み辺りが暗くなった海辺は、切りだった崖の上から見ると闇が刻々と近づいていた。箒はそこに立っていた。

昼からこの調子でいつも通り一夏をねらってセシリアや鈴と争うがここ一週間は静かに過ごしていた。

その原因は先日実の姉、篠ノ之 束に頼み事をしたためである。

篠ノ之束がISを開発したせいで家族とは離ればなれになったので箒は束を嫌っていた。その嫌いな姉に生まれて初めてお願いをするため落ち着いてはもらえないため海を眺めることにした。

しばらくは海を眺めていたが寒くなって来たので箒は戻ることにした。

【旅館 大広間】

IS学園では毎年恒例一年生の臨海学校の宿泊場になる場所だ。時刻は夜の7時を回っており今は1、2、3組の食事時間だ。IS学園は外国人もいるので正座組と椅子組に別れて食事を取っていた。

正座組にはセシリア、一夏、亮平、シャルロットの順番で座っていた。セシリアと鈴は椅子組で箸は正座組だが別の場所に座っていた。

『大丈夫かセシリア？』

正座の文化がないイギリス代表のセシリアは足をモジモジさせながら料理を食べていたので一夏が声をかけてきた。

『大丈夫ですわ一夏さん』

（この席を確保する労力に比べればこの程度なんのことありませんわ！）

『そんなにづらいなら俺が食べさせてやるつか？』

一夏の言葉に亮平は食べていた刺身を吹き出し耳を疑ってしまった。シャルロットが心配そうに声をかけるがそんなことは聞こえていなかった。



こんなシチュエーションは夢でしか見た事が無いセシリアは頬をつねり夢ではないことを今一度確認してしまった。

(おいおいー夏どうなっても知らないぜ)

亮平の心の中で警告したが遅すぎた。セシリアは歓喜にも似た言葉で聞き返した。

『それはほんとですか!』

『ああ。じゃあまずは刺身からな』

ー夏は刺身にわさびを少し乗せセシリアに食べさせた。セシリアは刺身の味などわかる筈もなくこの時間を目一杯堪能していた。

『あー！セシリアだけ食べさせてもらってずるい』

などと当然の如くクラスがどんどん騒がしくなり、鈴やラウラは“ガタン!”と怒りの表情で勢い良く立ち上がった。

『ー夏ーあんた何してんのよ!』

『貴様私の目の前で良くそんなことができるな!!』

バンツ!!

もう修正が効かなくなったクラスはただ1人の先生にしか止める事ができず願いが叶ったかのように襖が豪快開きそこには泣く子も黙る地獄の先生こと織斑先生が立っていた。

『お前らは静かに食事をするこもできんのか!』

織斑先生の言葉には誰も逆らう事をしよう等の愚か者はおらず、部屋は誰もいないのでわないかと思わせるぐらい静かになっていた。当然ラウラや鈴も椅子に座り込んでしまった。

『織斑!!すこし和泉を見習え、大抵はお前元凶なんだからな!』

バタン!

『と言う事で悪いなセシリア自分で食べてくれ』

『~~~~~!』

セシリアは唸りをあげながら一夏を睨み付けた。だがまた怒られるのはごめんなので一夏は亮平を見るが助けが返ってくる筈もなく亮平は何気なく料理を食べていた。

そしてこの時間一夏はセシリアに永遠と睨み付けられながら料理を食べる事になったのだ。

【一夏、亮平の部屋】

『なんで助けてくれなかったんだよ!』

『あれはどう考えても一夏が悪いんだよ!もうちょっと状況を考えるよ』

一夏は亮平に抗議をするがあっさりと受け流されてしまい溜め息をつくしかなかった。

ガラッ

『織斑、和泉いるか?』

以外な人物が一夏と亮平の部屋にやって来た。まさかの織斑先生の登場によって2人だけの部屋は先程のように誰もいない空間に早変わりしてしまった。

『千冬姉……………』

『そう身構えるな、ただ世間話をしにきただけだ』

『世間話って俺たちとですか?』

プシュ!

織斑先生は自分で持って来たとされる、缶ビールの開け一気に飲み上げた、その飲みっぷりと言ったら豪快の二文字しか出なかった。

『ぶはあ!……………ああそうだ特にレイレナードについてな』

言い終えた直後に亮平は自分の過去を話したとされる一夏を睨んだが織斑先生がさらに一言付け加えた。

『安心しろー夏は何も話していない、こちらで調べただけだ』

『そうかですか……………で何を聞きたいんですか？』

『お前がレイレナードにいた頃何かされなかったか？』

(妙な事を聞くな…そりゃあ入ってからは身体検査やら何やら色々  
とされたけど……………)

『例えばどんなことですか？』

『薬を打たれた事は？』

織斑先生の言葉には迷いがなく最初からそれを聞きに来たみたいだった、亮平もそれを察して記憶を遡った。

『ん……………あ！確か入ってすぐになんかの検査とか言っ  
て打たれたかもな』

『亮平……………なんでそんな昔の事を覚えてるんだ？』

『なんでもかっって言われるとその検査が一回だけじゃなく10回ぐら  
いやらされたんだよ』

『コジマ粒子との対応させISに乗らせる為じゃないか？』

『さあどうでしょうね……白式とホワイトグリンツの決定的な違い  
はコジマ粒子だから俺がISを使えるのは薬でコジマ粒子に対応で  
きるようにさせられたのか？……』

『それって人体実験……』

一夏は自分とはまったく関係のないまるでアニメの中の出来事みた  
いでまだ信じられなかった。  
だが亮平が一夏の思いを一蹴するかのように言い放った。

『だが確証はない』

『ああそつだ全部推測に過ぎない』

千冬姉の言葉を合図にこの話は終わり間髪入れずにまた亮平に質問  
をした。

『ならばエーレンベルグについて何か情報を持っているか？』

『いえ何ありません。昔1回見た程度ですよ』

『えー質問何ですが……………エーレンベルグってなんですか？』

当然の質問だった。一般人に企業の施設や兵器等は一般的には秘匿扱いされておりそれは国でさえ知らない事が多いのだ。

『エーレンベルグはレイレナードが企業の衛星を撃ち落とす為に関発された衛星掃射砲の事だ。だけどレイレナードが壊滅した時に全て破壊されたって聞いてますけど……………』

『だがORCAの狙いが空に住む連中ならエーレンベルグでクレイドルを墜とす可能性もあり得るからな』

『あのーじゃあORCAが襲撃したアルテリアって何ですか？』

最早教師と生徒とのORCA旅団講座であり2人の教師は無知な生徒に溜め息をつくしかなかった。

『クレイドルにエネルギーを供給する為の施設だ!!』

『なるほど!!ん?なんでORCAはアルテリアを狙ったんだ?』

『さあそんなのORCAしか知らないだろ』

『ORCAはアルテリアからのエネルギーをエーレンベルグに与えクレイドルを撃ち落とすと私は考えている』

『でもそれって……アルテリアが無くなればクレイドルは浮かんでられないんだろ?ならわざわざエーレンベルグで撃たなくても良いだろ!』

『確かに根も葉もない噂より現実性が高い。だが奴らがそんな時間のかかる事をするかどうか疑問だな』

『確かに一理あるな………』

3人(主に2人)の話が一区切りついた所で襖が倒れ大きな音を上げた、何事かと振り返り凝視して見る一夏と亮平の目にセシリア、鈴、シャルロット、箒、ラウラが襖の上で倒れていた。



『何をしているんだお前たちは!!』

『ハハハ……』

もはや5人は声にならない声で笑うしかなかった。それを見かねた織斑先生は頭を抱えながら溜め息をつきまた豪快にビールを飲み空にしまった。

(たった二口で空にするなんて、どんだけだよ)

『でお前らはいつから聞いているんだ?』

『えーと実は……最初からです』

『まったくお前らは………おい一夏、亮平ちょっと何か飲み物でも買ってこい』

『………わかった』

『わかりました』

2人の仲介人は立ち上がり、部屋を出て行ってしまい1頭の獅子が陣取る部屋に5匹の兎が取り残されてしまった。

『なんだいつものほか騒ぎはしないのか?』

獅子の威嚇とも取れる質問に1匹の勇敢な兎が受け答えた。  
シャトル  
ト

『いえ織斑先生とこうして話した事がないので』

『ふんまあいい。それよりさっき聞いた話は全て他言無用だ!!これ  
れは命令だ良いな?』

『『『『はい』』』』

取り敢えず返事はしたが尚も緊張は続く、部屋全体を見る眼力はまるでライオンが餌を品定めしているようで兎は録に目を合わせる事すらできなかった。

『で、お前らはあいつのどこが良いんだ?』

??????

4人はすぐに誰の事を言ってるかわかり戸惑い始め、皆の様子を見てやっとシャルロットにも誰の事を指しているか理解する事ができた、けど戸惑うことはしなかった。

『確かにあいつは料理はできるしマッサージも上手い、こいつの彼女は特をするだろうな……………どうだ欲しいか？』

まさかあの織斑先生からこんな言葉を聞く事が出来ると思わず4人は喜んだ。

『『『くれるんですか!?!』』』

『やるかバーカ。女ならな奪う位の気持ちで行け!!』

まさか織斑先生から恋のご教授を受けるとは思わなかったが、さつきとは一変して暗く落ち込む4人に最後の言葉は聞こえてはいなかった。

そんな姿を見てシャルロットはクスクスと笑っていたが織斑先生の視線が次にシャルロットに向けられまさか矛先が自分に向けられるとは思ってもいなかった。

『デユノア!』

『は、はい!』

『教師が見ていないからといって調子に乗って淫行をするなよ15歳』

ギクッ!

(えっバレてるの?なんで?えっ!?!どうして?)

『シャルロットどついつ事だ?』

ラウラの言葉も、周囲の視線も気にしている暇がなく全身から汗がダラダラと流れていた、シャルロットにはこの人が鬼よりも悪魔に見えるぐらい恐ろしかったこの人の近くではもう何も出来ないシャルロットは悟った。

『『ただいま』』

丁度一夏と亮平が人数分の飲み物を両手一杯に抱えながら部屋に戻ってきた。

『ん！？どうしたんだシャルロット顔が赤いぞ』

真っ先に亮平は顔の真っ赤なシャルロットに気づきグイッ！と亮平はシャルロットの顔を覗きこんだが、シャルロットにとってはまさにバッドタイミングでバッドエンドであった。

（あああ！亮平顔が近いよ！！なんでこんな時に帰ってくるんだよ！）

『和泉どうやらデュノアは体調が悪いらしいから部屋まで送ってあげろ』

『えっ！？わかりましたシャルロット立てるか？』

『大丈夫！大丈夫！一人で立てるから…わっ！？』

シャルロットは自分の足が痺れていると知らずに立ってしまいバランスを崩して亮平にもたれかかってしまった。

（ヤバイよ！この状況はとてもヤバイ！）

座っている一夏を除いて箒、セシリア、鈴、ラウラは各々シャルロットの行動に感心を持ちながら見ていた。

(シャルロット結構具合悪そうだな明日には治つてると良いけど)

(なるほどその手があったか私も見習わなければな)

(やりますわねシャルロットさん)

(あの子一見大人しそうなくせにやることは派手ね)

(こんど嫁にでも試して見るか)

『無理すんなって…ほら』 (こ…こ…これはお姫様だっこだよね)

シャルロットは全身から湯気が出ている位に暑くなりこんな顔を亮平に見られなくなかったので両手で顔を覆ってしまった。

『じゃ送ってくるわ』

バタン！

『あいつもお前ぐらい唐変木かもしれないな』

『へ！？』

最後の織斑先生の言葉が気になるが一夏は考えてもしょうがないと  
開き直り皆にジューズを渡した。

『大丈夫かシャル？』

『うんもう大丈夫だから下ろしていいよ』

『駄目だ！またぶり返したら大変だろ！』

シャルロットにとってこの状況はとてものれしいのだが、さっきの織斑先生の言葉が頭から離れなかった。（調子に乗って淫行をするなよ15歳）

（なんでバレたんだろ恥ずかしい！！）

『シャルロット』

（もしかして皆も知っているの！？明日からどんな顔すれば……）

『おいシャルロット！！』

『えっ！？どうしたの亮平？』

『“どうしたの亮平？”じゃねえよ部屋に着いたぞ』

シャルロットは気づかないうちに部屋の前まで着いていた、この幸せな時間を変な事ばかり考えていて間に終わってしまった。

（あゝ！！僕は何をしているんだ何か話でもしとけば良かった！）



今さら後悔しても遅く亮平はシャルロットを玄関で降ろして帰ろうとした。

(今からでも遅くない何か話さなきゃ！)

『亮平！！』

『ん？どうした』

『あっえーとその……………おやすみ』

『おっ！おやすみ』

(はぁー！)

結局ろくな会話が出来ないまま亮平は来た道を戻って行きシャルロットも自分の部屋に入る事にしそのまま布団に寝転がった。

(明日で最後なんだし勇気を出さなきゃ！)

自分に気合いを入れ、明日に備えてシャルロットは眠りに着くことにした。その顔はさっきまでの羞恥の顔ではなく勇気と気合いで満

ち溢れていた。

16話 『ちーちゃん!』

亮平の眼前には広大に広がる海が水平線いっぱい広がっておりそれを上空1000mあたりで見渡しながら亮平は時速2000kmと言う超音速で太平洋の海を南下をしていた。

『セシリア、シャルロット俺は1分後に目標に到達するから』

『了解しました私とシャルロットさんも5分後に到達します』

『亮平……………無理だけはしないでね』

『あいよ』

いくらブルーティアーズのストライクガンナーやラファールリヴァイヴカスタム?の増設ブースターが速かろうとネクストのVOBの速さには遠くおよばなくすでに300kmは離れていた。ホワイトグリントは超音速飛行を行うためVOBと言う追加ブースターとドッキングしている、そのためVOBモードに変形したホワイトグリントは顔がバイザーで隠されている状態である

バイザーのディスプレイには燃料が底を尽きる警告があると同時に目標到達まで1分を切り耳元にはアラートが鳴り響き亮平はやや眉間に皺を寄せながら飛行していた。

VOBとは……………ヴァンガード・オーバード・ブーストの略ネクスト

用大型追加ブースター。メインノズル1機、サブノズル4機、備えており速度は2000kmにおよぶ。基本的に直進するだけの機能しかないがブースターによる軌道調整は可能。

水平線にそれは見えてきただがその大きさは半端なくデカイ！おおよそ縦400m×横300m×奥行き300mもありまるで骨組みだけの大きな傘だ。

『こんなの倒せる奴は化け物だな』

『作戦中だぞ私語は慎め』

『すみません』

さすがにこんな作戦は無茶だと思っているのか織斑先生の声には若干の焦りと怒り混じって聞こえた。亮平も期待に出来る限りは応えようと一気に気を引き絞め巨大な化け物を鋭く睨み付けただがその顔にはわずかに笑っている様にも見える。

その時山田先生からの指示が聞こえて来た。

『和泉くん間もなくアンサラーの射程距離に到達します。アンサラ

一の主力攻撃は直上及び外側では8枚の羽からのミサイルです。傘の下からはハイレザーの雨が降り注ぎいくらホワイトグリントでも危険です。そのためミサイル発射口を破壊し上から攻めて下さい』

(それにしてもオペレーターがつくのは久しぶりだな。やっぱり落ち着くな〜)

亮平に絶妙な指示で見送った山田先生も自分が行かないで生徒に行かせてしまう辛さを声に出していたことを感じとり、大人にも色々事情があるんだなとついさっき怒られた亮平は心の中で呟いた。

『VOBパージする』

バシュッ!

ホワイトグリントからVOBが外れVOBはISに衝突しないように空中で分解されバラバラになり海へ落ちて行った、ホワイトグリントは慣性の法則によって勢い良く進んで行くがやがて重力と空気に抵抗に負け高度と速度が下がっていった、亮平は大きく1回深呼吸をしたやがてホワイトグリントは水面に近づきやがて水しぶきを大きく上げた。

亮平はミサイルの旋回を許さないように水面ギリギリで移動することにした。

OBをするために背中ハッチが開放され、スラスタには徐々に

集束されていくコジマ粒子一定の量に溜まりコジマ粒子が爆発的に  
一気に放出された。

キイイイイイイン！！

そして亮平は一人一足早く巨大な巨大な怪物退治に出かけに行くこ  
とになった。

【数時間前 海岸】

昨日の浜辺よりごつい岩が多く敷き詰められており、荒れた日なん  
かには波が勢い良くぶつかって来て全てを呑み込むであろうこの場  
所で専用機持ち達が織斑先生によって召集されていた。まだ全員が  
揃わない海岸で一夏はごつい岩の上に立ちボーっ青い空を眺め今日  
の朝を思い出していた。

【さらに1時間前旅館】

一夏は基本的に早寝早起きで規則正しい生活を送っているそれは親がいない姉も家には時々にししか帰ってこず1人での暮らしが多かったからかもしれない。そんな一夏は空気の澄んでいて朝の気持ちよい日差しが差し込む旅館の廊下を散歩しており廊下から見える庭園はまさに絶景と言う他なかった。

そこに篠ノ之箒と言うファースト幼なじみが廊下でしゃがみこみながら地面の土を眺めていた。

『箒何をしているんだ？』

『私は何も知らん！』

『は？』

そのまま箒ドスドスと歩いてしまった。何で怒っているのかわからなかった一夏は箒が見ていた所をとりあえず見てみた………は？………誰もが思うだろう地面に携帯のような物が直角に刺さっているではないか。

どうやらそ正体がなんなのか一夏も気づいたらしく顎に手を当て考え込んでしまった。『ん~~~~~』

『どうしたのですか一夏さん？』

そこにイギリス代表令嬢のセシリアオルコットが通りかかった彼女は如何にも早起きな顔をしている。

『いやまあな』

『??.?』

これ以上は埒があかないと考えた一夏は覚悟を決めそれを引っ張る事にした。

『よいしょっと!』

スポン!

抜けてしまった。

何も起こらないので辺りを見回してみると……………空から何か落ちてくる音が聞こえてくるではないか。

ヒューーーーーー

ズドン!!



人参？が落ちてきた何で落ちてきたかって？そんなの誰も知らない、ただ1人を除いては……その人物は人参が真つ二つに割れた中からやって来た。

『アハハハハハ！やゝゝい引つ掛かった！』

『お久しぶりです東さん』

『うん久しいね！本当久しいねいっくん！それより篝ちゃん知らない？……まあこの篝ちゃん探知機を使えば一発なんだけどねー……じゃあねいっくん』

勝手に現れ勝手に消えるなんて慌ただし人だ。それが2人の感想だ昔馴染みの一夏にとっては変わらないなと呆れてしまう程に。

『一夏さんあの方は誰なのですか？』

『ん？あれは篠ノ之束さん篝の姉さんだよ』

『え！？』

一夏にとってこんなにも驚く朝はなかなか来ないだと1人うんうんと頷きながら確信が持てた。

バシン！

『人の話を聞け！』

『……………はい』

『よし専用機持ちは揃ったな』

『あの一等は専用機持ってないですよ』

鈴が尋ねた事は等以外全員が疑問に思っていた事であり、ただ1人等だけは俯いていた。

『ああそれは私から説明しよう……………』

『ちーーーーいちゃーーーーん！』

丘の方から怪しげな声が聞こえ一同そちらを向くが、唯一一夏、等、

織斑先生の3人は振り向かずに一夏は溜め息をつき箒は何処かに走りだし織斑先生は手で頭を抱え溜め息をついでしまった。

『ちーちゃんちーちゃん会いたかったよ!!』

『寄るな、くつつくな、騒ぐな!!』

その人は秋葉原にいなすなメイドのコスプレをしており頭にある機械的なウサギの耳と背中のかなりボン、そして何よりピンクの長髪が特徴的であった。

その謎の人物が一直線に織斑先生に突っ込んだが織斑先生の見事なアイアンクローにより静止し衝突をする事がなかった。

『ん〜!!ちーちゃんあいからわず見事なアイアンクローだね!』

『えーい鬱陶しい!!』

こんな織斑先生は見たことがない、それほどこの人とは仲が良いのだろうか?亮平はそんな事を思った。

『箒ちゃん!元気だった?』

『お久しぶりです』

岩陰にひっそりと隠れていた箒は意図も簡単に見つかってしまいで腹でも下っているかの様な顔で実の姉に挨拶をした。

『箒ちゃん大きくなったね特に……………』

束が箒の胸を触ろうとした瞬間

バシン！！

どこから出したのかわからない木刀で束を突き正当防衛を行った、おもいつきり入ったように見えたがそんなそぶりを見せずに打たれた所をさすりながら嘘泣きの涙を流し泣いていた。

『殴りますよ！』

『殴ってから言っても遅い〜』

『はあ〜束自己紹介ぐらいしろ』

『え〜面倒臭いな……私が天才博士の篠ノ之束だよん！はい終わり』

嘘泣きをやめヒョイツと立ち上がり“なんちゅう自己紹介だよ”と言わんばかりの挨拶をした。この人は絶対に話すのが面倒くさく親しい間柄以外は喋らない事が一連の流れでわかった。

『束って』

『ISを開発したと言っ』

『篠ノ之束!!』

あのIS開発第1人者である人物が自分の前にいるなど夢ではないのかと一同の驚きを隠せなかった。ただ3人を除いては……

『皆の者大空をご覧あれ!』

何を言っているかわからなかったが束の指が指している上空に目をやると一瞬何かが光った。

『おわあああ!!--』

一夏に季節外れのサンタのプレゼントがやって来たわけではないし  
かし一步間違えれば一夏は挽き肉にされていただろう。

プシューー！

ひし形状の物体は煙を吐きながら開いき姿を現したのはISだった。  
それはすべてを圧倒するぐらい優雅で真紅に包まれた肌が可憐さを  
物語っていた。

『これが篝ちゃん専用のIS名付けてー紅椿！しかも紅椿は東さん  
お手製の第4世代ISなのだ』

『第4世代……』

『各国でやっと第3世代の開発に着手したばかりなのにか……』

『なのにもう……』

『そこがほら天才東さんだから！さあ篝ちゃん今からセッティング  
するよ』

『篠ノ之……………』

『はい』

箒は静かに紅椿に乗りこむ、なるべく動揺を出さないように振る舞うが隠せるわけ無く紅椿に乗る時には手の震えがとまらなかつた。箒が紅椿に乗るのを確認すると束はスパコンがそれ以上の早さで宙にあるディスプレイを叩いていった。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

『箒ちゃんのデータはある程度入っているからあとは最新のに更新するだけだよ』

『すごい何て早さなのよ』

『はいセッティング終了。超早いねさっすが私!』

誰に自慢しているかわからないがそれに見合った実力を示す程の力はある流石は天才と言つべきか一同はその行動に驚嘆していた。

『じゃあ試運転も兼ねて飛んでみてよ！篝ちゃんのイメージした通りに動くとから』

『では……………』

ビュンッ！

消えた。実際には消えてはいないが、人が肉眼で捉えられないぐらいのスピードで上空に上昇したのだ。

『何あれ早っ！』

『あれが第4世代の加速って事なの…』

篝が乗る紅椿は遠くから見ると光輝く赤き流星だ。

その流星は縦横無尽に自由気ままに駆けていた。

『どう篝ちゃん？篝ちゃんがイメージしてた以上に飛べてるでしょ』

『ええまあ』



『じゃあ刀使って見せてよ。左が雨月、右が空裂ね武器特性のデータ送るよ』

箒は武器データが送られて来た事を確認すると紅椿を急停止させて両手に2つの刀が姿を現した。一夏の雪片式型と違い純粋な物理的な刀である

『いくぞ雨月!』

そう言うと箒は左手を何も無い空に向かって突いた、すると雨月から無数のビームが彼方の雲を裂いてしまったではないか。

『おお』

『うん良いね良いね!!じゃ次はこれを落として見てよ!』

すると束の真横にミサイルランチャーが展開されもの凄い轟音と共に9発のミサイルはすべて箒に狙いを定め飛んでいった。

飛んでいったミサイルは普通のミサイルではなかった箒が急旋回するとぴったりとくつつき時には箒の動きを予測して迫ってきた。

箒は180度回転しミサイルの方を向き今度は右手の空烈で横に一閃し斬撃を出しミサイル全弾破壊してしまった。

『やれる……この紅椿なら私は負けない!!』

その目はまるで子供が大好きなおもちゃを買ってもらったぐらいに輝いており、迷いの類は一切見られなかった。

『織斑先生~~~~~』

突然山田先生がすごい形相でこちらに走って来た。着いた時には息もさながらで肩で息をしていた。

『どうしたんだ山田先生』

『これがハアハア……学園から……』

『ふむ…特務レベルA現時刻より開始せよか……篠ノ之テスト稼働は中止だ至急お前たちにやってもらいたいことがある』

『ハアハア織斑先生……そちらの方は?』

『篠ノ之東だ』

『え——！！？』

17話 『これより作戦を開始する!』

【旅館】

畳が12畳敷き詰められ部屋には昼間にもかかわらず外部からの光は遮断され唯一の光は壁に写されたディスプレイと数機のパソコンのみだった。そこに専用機持ちが集まり部屋の中央にある大きなテーブルを囲むようにそれぞれ座り、最後に壁に大きく投影されたディスプレイの前に織斑先生が立ちはだかった。

何故か束は途中で消えてしまったが織斑先生はそんなことを気にする事なく話を始めた。

『二時間前に太平洋にある島でオーメルが独自に開発していたISとそこから北東に500km離れた島で同じくオーメルで開発したAFが同時に暴走を始め2体ともそのまま監視空域を離脱した。そして学園上層部からの通達で我々がすることになった』

テーブルに写し出されたディスプレイには太平洋の2つの島が赤く点滅しておりどうやらそこで事件は起こったらしい。

『事故なんですか?それとも人為的なものなんですか?』

『わからん…だがこの2つの兵器は1つに合体する事で本来の力を発揮する。そして今から一時間後にそれは接触することがわかった。この作戦は空域及び海域は教員が封鎖をし専用機持ちがIS、AF』

を止める事になった。』

『え〜〜〜〜!?!?』

一夏が大声を上げて驚いたので皆は一夏の方を向き呆れていた。正直当たり前の反応だった半年前まで一般人として生活していた一夏にとってはこんな話しはもっと遠い世界の話だと思っていた。

『つまり我々が暴走したISとAFを止めると言うことだ』

『男なんだからいちいちそんな事で驚いてんじゃないわよ』

(そんな無茶苦茶だ)

どうやら驚いたのは一夏だけらしく案外篤は落ち着いていた、それはもしかしたら紅椿をもらったかもしれない。

会話が離れてしまったので改めて織斑先生が話を進めた。

『よって本作戦はISの破壊又は停止及びAFの足止めだ。AFはISを破壊すれば機能が停止する事になっているため無理に破壊することはない。何か意見はあるか』

『はい！ISとAFの詳細なスペックデータを要求します』

『良いだろう。だが情報が漏洩した場合、査問委員による裁判と最低2年の監視がつけられるぞ』

『わかりました』

ピッピッピッ

ディスプレイには2つの画像と細やかな情報が次々と表示されていた。

『……このIS、AFともに超広域殲滅を元に開発された機体だ。ISの名はシルバリオ・ゴスペル、AFの名はアンサーだ』

『へへへへ。メールは試験段階まで開発出来ていたんだ』

『知っているのか？』

『噂程度ですけど……確かコジマ兵器を使うとか……』

『その通りだ。シルバリオ・ゴスペルがアンサーと合体した時のみ』

使用が可能になるらしい、だからなんとしても接触だけは避けなければならぬ』

『これだと接近戦が未知数か……教官偵察行動を要求したいのですが』

『無理だな。シルバリオ・ゴスペルは現在も500kmの速さでアンサラーに接近中、アンサラーも射程距離が1000mでおよぶどころかも偵察は無理だ』

『シルバリオ・ゴスペルの場合はアプローチが一回切りと言うことですな』

『時間的にアンサラーも一回と考えた方が良さそう』

『となるとやはりシルバリオ・ゴスペルは一撃必殺が良いですね』

『うんうん……ってええ!?!』

『あなたの零落白夜で落とすのよ』

『俺が行かないと駄目なのか?』





『一夏は零落白夜に全エネルギーを使うから誰かが一夏を運んであげなきゃならないね』

『高感度ハイパーセンサーも着けなくてはいけないな』

『現時点で最高速度の出せるものは……………』

パカッ

『ちよっーと待ったー』

ヒョイツ！

『また出たよ……………』

またもや束は顔を屋根裏からヒョイと出しあたかも最初から話を聞いてたかのように意見を出してきた。  
馴れているのか織斑先生はもう見向きする事なく話を続けようとした。

クルクルクルクル  
スタッ

『ちーちゃんちーちゃん私に良い考えがあるんだけど』

『よるな』

見事な大回転による華麗に着地をこなし織斑先生の下に駆け足で寄り、頭を抱える織斑先生の肩を揺さぶったその動きは前以て練習していたぐらい滑らだった。

『ここは断然紅椿の出番なんだよ』

『何!?!』

織斑先生は確かに先程紅椿を見た、あの超スピードと高火力の武器をだが今日初めて使ったISをすぐに実戦に投入することを決めかねていた。

『大丈夫なのか……』

『少し時間をくれれば調整も終わるから余裕だよ〜!』

『そうか……篠ノ之お前は行けるか』

『はい』

『よし！決まりだな。あとアンサーはそうだな………和泉に任せるか』

『はあなんで俺が！？』

『何回かジャイアンキリングをしているだろ？それともお前はAFと会った事も、戦った事もない女子生徒に行かせる気か？』

『は………わかりましたよ』

断れるわけがなく無駄に体力を使った事を後悔しながら了解した。その時織斑先生の隣にいた束が自分の事を見ていることに亮平は気がついた。

『へ……あなたが元リンクスの和泉亮平君なんだ………』

ゾクッ

『ええまあ』

『ふーんそっか』

束のとてつもなく冷たく鋭い視線が亮平を居抜き、亮平は金縛りにあつたような感覚に陥つた。

『ちよつと亮平！！あんたリンクスだったの？なんで私達に教えてくれなかったのよ』

『シャルロットさんといひあなた達は！！他に何か隠しているのではないんですか？』

『は？嫌ないない！何も無い近々話そうと思つていたけど話す機会がなくてな』

突然セシリアと鈴が会話に割り込んで来て亮平は驚いたが同時に安堵もした。何であんな目で睨まれないかはいけなはわからなかつたが、ある意味では織斑先生より恐ろしいかもしれない事だけはわかつた。

『織斑先生私も行きます！！ストライクガンナーの量子変換が間もなくすみます』

『それは和泉に任せる。AFに関しては私よりも詳しいからな』

教えてくれなかったためかセシリアも逆ギレして自ら立候補をした  
が決定権が亮平にあると言われ“私も連れてつてくれますよね”と  
鬼の形相を女神の笑みで隠し無言で抗議してきた。

『……よしわかった。だけど鈴とラウラは駄目だ』

『なんでよ』

『どうしてだ』

『鈴は龍砲以外は射撃武器ないし龍砲だって遠距離になると使えな  
いだろ。ラウラはまんま固定砲台だろ！AF戦では立ち止まったら  
負けだ』

『『うゝゝゝゝ！！』』

さすがにこればっかしはどんなにこねられようとも譲れない、どん  
なに睨まれようと後でどんな仕返しが来よう。

『決まったようだな！アンサラー及びシルバリオ・ゴスペル以後福音の破壊作戦開始は30分後だ各人準備する様に』

作戦開始まで残り15分前

ISを展開させた筈は一夏と共に束の話を聞きながら立っていた。木々が立ち並びすぐ傍の滝から流れ落ちた水がゆらりと小さな川を作り流れているそんな幻想的な風景の中で。亮平、シャルロット、セシリアも少し離れた場所で作戦会議をし、ラウラと鈴は織斑先生と何か話していた。

『筈ちゃん紅椿を展開装甲にしてみてよ』

『はい』

『展開装甲って言うのは第4世代ISの装備で簡単に言うと雪片式型の進化した形なんだよ』

『全身のアーマーを展開装甲にしちゃいました！！ブイブイ！』

そう断言をして束は水色に光るキーワードを叩いていき紅椿の調整を行い始め箒はただ姉がしている事を見ているしかなかった。

『束調整までどれぐらいの時間がかかる』

『8分あれば終わるよ』

『織斑、篠ノ之。福音と接触してからアンサラーの射程距離に入るまで10分だ、たとえ亮平がアンサラーを足止めできても多くて2〜3分だその間になんとしても破壊しろ』

『はい』

『なんか雰囲気変わったんじゃないIS学園に入ったからかな？』

『そんな事はない私は昔と一緒だ』

箒は照れるかわりに仏頂面で姉から視線をそらした。まだ上手くないかない姉妹関係はそのほとんどの会話を箒が終わらせている。

だが東にとっては返事が帰って来ただけで十分だった。

『そんなムスツとしないでほら笑って笑って』

『ムスツとなんかしてません』

『まあいいやさつさと紅椿の調整をしちやお』

そんな不器用ながらも筆は心の中で感謝していた決して口にはできないので心の中で…

『織斑先生篠ノ之博士がここにいることを上層部は……』

『知っているだが今は福音の撃破が優先されてる』

【砂浜】



一夏、篤チームは亮平、シャルロット、セリアチームよりも早く出撃するためISを展開させ海上に浮かんでいた。

『じゃよろしくな』

『普段なら女子の背中に男子を乗せるなどあり得ないが今回は特別だぞ』

『なんだやけに嬉しそうだなやつと専用機もつ事が出来たからか？』

『そんな事はない私は普段通りだ』

『織斑、篠ノ之準備はいいな』

『はい』

『織斑先生私は状況に応じて一夏の援護をしたらいいのですね？』

『ああだが無理はするなお前らは実戦が初めてだからな』

『はい。ですが出来る限り援護していきます』

『あの子なんか声はずんでない？』

『専用機を持つ事が出来たからではないか？』

残留組の鈴とラウラは旅館の作戦室で待機状態と言つ形で作戦を見守る事になった。

『織斑とのプライベートチャネルを』

『はい』

ラウラや鈴と同じことを感じていたのか織斑先生も何か違和感を感じていたらしい。

『織斑』

『はい！』

『安心しろこれはプライベートチャネルだ篠ノ之には聞かれない』

『はい…』

自分は何を言われるのだろつと身構える一夏だったが完全に空回りしてしまいホツとするのと少しがっかりするところがあった。

『どうも篠ノ之は浮かれているようだな、あんな状態では何か仕損じるかも知れんいざとなったらサポートしろ』

『はい』

『オープンチャネルに切り換えます』

織斑先生の会話が終わったのを見計って山田先生はオープンチャネルに切り換えられた。

『これより作戦を開始する!!』

ホバーで一夏は幕の近くに寄り背中を掴み準備が整った。すると想像以上の衝撃が一夏を襲い危うく手を離してしまうところだったが、なんとか掴んだ。加速をした紅椿は大きな水しぶきを上げながら一瞬にして空の彼方に飛んでいった。

『速いなー！』

『すごいイグニッションブーストの比じゃないよ！』

『あれが第4世代と言つことですか…！』

圧倒的な力を前に呆然と立ち尽くす3人だが悠長にそんな事をして  
いる時間などなかった。

『よし俺達もでるか！』

『うん』

『はい』

亮平の言葉に2人は強く頷きISを展開させた、2人のISは長距離移動型なのかどちらにも形状が大きく変わっていた。

『和泉』

『はい』

『状況が悪くなったらすぐに退けお前は死んでも構わんが、デユノアとオルコットが死んでもらったら困るからな、まっいざとなったらお前が盾にでもなれ』

『……………りょかい』

(もつちよつと何か優しい言葉はかけられないのかあの先生は)

亮平の甘い考えも見事に打ち砕くそれが織斑先生だ。この人には反論が許されないとわかっている、だから素直にYesと答えるしかなかった。

気持ちを切り替えられ先程の面倒臭そうな顔ではなく真剣そのものだった亮平はISを展開させゆるりと空に上がっていった

『何をなさっているのですか?』

『ん?ああVOBをするためにはある程度の高度とスピードが必要なんだよ』

『そうだったのですか』

『俺は準備が出来たけど…2人とも大丈夫か？』

『うん！』

『はい！』

亮平は量子変換されたVOBとドッキングしバイザー越しに外部接続確認の表示が出たのでVOBに火を散らした。点火をしたがホワイトグリントは倍になった重力を支えきれずに高度が落ちていった。いつの間にかシャルロットとセシリアは出発しており米粒ぐらいの大きさになっていた。

ドオン！

何かが爆発下のではないかと思わせる爆音を合図にホワイトグリントは時速2000kmを越えるスピードは瞬時にシャルロットとセシリアを追い抜いた。

『織斑君篠ノ之さん両名は1分後に福音と接触。和泉君も5分後にアンサラーに接触続いて10分後に到着します』

『そつか……………！』

この戦いの要は如何に素早く一夏と箒が福音を倒せるかと、アンサーをどれぐらい長く足止め出来るかが鍵になり織斑先生は心配でしようがなかった。それは弟を死の淵へ放り込むからなのか、この事件には何か裏があるからなのかは本人しか知らないはずにせよ今回の事件は人為的な物だと読んでいた。

17話 『これより作戦を開始する!』 (後書き)

ISは水中に入った場合没するのか疑問です  
自分としては水中でも活動できるようにしたいです





ら福音が撃破されれば停止する、それまで持ちこたえてくれれば良い……』

『なんだそれで良かったのか』

『だが和泉………』

『はい？』

『万が一の事もあるからな、その時は頼むぞ』

確かに一夏達が成功してくれれば万々歳だが、2人ともイレギュラーと戦った事はあっても実戦というものは皆無だその事を織斑先生は示唆しているのだろう。

失敗するかもしれないだからそれよりも早くアンサラーを撃破し当面の危機を回避してくれと、いわば俺は2人の保険と言うことだ。

アンサラーからの攻撃は想像以上で、数え切れないほどのミサイルの嵐が常に亮平を襲いディスプレイには常にアラート文字と耳元で鳴り響く警告音が亮平をいつそう不愉快にさせていた。

(1つ砲台からはおよそ100発出ると考えてそれが2つあるって事は………っておいおいいくら何でも多すぎるだろ)

ミサイル事態には強さはないが、その分数で押されてしまいホワイ  
トグリントこと亮平は未だに接近が許されずアンサラーの周りを駆  
け回っていた。

『……これじゃあ埒が明かねえよな』

亮平は自らのPAを犠牲にしてまでアンサラーに接近する事を決意  
する。

パカッ

ドッ！

キュイイイイイイイイイイイイン！！

レーシングカーが出すような高い音をだし、亮平からどんどんミサ  
イルが離れて行った、それは歩いている人を車が意図も簡単に追い  
抜くぐらいのスピードで。

『よしー！』

案外簡単に羽の上に到着する事が出来た亮平は、襲いかかるミサイ  
ルの雨を掻い潜りアンサラーに反撃を始めた。

ドンッ！ドンッ！ドンッ！  
ビュン！

ドンッ！ドンッ！ドンッ！  
ビュン！

決して一気には狙わず一定の感覚、つまりミサイルの発射され到達する直前まで撃ち続け寸前で回避行動に入るそれを繰り返しながら攻撃をすると言う一定のパターンで攻めていた。

これがAFの弱点でもある。ISならばすぐに戦法を変えることが出来るが、多数の人間が操作するのならばすぐに戦法を変えられる筈もないしかもそれが無人機ならば尚更。

ズドオオオオオン！！

『あと9つか……………』

超音速で移動する福音を捉える為に筈はそれ以上の速度で海上を飛行する事になる、景色など眺める暇もなくただひたすら目標目掛けて一直線に向かって

『一夏見つけだぞ!』

『あれがシルバリオ・ゴスペル……』

どうやらまだこちらの存在には気づいていないみたいでとりあえず一安心、もし見つかってしまった場合奇襲など出来ず真つ向勝負になっってしまう、2人にとってそれだけは避けたかった。

『一夏、目標との接触は10秒後だ!』

『わかった』

一夏は超音速で飛行している感覚に何とか慣れ紅椿の背中に立ち上がった、しがみついている時と立っている時では明らかに空気抵抗が違うので一瞬一夏はよろめいてしまうがなんとか足に力を入れ踏みとどまらせ零落白夜を発動させた。紅椿は福音のほぼ真下に来ると今まで隠していた力を全て出すかのように急降下をした、それは先程までの速さと桁違いであった。

『ウオオオオ！』

『？』

一夏の叫び声に気づいたのかセンサーに捉えられたのかわからないが、福音は真っ直ぐこっちに來た白式と紅椿を軽くいなして今までの一定の速度から不規則な速度と飛行になり飛んでいった。

『箒このまま押しきるぞ！』

『了解した』

赤く光輝く星は澄んだ青い星を追いかけるが中々捕まらなくしばらくおいかけつこが続いた。紅椿はとうとう福音を真正面を捉え零落白夜を発動させた一夏は雪片式型で全力で切った。

『かわした！？』

難なく福音は上に上昇をして避け全36門からなるエネルギー弾を2人に向けて発射した。2人一緒だと集中されるので一夏、箒は追尾式のエネルギー弾を分散させる為に互いに一旦離れやり過ごす事にした。

『箒左右から同時に攻めるぞ！左は頼んだ』

『了解した』

シルバリオ・ゴスペルは2人が攻めて来るのを感知すると福音による無数のエネルギー弾が2人に向かって一直線に突っ込んできた。箒の紅椿は火力の高い中距離武器があるのでほとんどを一瞬で薙ぎ払っていつているが刀が一本しかない一夏は避けて振り切るしか方法がなく箒の倍の時間がかかってしまった。

『一夏私が動きを止める！』

『わかった』

すると紅椿の背中からビットが飛び出し福音に幾度となく突進して襲うが装甲が堅いのか致命傷にまでは至らなくバランスを崩させることしか出来なかった、だが箒にとっては動きを止めるだけで十分であった。

紅椿の雨月と空烈が福音の肩に刺さり動きを止めることができた。

『一夏今だ』

一夏は雪片式型を両手で握り福音に切りかかろうとしたが、何を思

ったのか通り過ぎてしまった。

『一夏！？』

訳もわからない行動に出た一夏を見ていた箒は力を緩めてしまった事に気づかず、福音の自由を許してしまった。ここぞとばかりに肩に刺った刀を抜き至近距離で箒にエネルギー弾を浴びせ福音は逃げてしまった。

『何をしている折角のチャンスを！』

『船がいるんだ海上は先生が止めた筈なのに……』

『船だと？』

箒は目の前にディスプレイを開き一夏の指差す方向にズームをした確かに船がいる……だがディスプレイの左下にはUnknown（不明）と記されていた。

『密漁船みたいだ』

『密漁だとその非常事態に』



『奴らは犯罪者だ放っておけ!!』

当然の様に箒は言い放ったが一夏がそんな理由で引き下がる訳がなかった。

『見殺しにはできない!』

『馬鹿者!犯罪者などかばってそんなやつら』

『箒!!そんな寂しいこと言うなよ!力を手にしたら弱いやつ  
の事見えないなんてらしくないぜ』

『私は.....私は.....』

やっと自分が言った言葉を理解したのか箒は力をなくし握っていた  
刀を海に落としその場で泣き崩れてしまった。

箒の後ろで福音が再び機動し動きを止めた二機のISを捕捉した福  
音は最大火力でエネルギー弾を一夏と箒に撃った。

『間に合ってくれ!!』

箒は未だに気づいていなかった泣き崩れてそれどころではなかったのだ、一夏は全力で箒を庇うように福音の前（箒の真後ろ）に出た。そこでやっと箒も気づいたが遅かった…… エネルギー弾はすでに一夏の目の前にきていて一夏が自分の盾になった事を悟った。

ドドドドドドドオン！！

『一夏！』

なんとか箒を守った一夏は意識が朦朧としたなかで最後に箒の顔を見えたその顔は普段の凜とした顔立ちとは程遠く涙で濡れていた。

ドボオオオオオオン

爆発の衝撃で海に叩き付けられた2人は海面に顔を出すこと無くそのままに海に落ちて行った。

福音は2機のISの反応がないのを確認するとアンサーがいる方向に飛んでいった。

【亮平、シャルロット、セシリアvsアンサラー】

1枚目の羽を破壊したあとシャルロットとセシリアが到着し3人は巨大兵器との戦闘をしていた。攻撃方法は至って簡単、シャルロットがミサイルの防御と迎撃係でセシリアと亮平が攻撃係であった。

『セシリア撃て！』

『お任せなさい！！』

ドオオオオオオオオン

ブルーティアーズのライフルが2枚目の羽にとどめをさし爆発を上げながら羽は脆く崩れ落ちて行き海面は大きな波と水しぶきが上がり霧雨が降り注いだ。

『これで2枚目だね』

『ああ。だけどあと何枚破壊すればいいか……………』

ピ。ピ。ピ。

『和泉君聞こえますか?』

『はい聞こえます』

『羽の根本と下の部分にひし形状のトゲトゲが幾つもあるのがわかりますか?』

2枚の隣合った羽がなくなった事で傘の中はよく見えた、その中には確かにトゲトゲが傘の持ち手と根本に密集していた。

『あのトゲトゲはなんなんですか?』

『あれは下の部分がエネルギー供給機関、上部がコジマ粒子発生機関です。あれのどちらかを破壊するか羽を半数以上落とせばアンサーは浮かんでいる事が出来なくなり自滅しますが、今は福音と合体していない為上部のトゲを破壊しても意味がありませんので、下部のトゲか羽を半数破壊してください。どちらを破壊するかは和泉君に任せます』

『わかりました』

『どつしますか亮平さん……』

『下のエネルギー供給機関を狙うぞ俺とセシリアが狙い打つからシヤルロットはその間守ってくれ』

『うんわかった』

下部のエネルギー供給機関を破壊すれば終わるのだが近づけばハイレーザーの嵐が行き交うので遠距離で撃てばなんとかなるのかと亮平のミサイルとセシリアのライフルで破壊を試す事にした。

『?.....避ける!!』

亮平とセシリアとシヤルロットが避けた場所には、アンサラーの羽の部分がチカチカと光った青い光と熱がかすめて行った。

『ちっ』

羽と言う遮蔽物がなくなったために奥側のハイレーザーがこちらに襲いかかってきたのだ、それに加えミサイルも絶え間なく発射されている。だがそんな時こそ冷静なシヤルロットは焦らず的確にミサイルを撃ち落としていきハイレーザーが来ればシールドでガードしてくれて見事なサポートだった

『亮平そんな長くは持たないから急いで!』

シャルロットの言葉を合図にホワイトグリントの分裂ミサイルとブ  
ルーティアーズのライフルが下部のトゲトゲに放たれた。

ビービービー

『?』

爆発はしたが亮平がディスプレイを確認すると撃墜マークが表示  
された。

『迎撃まで出来るのかよ!』

亮平の隣でセシリアも何やら難しい顔をしていた。

『こちらも距離が離れすぎていて威力が弱まっていますわ』

亮平は悩む暇はないがつい考えてしまう

(これ以上近づけば確実に今以上にハイレーザーが襲ってくるし、かといってこのままセシリアの威力が弱まったライフルで狙い続けたらシャルロットが持たないし……………)

『セシリア、シャルロット作戦変更だ。このまま羽を落として行くぞ』

『わかった!!』

『了解しましたわ!!』

亮平はハイレーザーが届かないアンサラーの上から攻めようと考え上昇をしセシリアとシャルロットもその後続いた。  
これ以上は時間も掛けてられないのでシャルロット、亮平、セシリアは互いにカバーをしながら3人で攻撃という荒業に出た。

ビービー

しばらくアンサラーとの攻防を繰り返していると3人の目の前に赤いアラートの文字が浮かび上がり鳴り響いた。  
リーダーを確認しようとした瞬間何かアンサラーに一直線で突っ込んで行き、アンサラーの上部のトゲトゲの部分のハッチが開きそ

れを優しく迎え入れた。

ピッピッ

ほぼ同時に織斑先生の声が聞こえてきた。

『和泉、……………ノア、オルコット作戦は……………だすぐに……………』

ザー……………

ブツン

大きい声はノイズのせいでうまく聞き取ることができず、やがてノイズが吹き荒れ何も聞こえなくなってしまいこれでは無線の意味がないので亮平は切ってしまった。

確認をするとリーダー類は全て使い物にならなくなってなりその原因はどうかやらアンサラーに有るらしい、アンサラーの体は全身にコジマ粒子を巡らせまるで生気が帯びたかの様だった。その場には緑色のコジマ粒子が漂い始め、近くにいた3人は目で確認できるほどの濃度であった。

そして3人はあれが何なのか、織斑先生がいったい何を言おうとしたのかをやっと理解することが出来た。





19話 『Reaction』(前書き)

ついにアンサーと合体してしまった福音、2人の安否が気になる  
シャルロットだったが……

19話 『Reactivation』

最悪の展開であった。福音はアンサラーと合体しコジマ兵器を使える様になり。亮平のPAにセシリアやシャルロットのエネルギーは周囲の高濃度コジマ粒子の影響によって減って続け、おまけにほとんど濃度が高くなっていくせいで通信機の類いは全てイカれてしまい使い物にもならない、これ以上に最悪な展開があるだろうか。

『……………』

『……………』

『まさか一夏さんと箒さんは……………』

考えたくはない、だが最悪の場合2人は死んでいるだろう、少なくとも無傷では有るまいその事を悟ったセシリアとシャルロットは尋常ではない焦りに襲われていた。

『亮平！助けに行こう今ならまだ間に合うよ！』

『一夏や箒の心配よりも作戦の方が重要だ今助けに行く訳には行かない』

『なんでさー!!』

亮平の返答に声をあらげて聞き返すシャルロット。元リンクスとしては正しい選択かもしれないがシャルロットにはそんな事は関係なく意味がわからなかった。

『一夏さんも箒さんも私達の助けを待っているかも知れませんわ……』

『今の俺達はアンサラーの標的だ。このまま一夏と箒の所までアンサラーを連れてきて見ろ、怪我人2人を守りながら戦える訳もないそれこそ全員死ぬぞ!』

『逃げ切れれば良いんだよ!!』

『それでも駄目だ』

『どっしり……』

尚も拒み続ける亮平の態度にシャルロットは怒りを露にしている例え亮平がどんな言葉を並べてもシャルロットにはわからないだろう。

その顔は普段では見せないくらい眉間にシワを寄せ目を吊り上げており、声はいつものおしとやかな優しい声ではなく怒りの感情で満ちていた。

『優先順位だ』

『え？』

予想外の言葉にシャルロットは驚きを隠せなかった、まさか亮平の口からそんな言葉が出てくるとは。

『もし仮に逃げ切れたとしても、その後目標が無くなったアンサラーはどうなる？ 他を襲うかも知れない』

一刻も早くアンサラーの撃墜しようとする亮平と死にかけてるかもしれない仲間を助けに行きたいセシリアとシャルロット。

この価値観の違いは今まで生き方の違いからであろう。亮平は戦場で生きてきて作戦よりも仲間を優先してしまい時には作戦の失敗時には多くの仲間の死、とにかく仲間を助けて録な事がなくだからこそ言える考えだった、だがセシリアとシャルロットには理解できず理解する暇もなかった。



誰にも聞こえないぐらい小さな声で呟いた。  
互いに睨み会っていた亮平とセシリア、シャルロットであったが今の亮平の言葉にシャルロットは言葉も出なかった。  
そんな会話をお構い無しにミサイルはどんどん放たれ3人目掛けて襲い掛かってくる。

トトトトトトトトトトトトトトトトトト

トトトトトトトトトトトトトトトトトト

双方の考えは合わさることはなくその為には多くの時間かいるようだが、今はそんな時間すらなかった。

『なら俺がアンサラーを引き付けて2人で助けに行くそれで満足だ』

『そんな無茶ですわ!』

『……………セシリア……………AFの戦い方は僕たちよりもわかっているからここは亮平の考えに従おう』

『ですが……………』

もはやシャルロットは亮平と目を合わそうともせず、にセシリアの手を引っ張り一夏達がいたとされる場所に向かった。

亮平も既にシャルロットとセシリアを見向きもせずアンサラーと戦っていた。

こうして亮平は単機でAFと戦う事を選んだ。

ズドオン！！

ドオン！ドオン！！

ドドドドドオオオン

辺りに響く爆発音。徐々に濃度を増していくコジマ粒子。浮かぶのは巨大な傘のようなAFアンサラーとその1000分の1にも満たない小さな人間。戦いはさらに激しさを増してた。



亮平は1人両手にライフルを構え最初と同じ様に撃っては避け撃つては避けの戦いを繰り返した戦いをしていた。

ビービービー

常に耳障りなアラートとミサイルの発射音、自分の息遣いそれ以外の音など亮平には聞こえてはこなかった。

『このままじゃ時間がかかるし、これ以上は持たないな』

羽を破壊しているが先程と比べ戦力は3分の1にまで下がったのでざっと3倍の時間がかかっていた。コジマによってAPも大分削られこのままではこちらが落とす前に落とされてしまう。悩んでいた亮平はふと山田先生の言葉を思い出した。

『そう言えば今は福音と合体してるんだよな』

……上部のコジマ粒子発生機関までハイレーザは届かない訳だし……そこを狙うしかないな！』

ズバッ！

ズバッ！

ズバッ！

亮平は両腕をブレードに換え破壊された羽の隙間から上部のトゲトゲに近づき次々と破壊して行く。

『よしこれなら行ける』

何個あるかわからないトゲトゲをどんどん切り落とし行くが一向に終らない、だがここまでではミサイルもハイレーザーも来ない、つまりアンサラアの唯一の弱点部分を亮平は攻撃していたのだ。

ブオオン！

余裕をかましていた亮平は自分の周囲、福音がいるとされる場所を中心に緑の球体に覆われている事に遅く来て気づいた。わずかにその球体に触れていた事にすら今頃気づいた亮平はそんなことを気づかなかった自分を呪うが、時既に遅し。PAは一気にまで減衰して0になってしまった。

『まさかっ！』

急いでその場を離れようとバックブーストで傘の外に出ようとするが、アンサラアの中心にある緑色のコジマ粒子の集まりが一気に外側に解放され亮平を包みこんだ。

シャルロットとセシリアは何か一夏と箒を旅館に連れ帰ってきた。一夏と箒の元に到着したときには一夏の意識は無く箒がなんとか支えている状態であった。

今は再び出撃する事を頼んだが織斑先生に断られてしまい待機状態のセシリアとシャルロットは異常がないか検査を受けていた。

『亮平さんが心配ですか？』

『……………』

いつもの様に明るく太陽みたいな面影はなく今はどんより沈んでいてセシリアも流石に気になってしょうがなかった。

『セシリア……………あの時亮平の考えの方が正しかったのかな……………』

シャルロットはあの時嫌でも亮平と一緒にいれば良かったのかいまだに悩んでいたが一向に答えはでない、例え倒すことが出来たとしても友達を死なせてまですることではない。その考えをシャルロットは変えようとはしない、実に仲間思いのシャルロットらしい考え方であった。それ故に亮平の考えは理解しがたかった。

『シャルロットさんもエネルギーがなくなっただのは気づいていましたよね、もし一緒にいたとしても私達がいたら返って足手まといになりますわ。その点では今とった行動は正しいと思ひまして』  
『よ』

『でも亮平を一人で置いて来ちゃった……………』

『今は無事に帰ってくる事を祈ることしか出来ませんわ。これが全て終わったなら亮平さんと話し合われてはいかがですか？』

『……………そうだね』

シャルロットにとっては一夏達を助けた事は同時に亮平を見捨てたと考えてしまい、今は誰かの賛同の意が欲しかったのかもしれない。

## 【太平洋海上】

気づいた時にはアンサラーによるAAアサルトアーマーが使用され視界は緑一色となり無音と共に見えない衝撃が亮平に襲いかかって来た。その衝撃でホワイトグリントの前面の装甲は半壊状態となり、ブーストも使えなくなつて浮かんでいられなくなったホワイトグリントは200m上空から海中にまっ逆さまに落ちてしまう事になった。

アンサラーは尚も攻撃の手を緩めずハイレーザーで追い討ちをかけており亮平は紙切れの様な装甲で覆われた腕で顔や胸を守るしかなかった。

ドボオオオオオン！！！！

勢い良く海面に打ち付けられた亮平は口から血を吐き出しながら海中に沈んで行った。

（くそっここまでか……………アンサラーも結構傷付けたし、最終的には他のネクストが倒すか。最後の最後で失敗するとはな……………まっこんなもんか。あいつら無事だったかな？）

亮平も2人の安否は気になっていた、昔も僚機として誰かと一緒に戦うと言う機会は会ったがそれも一時に過ぎず、時と場所が変われば敵になり倒すべき相手になる事も良くあること。だけど亮平がIS学園に来て初めて仲間と呼べる相手ができ、そいつらの安否だけが唯一の心残りだった。

そんな事を思っただけでも海の中では思う様に体が動かない上、半壊したホワイトグリントの重さも加わりどんどん暗い海中に沈んでいった。亮平の意識が徐々に薄れて行き海に射し込む太陽が亮平の死を見送っているようだった。

ピッピッ

乱れながらも現れたディスプレイにReaction（再起動）の文字が表示された。亮平には何の事が解らないまま真っ白な光が亮平とホワイトグリントを包み込んだ。

ザバアアアン！！

そこにはISとして使い物にならないくらい壊れていた時と思えな  
いぐらいに修復されており純白の色をした装甲で亮平は立っていた。

しかしその純白を染めるかのように亮平の腕から出る血が純白を染  
めていた。

亮平は腕を骨折し内臓は損傷、ホワイトグリントを展開していなか  
ったら立っていることも無理で有ろう状態で立っていた。

『はあはあ……………』

何度か息遣きをするがそれすらも痛い。アンサラーは再びAAのためにコジマ粒子を充電し初めた。

(充電からAA使用までおよそ10秒それだけあれば十分)

OBで一気に距離を縮める亮平、それを感知しハイレーザーで迎撃を行うアンサラー。

ビュン!

ビュン!

OBとQBと併用しながらすり抜けたどり着くと、充電中の緑の球体に触れてPAを減らされない様注意しながらまた両腕のブレードでトゲを次々と切り落としていく。

『終わりだ!!』

ラスト2秒のところではホワイトグリントのAAを喰らわしてやった。

ドオン

ドオーーーーーン!!

するとA Aの充電が途切れあちこちで爆発が起き始めた。

やがて力を失い支えきれなくなったアンサラーは重力に負け海面に激突をする。そんな中なんとか亮平は不安定な操縦で押し潰されないう様に上空に脱出する事に成功した。

海面に不気味に浮かぶアンサラーに亮平は福音がいるとされる場所を無理矢理こじ開けただが、そこはものけのからで福音は既に脱出して上空で亮平を見下すように立っていた。

暫く互いに睨み合っていたが福音はすぐに飛び去ってしまった。

『待て……………!!』

言い終わる前にアンサラーは大規模なコジマ爆発を起こしてしまい、  
またもや亮平は爆発に巻き込まれる羽目になってしまった。



20話 『あ！もしもし』（前書き）

A Fアンサラーをなんとか撃破したが作戦は膠着状態であり、待機を命じられた専用機持ちは我慢出来ずに自分たちの判断で出撃してしまっ。

20話 『あ！もしもし』

ピーピーピー

一定の規則でなり響く高い機械音が静かな部屋での唯一の音源であった。

その機械の隣に布団で横になっていた亮平は腕に繋がっている管やコードを不愉快になりながらゆっくりと上半身だけを起こした。

『和泉君気がつきましたか。』

『あつどもも』

窓から夕陽によって照らし出された場所は全てオレンジ色に染められ、あとは影の部分の黒と橙色の2色のみとなっていた。部屋に入ってきた山田先生の髪の色もオレンジ色に変色しており雰囲気は違った。

『まだ絶対安静ですから寝ていて下さい』

『山田先生、一夏と筈は無事ですか？』

亮平の隣にある機械を何やらチェックしていた手がピタッと止まっ

た。

『……………篠ノ之さんは無事ですが織斑君が命に別状はありませんが意識不明の状態です』

『そうですか……………あれから作戦に何か変化は？』

『ありません。アンサラー撃沈後福音は活動を停止しており、新たな作戦を考えています』

『俺も出て……………』

『駄目ですよ！いくらホワイトグリントのダメージが無くなっていったって和泉君の怪我は重傷なんですから』

亮平は自分の言おうとした事を先に断られてしまい言葉が詰まってしまった。

確かに左腕の骨折は自分にもわかったがホワイトグリントに乗っていると補助が作動して少しの痛みしか感じられないから実際の所は大丈夫であった。

『アンサラーを倒したのもすごいことなんですから後は私達に任せてください』

『わかりました』

そして亮平は再び布団の上で横になり目を閉じ眠りについた。

### 旅館ホール

今のこの時間は1年生達が2日目の日程つまり観光旅行からの帰りで、ホールは楽しそうな会話で埋め尽くされていた。そこに向かい合うように並べられたソファに4人は座っていた。

『はあ〜私も行きたかったな』

鈴1人のため息と愚痴を3人は一体何回聞いた事だろ、よく飽きないなと言いたい所だが解らなくもなかった。その訳は6時間前の作戦によるものであり、いまだに続行中の作戦によつて専用機持ちはもちろん旅館から一步も出られず軟禁状態だった。さらに作戦に鈴とラウラは作戦すら参加しておらず、鈴は今にも爆発しそうな位に膨れ上がっていた。

『鈴さん少し落ち着いたらどうですか』

『これが落ち着いてられないってーの！！本当なら今日は一夏と出かける予定だったのに』

“こいつまた抜け駆けしようとしたな”と思う一回だがそれは自分にも言えた事、今は触れないようにした。

『シャルロットさんは亮平さんの所に行かなくてよろすいのですか』

『うん。……………何を話せば良いかまだわからないし今は会いたくない』

『そうですか…………』

『しかしこれから大変だな』

『どづい意味よ？』

ソファーに深く座りどこか遠くを見ている目をしていたラウラはその視線を鈴に向け説明を始めた。

『一夏と亮平は怪我をして作戦参加不能。 箒は今は戦える状態ではない戦力。』

戦力が半分になってしまつては作戦の続行は難しいだろうな』

『じゃなんで私達はまだ待機状態なのよ』

『つまりまだ作戦が続いてるってこと？』

『そう考えるのが妥当だな。これは企業から頼まれた依頼であり学園はどうにかして企業に貸しを作りたいのだろう、だから上からまだ命令の変更がないのだろう』

### 【作戦室】

ガラッ

襖を開けたのは山田先生。織斑先生は振り向かないままスクリーン状のディスプレイと睨み合っていた。

『山田先生、和泉の様子は？』

『今さっき目が覚めて今はまた眠っています』

『織斑の様子は……』

『織斑先生、そんなに心配でしたらご自分で見に行ったらいいじゃないですか』

『……………』

『わかりました。見に行ってみます』

冗談であった。こうなってしまった織斑先生は一件落着するまで動こうとはしない、そう言う事を山田先生は知っている。だけど今回は一夏が意識不明なので少し心配なのだ。

『あと……』

『はい?』

『篠ノ之がいたら休むように』

『はい』

ガラッ

『……………寝れない』

あれから寝ようと努力はしたが目を閉じるとどうしても福音の事だ  
けを考えてしまう。

(どうせ俺が行きたいって言うても行かしてもらえないんだし)

すると亮平は自分の携帯を置かれた服の中から取り出しとある人に  
電話を掛け始めた。

プルルルル

プルルルル

『はい』

『あっもしもし和泉です』



『おう亮平かどうしたんだ』

女性と思われる人物に亮平は緊張を隠せない

『え〜ウイン・Dさん？折り入ってお話があるのですが……………』

『……………』

『あ〜〜』

『どうせお前の事だ録でも無いことだろ』

『ハハハ……………えーとですね太平洋上にいると思われるISの位置特定をして欲しいんです』

『ん？4時間程前のオメールのAF戦闘の事を言っているのか？』

『そうですが何で知っているんですか？』

亮平の疑問を嘲笑うようにウインDは返答した。

『知っているも何もこっちじゃオールド関係者が慌ただしく動いているぞ』

納得はしたが新たに1つの疑問が浮上した。確かウイン・Dが所属しているのはインテリオル・ユニオンだったはず。

『今どこにいるんですか？』

『ああお前は知らなかったな、ORCA旅団の宣戦布告によって企業の連中は当面の敵をORCAと判断し、企業は同盟を組むことになったんだ』

『あ~~~~なるほど。そう言う展開になって行ったか』

『そう言えばウォルコットがお前と会いたがっていたぞ』

『会いたって言われてももう会う機会もないですからね』

リンクス同士なら仕事以外多少の会話をするが、直に会って話をす

るなどごく一部分の人間に限られている、それが一般人とリンクス  
ならば皆無である。

『なら責めて電話ぐらいしてやれ』

『努力します。……………で頼めますか?』

『そうだな……………私もタダ働きは嫌いだね……………次に会うときには  
1つなんか言うことを聞いて貰うぞ』

(?さっきもう会えないって言ったばかりだぞ、まっ本人がそれで  
いいなら良いか)

『わかりました。良いですよ』

『決まりだな、なら少し時間をくれかけなます』

ブツン

ツーーツーー

ブーブー

『早っ！！』

物の10秒もしない内に携帯が鳴り今度はメールが届いた。緯度と経度が書かれており最後には“約束を違えるなよ”と警告混じりの文面が記載されていた。

『よいしょっ』

亮平は携帯を閉じると、さすがにこの格好で外に出るのは不味いので、元々着ていたISスーツから更に制服を着込んだ。そのまま庭にでると高そうな松の木を伝って塀をよじ登って外に出ていった。

『さてとVOBは使えないかゆっくり行って着くのは7時ぐらいだな』

そんな事をばやきながら夕陽が眩しい浜辺に着くとホワイトグリントを展開させて海に出ると時速80kmのスピードで福音の元に第2ラウンドを掲げに行った。

【浜辺】

ついさつき亮平がいた浜辺を箒は走っていた。どこに向かもわからず、何のために走っているのかもわからずただひたすら無我夢中に砂浜を走っている。ずっと目覚めない一夏の看病をしていると山田先生に休めと言われ部屋に戻るが、ルームメイトにはこんな顔は見せたくないし今は1人でいたかったため時刻は7時を周り太陽が海に半分消えた浜辺を走っていた。

不意に立ち止まり海の方を見るが決して綺麗な風景を見るためではなく自分の犯した罪を償う為であった。

箒の犯した罪、手にした力を思うままに振るい力に溺れてしまい結果自分の大事な人を傷つけてしまうことになってしまった。箒は出来ることなら今すぐこんな自分を殺してしまいたい気分であった。

『箒』

鈴の声であったがこんな情けない顔を見られたくはないので振り返ることもなく黙って俯いていた。

『何？落ち込んでますってアピール……………ふざけんじゃないわよ！…！』

鈴は勢い良く箒の胸ぐらを掴むが尚も箒は沈黙を続けた。

『あんたのせいで一夏も亮平もあんな目にあつたのよなんとか言つたらどうなのよ!!--』

『私は……………もう2度とISには乗らない』

パシィン!!--

乾いた音が浜辺に響くがすぐに波の音がかきけしてしまった。

『専用機持ちっつていうのはねそんな身勝手な事を言っつていられる立場じゃないのよ!!--』

『ならどうすれば良い!アンサラーを撃破してから福音の居場所もわからない、戦えるのなら私だつて戦いたい』

『やっとその気になつたわね』

『えっ?』

鈴の後ろにはいつの間にかラウラ、セシリア、シャルロットがいた

『嫁の仇は私が討つ』

『こんな結果で満足出来る筈がありませんわ』

『みんな考えは一緒ってことだよ』

戸惑う筈をなだめるようにセシリア、シャルロットは話すが、往生  
際が悪い筈は何かしらの抵抗の言葉を探していた。

『……だがどこにいるのかもわからないし』

『それなら問題ない』

ラウラはシュバルツレーゲンの片腕だけを展開させ世界地図を出し  
どンドンクローズアップさせた。

『光学迷彩は使用しておらず衛星による目視で発見された』

『さっすがドイツ軍やるじゃない！』

『いいのか校則違反だろ』

『はあ〜あなたやるって言ったでしょ』

『やらねっばなし主義はありませんわ』

『そつ言つことだよ』

『お前ら』

『そんじゃ行くわよ!!--!』



21話 「一夏……」 (前書き)

一夏が不在のまま繰り広げられる激しい戦い、それぞれの思いを胸に今福音との最終決戦が始まる。

21話 「一夏……」

再びリンクスとして身を捧げる亮平の目にはどこか懐かしい記憶が蘇っていたが今は福音との戦いを優先すべきであるため目の前にポツンと光る輝き見つめた。

「あれか……」

時刻は目標到着時刻からやや遅れて8時を過ぎていた。もちろん太陽は完全に沈み、月は分厚い雲に隠れてしまい、ある2箇所を除いて完璧な暗黒世界だった。1つは亮平の操るホワイトグリントのブースターの光、もう1つは福音を包み込む蒼白い光。どうやら福音は自らのエネルギーを身にまとい、受けたダメージを自己修復をしている状態で無防備この上なかった。

「よし」

ホワイトグリントは福音から200m程の距離で腕武器をライフルから、かの有名なグレネード専門店有澤重工のグレネードを両腕に装備し、やや痛む腕を我慢しながら福音に狙いを定めた。

ピッピッ

ディスプレイのロックオンカーソルが赤く光るとゆっくりトリガーが絞られやがて弾が発射され薬莖が飛び出した。

ドドオオオン

はじき出る薬莖が海に落ちると同時に着弾が確認され福音がいるとされる場所では大きな花火のような爆発が起こり、赤い炎が暗く沈み切った海を壮大照らし出した。

### 【作戦室】

それは作戦室に缶詰め状態にある山田先生や織斑先生にも確認された。

「織斑先生!!」

「どこにいるかと思えば……………まあ遅かれ早かれこうなっていただらう」

織斑先生を見ると織斑先生の顔はどこか不敵な笑みを浮かべ、まるでこれを望んでいたかのようにだった。

「はあ〜」

もう山田先生は溜め息をする以外なかった。

### 【太平洋】

爆炎の灯りが消えていく最中、やっと分厚い雲が消え僅かに月が顔を  
を出し2つのISを照らした。

準備が整ったのだらう。もくもくと出ている煙を振り払うように福  
音がこちらに飛び出して来て、同時に発射されたとされるエネルギー  
弾が亮平との距離を一層無いものとした。重さのあるグレネード  
を一端パージしてエネルギー弾を次々と回避して行ったが、今度は  
行く手を先読みした福音が手から蒼く輝くビームクローを出し突っ  
込んでくる亮平の胸元に右腕を突き刺した。

ジジジジジ

かすかにビームクローの熱が肌を感じ取れた。

亮平は間一髪で亮平は福音の攻撃を静止させる事に成功する。それ  
はPAのおかげで大幅にスピードが減速されたので、それを見逃さ  
ず福音の肘と手首を掴み止めることが出来たからだ。

しかし休む時間などなかった。福音は余っていた左手を振り上げる

と一気に亮平目掛けて降り下ろした。

ズバツ！！

「ちっ！！」

亮平は頭を腕でガードしたためを装甲が持つてかれ、その衝撃で傷口開き包帯が赤く滲んできた。

そんな事を知るか知らずか、亮平はマシンガンとバズーカを装備し福音に向かってQBで距離を縮めながら間髪入れずにそれぞれの銃口から火花を散らした。バズーカの衝撃で足止めを行い、マシンガンで蜂の巣にする。作戦はバズーカの初弾が命中したおかげで成功、後は弾が尽きるまで撃ち尽くすだけだった。

【亮平と福音からやや離れた場所】

「ラウラあとどれくらい？」

「地図によればもうそろそろだが……………」

「あれではありませんか」

セシリアの指が指す方向には確かに何か光っていたが光はあちこちに移動し時々爆発も見え、明らかに不自然だった。

「もう始まっちゃてるじゃない！」

鈴はただ先を越された事だけに腹を立てているが事態はそれよりも深刻に進んでいた。

「もしかして他の作戦が決行されたの!？」

「とにかくあそこに行ってみれば解る事だ」

一刻も早く状況を把握したい鈴を先頭に一同は今も続いている戦場に足を踏み入れた。

「『『『『えっ!?!』』』』」

5人は驚くしかなかった。怪我をして療養中の亮平が現に目の前で福音と戦っているのだから。影武者？双子？嫌々あれは間違いなく亮平の操るホワイトグリントであり、この世界でそれを扱えるのは和泉亮平ただ1人、となると必然的に亮平となってしまう。

「おい亮平何をしている！んだ」

訳もわからない一同の疑問をラウラが真っ先にオープンチャネルで亮平に聞いた。だした。

『何をって言われてもなあ……………散歩してたらたまたま福音に出くわしてな、そのままリベンジみたいな感じになっただ』

『嘘を付け!!』

騙せるとは思っただけはなかったが亮平の返答がよっぽど気に要らなかったのかラウラは怒り心頭ぎみだった。そうこうしているうちに福音は態勢を立て直して反撃してきた。

「はぁー!!!!」

箒が雨月と空裂を出しセシリア達の声を聞かないでいた福音と真つ向勝負をしかけに行き亮平の間に割り込んでしまった。

「ちょおい!!」

「こいつは私が倒す!」

箒の刀と福音のビームクローの連続した打ち合いが続く中では亮平達が入り込む隙間はなくてただ呆然と立ち尽くしかなかった。

剣道少女とA Iに操作されたI Sの戦いはそう時間がかからず日頃の甘い修練が祟ってしまい福音に僅かな隙を突かれてしまいぶっ飛んでしまった。

「あんた何1人で突っ走っているのよ!少しは考えなさいよ」

「だが……………」

「そんな事するために呼んだんじゃないのよ!!」

「……………すまなかった」



「では行くぞ!!」

亮平はあんましチーム戦が得意でなかったがここで「1人で戦いを戦いたいんだけど……」なんて口を橋つたら福音よりも先に落とされそうなので敢えて黙っていた。

「おい亮平ボサツとするな」

「ああ」

「逃がしませんわ!!」

セシリアの命令で不規則に動く4つのビットたちは福音に向かい幾度となくビームを撃つが一向に当たらない。それどころかこちらに反撃する余裕すら見せた。

あれから6人の猛攻が続くが即席で作られたチームでは連携に限界があり、今もセシリアや鈴がほとんど考え無しに撃っている。でシヤルロットや箒、亮平は迂闊に近づく事も出来ないでいた。ただ人数が多ければ言い訳ではない。今みたいに自分の機体の特性を理解せず、当てる事だけを考えてはいくら良いISが揃っていたっ

てゴミに等しい。

これを亮平の嫌っていた、訓練を積みめばこの半分の戦力で圧倒出来る敵をただ時間とエネルギーだけを消費する戦いをしてしまう。

「セシリア！ライフルで敵を誘導しろ。箒と鈴は接近戦で迎え討て」

こう言う時役に立つのが軍人ラウラボーデヴィヒ。彼女も軍人としてある程度は連携の取り方を心得ているだろう、亮平は今彼女に従うのが無難と判断した。

指示を出すだけあってラウラは自分のISの特性を十分に理解していた。レールキャノン以外は間ともな射撃武器がないためどうしても遠距離になってしまい、それ故に一番戦況を把握する事が出来るラウラの前にシャルロットと亮平が構えいつでも動ける様に準備をした。

距離を置いた福音は全方位に降り注ぐようにエネルギー弾を撃つ追尾してないため狙いはより完璧だった。

箒と鈴は回避をしセシリアや亮平は残らず撃ち落とす。おびただしい数のエネルギー弾がはまだ福音から放たれていた。

「ラウラ俺があれを止める！！」

「……………了解した！」

「箒、鈴あいつが動きを止めたらとどめを刺せ」

「ちょ！どついう事よ」

鈴の返答を無視した亮平は即座にOBを使用して福音に近く。それに気づいた福音もエネルギー弾を彼に集中させるがQBと併用してしまつては最早当たる筈もなかった。

福音が危機感を察知してまた距離を取ろうとした時にはもう遅く亮平のAAが展開され辺りにコジマ粒子が漂つた。まさか自分がやつた相手に喰らうとは思ひもしなかつただろう…

OBの使用でPAが減っていたがAAによってロックオンが出来ないだけでこちらの勝利は見えた。

「箒今よ！！！」

「ハアアアアア！！！」

見えていない福音をさらに龍砲でバランスを崩してから、鈴の合図で箒は福音に向かいながら2本の刀をおもいつき降り下ろした。

ズバツ！！

ドボオオオオン

機能が停止したのか両腕を切られた福音は力をなくし儚く海に落ちていった。

だが

終わってはいなかった、太陽のように明るくなった海中から蒼白いエネルギーを身に纏い再び福音が現れた。

「いかん！セカンドシフトか！」

福音は予備動作なし一直線にセシリアの所に飛んでいくと、背中から翼を模したエネルギーで包んだのだ。圧縮されたエネルギーを喰らってしまったセシリアは、海に落ちていきそれをシャルロットが助けに行こうとするが、そんな暇はなく今度はシャルロットを標的にした。

「くそっ！！まだ回復しないのかよ」

PAが回復していないネクストなど今の福音ならば一撃で葬り去れるだろう。

本来ならば30秒程で回復を始めるがそれさえ長く感じてしまう。

その間にも戦闘は続いておりラウラとシャルロットが援護をしなから箒と鈴が戦っていた。

さつきとは比べ物にならない程の威力を持つエネルギー弾が、まずは止まっていたラウラを襲い、次に鈴を襲った。なんとか箒は避け、シャルロットはシールドで防ぎが攻撃を防ぐが、福音からの終わりのない攻撃にシールドに回していたエネルギーが見る見る内になくなっていく。

やっとP Aが全回復した亮平は両腕をブレードに換え箒と共に福音に切りかかった。

“ 甘い!! ”

そう言わんばかりに福音は2人の攻撃を避け、手から赤くチャージされたエネルギー弾を撃った。

ドオンッ!!ドオンッ!!

箒と亮平はそれぞれ直撃をしまい岩礁に打ち付けられてしまい、どうしようもない痛みが背中を襲っていた。

悔やんでも悔やみ切れない、そんな気持ちで箒は一杯だった。

「 一夏……………」

「箒大丈夫か？」

聞き覚えのある声が箒の耳元に届いた。

「一夏どうして！」

普段の白式とは違い、左腕が何やら機能がついており何より大型ウイングスラストターが4つに増えたのが操っているのは間違いなく一夏で箒は痛みが感じられないぐらい驚いていた。

「怪我は大丈夫なのか？」

「ああ浅かったらしくてな何ともないぞ」

「そうだったのか……………」

「ちょっと何イチャイチャしてんのよ!!」

鈴の一喝が2人を現実に呼び戻される、どうやら亮平やセシリアも体勢を立て直し福音と戦っているらしい。一夏と箒も互いに頷き皆

の元に向かっていった。

22話 「終わりだあ!!」 (前書き)

刻々と過ぎて行く時間激しい戦いの末、少年達はいったい何を見るか……

福音編怒濤の最終回をどうぞご覧あれ!!



22話 「終わりだぁ!!」

【ボツネタ】

なんかふと思いついてしまったので書きました。

「亮平あれやるぞ」

「あれ!？」

福音を一向に倒すことが出来ず時間だけが過ぎていくなかで一夏の自信に溢れる言葉を聞くが亮平はさっぱりわからず、一夏だけ回りと空気が違うそんな気がした。

「決まってるだろ!!」

「……」

「合体だ!!」

「そんな事ができるか!!」

“わかってないな”と言わんばかりの顔で亮平を見ているが、一夏自身どうすれば良いかわからず気合いで合体しようとしていた。一夏のまわりと亮平のまわりでは温度差が開き一夏はまだ出来ると信じ、目がメラメラ燃えていた。

辺りは未だに月明かりで太平洋を照らし、今は雲など一つもない星空が見下ろしていた。

新たな力を手に入れた一夏は零落白夜で福音に攻め掛かるがどれもが空振りどまりで未だに致命的なダメージを与えられずにいた。

しかもスラスターが増加された分スピードが大幅に上がったが、その分エネルギーの消費が激しくなり一段と燃費が悪くなってしまった。

ビッー　　ビッー

「ヤバいもうエネルギーが……………」

エネルギー残量がレッドゾーンにまで達した白式は零落白夜を発動出来なくなってしまい普通の刀になってしまった。これを好機に思った福音は今までの逃げ腰から攻めの態勢に逆転し、福音は両手を合わせ真ん中に圧縮されたエネルギーは青白い色から真っ赤になり収束されたエネルギーは荷電粒子砲として一夏に向けてはなたれた。

「一夏……!!」

どうやらシャルロット、セシリア、鈴にラウラがカバーして一夏の盾になってくれたらしい。まだ放たれている荷電粒子砲で一夏の所に容易に近づく事が出来ず、箒は一夏の安否が気になってしょうがなかった。

「箒！一夏が心配ならあれを止めるぞ」

「……………ああ」

もちろん紅椿のエネルギーも底を尽きかけており、これ以上の時間のロスはこの戦いの敗けを意味していた。  
ミサイルを発射し援護に入る亮平に合わせ、箒も雨月で福音にむけてビームを発射した。

“ギロン……!!”

今まで一夏を見ていた福音はミサイルを感知すると荷電粒子砲を辞め急上昇し、無駄がなく洗練された動きを見せ始めた。まずはビームを避け、続いて近づいているミサイルをエネルギー弾で次々破壊して行く、さらに接近する箒をカウンターで腹に拳を叩き込んだ。

「ぐっ!!」

喉に込み上げてくる血をこらえながらなんとか体勢を立て直すことが出来た。  
亮平を除き全員のエネルギーは3割を切り、ほとんど亮平だけが戦っている状態になっている。

「くそっ！！私は結局何も出来ないのか」

結局何にも出来ない筈は自分を呪ってやりたかった。

ブオン！

「！？……………」

急に黄金に輝き始める紅椿、何がなんだかさっぱりわからなく困惑する筈に4つの文字がディスプレイには表示された。

「絢爛……………舞踏……………」

エネルギーが全回復した。まだ何が起こったか理解出来ない筈であったが今するべきことだけは十分にわかっていた。

「大丈夫か篤……………」

「一夏これを！」

「??？」

近づいくる一夏の手を取ると篤はエネルギーを半分一夏に分け与え  
ると一夏は半分だけエネルギーを回復した。

「これは……………」

「そんな事は後でだ！」

一夏のあとに続々とセシリアや鈴達が来ると案の定篤が輝いてる事  
の意味がわからなかったが二人のエネルギーが回復していたことは感  
じ取った。

「僕たちが援護するから一夏と篤は福音を！」



しぶきを上げており、みんな避けるのも過酷であった。

そんな中にも関わらず亮平は諦めずにわざわざ目の前から攻めた。あの数を全部を避けるなど不可能だったが、大半はPAによって防ぎ支障はなかった。

目の前に来た亮平はライフルからブレードに換え、ビームクローで頭を狙って来た福音の攻撃を紙一重に避け福音の両腕を切断した。

キュイイイイン

素早く後退した福音は最後の最後で翼を頭上で合わせ、収束されたエネルギーを亮平に照射した。

咄嗟にQBで左に避けて見せたが、あまりの距離の短さに全てを避けることが出来ず右背武装と翼を少し持ってかれてしまった。

「一夏今だー！ー！！」

亮平の目的はあくまでも陽動、気づかれずに一夏を接近させるだけでじゅーぶんだった。

「うおおおおおー！！」

一体これで叫ぶのは何回目だろうか……………亮平の合図にやっつて気づき振り返った福音は零落白夜で、真っ正面から一刀両断された。

「  
……」  
「  
……」  
「  
……」  
「  
……」  
「  
……」

「ハアハア……終わったのか……」

「そのようだな……」

本当に終わった。

海に落ちて行ったシルバリオゴスペルは二度と姿を現す事が無く海底に沈んで行き、ふと気づけば東の空が太陽のせいで若干オレンジ色に染まっていた。



23話 「またねちーちゃん！」（前書き）

え〜作者の勝手な都合ですみませんが白い閃光は取り敢えず終わらしてもらいます。

今も続編を考えていますのでよろしければまた読んでください。

23話 「またねちーちゃん！」

チュンチュン

「……………」

太陽は完全に顔を出し小鳥の囀りが聞こえ、なんとも清々しい陽気の中で一夏達はまだ誰もいない旅館の前に横一列で並ばされていた。

そう彼らの目の前には金剛像並みに威風を放ち腕を組む織斑先生とその横におどおどしている山田先生がいた。

「お前ら自分達が何をしたかわかっているのか？」

決して大きくはない声であったがその中身は想像を絶する鬼神が隠れているだろう。

「……………」

決して長くはない。けど生徒にとっては織斑先生が何もしゃべらずただ睨んでいるのが一番怖くただ堪えるしかなかった。そんな沈黙を経て織斑先生はそっと口を開いた

「まあ良く頑張ったな」

まさかあの織斑先生からそんな言葉が聞けるとは……

「帰ったら反省文と懲罰用のトレーニングが待っているからな覚悟をしておけ！」

「「「「「「はい！」「」「」「」「」

「織斑先生……そろそろ………みんな疲れてますし」

確かに一同は泥やかすり傷で途中亮平なんかはフラフラしている状態であった。

「そつだな。今日はゆっくり休め以上解散！」

ポフツ！！

部屋に入るなり亮平はひいてあった自分の布団にダイブをするとす

ぐに寝息が一夏の耳に聞こえてきた。亮平にとってなんだか随分と寝ていない気がして布団の温もりが懐かしいような感じがした。

コンコン

「はい、おおシャルロットどうしたんだ」

「あの……………亮平いる？」

なんだか恥ずかしそうに喋っているがそれが何故なのか一夏には解らないが取り敢えず放っておいた。

「亮平は寝てるけど起こすか？」

「え！？、いやまた後でで良いよ」

シャルロットは手を振り慌てて一夏を引き止めると何かシャルロットの後ろでゆらっ動いた。

「一夏さん！」

「うわっ！！」

シャルロットの後ろから急に、セシリアが現れグイッと一歩前に出てきたので思わず一夏は後ずさってしまった。

「セ、セシリアどうしたんだ」

「あのもしよろしければ……………そのあと一緒に出掛けませんか？」

「ん？良いぜ。他の皆はどうなんだ？」

「え！？あ、それが皆さんそれぞれ用事があるらしくて」

ジーーーーー

ギクッ！

ダラダラダラダラダラ

不意に強い殺気が後ろから感じてセシリアは本能的に汗があちこちから吹き出してした。

「セシリア私は丁度今、用事が無くなったぞ」

「まあそう言う訳だから……………」

「私達も一緒について行こう」

わざとらしくゆっくりと箸、鈴、ラウラは喋りセシリアに向けて警告した。

後悔しても遅く見事に作戦が失敗したセシリアは、結局皆と一緒に出掛ける事になってしまった。

ガラッ

パチッ

観光旅行から帰って来た一夏は真っ暗で何も見えない部屋にスイッチを入れ電気をつけた。

「なんだ亮平まだ寝てるのか？」

「……起きてるよ」

仰向けになり天井をポーと見ていた亮平だったが急に明かりが付いたので目が慣れず眩しそうに腕で目を覆った。

「なんで電気つけてないんだよ」

「ちよつと考え事をな……」

「ふ〜ん。もうそろご飯の時間だけどどうする？」

制服から着替えた一夏は浴衣に着替えて布団に座り込んだ。

「ん〜俺は後で行くから先に行つてて来れ」

「おうわかった」

座った一夏はまた立ち上がり部屋を出ていくと、今までの事で一通り考えをまとめた亮平は立ち上がり部屋についたシャワーを浴びに行った。

「一夏さんも亮平さんもどこへ行ってしまったのでしょうか」

今日はみんなで椅子に座りながら、出された食事を頑張って箸で食べていたセシリアは、箸を口にくわえながらぶつぶつ呟いていた。

「たつく晩御飯は一緒に食べるって約束したばかりじゃない。セシリアあんたまた抜け駆けしようとしてるんじゃないでしょうね」

「いくら私でもそこまで卑怯ではありませんわ！それに抜け駆けするなら私はここにはいません！」

「あ！そっか」

「まったく一夏は私の嫁だと言っ事を自覚して欲しいものだな」

正直ラウラの「一夏を嫁と言っているがラウラなりの自己主張であるためセシリアや鈴はながしていた。

「だけど本当にどこに行っただらうかね？」

「わたくし探しに行って参りますわ」



そう言うと掴んでいた食べ物を勢い良く口に入れ箸を置き叫びながらセシリアが立ち上がった。

「なら私も行くわ！」

「そうだな」

結局全員で探すことになったが今いちシャルロットは乗り気ではなかった。

「じゃ私達一夏探しに行くからシャルロットは亮平をお願いね」

「え？」

「そうですね！言いたいことははっきりと言っぐまですわ」

「うんそうだね」

よりによって亮平を探しに行くことになったが、セシリアの言葉でシャルロットは覚悟を決め亮平に会いに行った。

「ではまた後でな」

鈴は既に行ってしまったセシリアを追いかけ、食べ終わったラウラもシャルロットに別れを言い行ってしまった。

「なに話せば良いのかな」

一人言を言いながらテクテクと廊下を歩くシャルロット。セシリアに後押しされたは良いが会ったら何を話せば良いか解らずまだ迷っている所であった。

「あれ亮平だよね………何で外に行くんだろう」

外は日が完全に落ち真っ暗になったのにも関わらず旅館を出ていく亮平をシャルロットはこっそりついて行って見ることにした。

「ふうーさっぱりしたし食べに行くか」

「ん！？あつ織斑先生」

シャワーを浴びすっきりした気分ですら、晩御飯を食べに行こうとした亮平は、ぼったり織斑先生とはちあつてしまい、反射的に警戒心を持ってしまった。

「亮平か……丁度いいお前もついて来い」

「え？」

亮平に四の五の言わせずに織斑先生は旅館を出てしまったのでしようがなく付いていく事にした。その後ろにシャルロットが付いているのも知らずに……

荒い風が切り立った崖に吹き、大きな松の木が一本立派に立っていた。その崖に足をぶら下げながら篠ノ之東が座っていた。

「東……」

「やあ！！ちーちゃん元気そうだね」

「お前もな……」

「やあ！ラインアークリンクスの亮平くんじゃない」

振り返りもせず亮平がいることを指摘されたが亮平も冷静に返事をした。

「“元”ですがね」

「東、私はな今回の事件である仮説を立ててみた」

「へえ〜面白そうだね」

織斑先生が言わんとしている事を理解しているのか、いないのか解らないが東はいつもと同じ調子で話した。

昔から付き合いのある織斑先生は東の変な調子に流されることなく話を始めた。

「ある妹思いの姉がいた。その妹の誕生日に専用のISを作って上げる。そしてわざと事件を起こして妹をこちらの世界にデビューさせる」

「ん〜もうちょっと何かオチが欲しいな」

「ではこんな話しはどうだ……ある企業で今世紀最大の発見をした。だがそれには多大な代償があり、それを知りながら企業は人体実験が繰り返し行われていたが、ある人物がその企業を破壊し実験体を助け出してやった」

「ふふふふ……ちーちゃんは面白い事考えるね」

その笑いは何を思うか…

………

「ねえちーちゃんこの世界は好き？」

急に話し出した言葉の意図を亮平は理解出来ず織斑先生の方を向きなんて答えるのか少し気になってしまった。

「まあな」

「でもこの世界は狂ってるよ。だから和泉君みたいな子が生まれる」  
「当たらずとも遠からずそんな所だろう……だがそんな世界に近づけたのも篠ノ之束本人である」

「……………」

「亮平くんまだ手足に痺れは残ってる？」

「どつ言う意味だ？」

束の意味の解らない言葉に織斑先生は鋭い視線で亮平の方を向いた。だが亮平に代わり束が話し始めた。

「高濃度のコジマ粒子を長時間浴びたせいだよ。浴びたのが短かったけど最後にコジマ爆発のせいで軽めだけど症状が出たんだよ。まあ一時的なものだよ。最悪全身麻痺で死んじゃうから気をつけてね」

「亮平お前は知っていたのか？」

「いえそこまでは知りませんでした」

崖のしたで波打つ音がより一段と大きく聞こえ物事の重大さを表しているようだった。  
だが表情はあくまでも冷静であり絶対に内面を出そうとはしなかった。

「そりゃあそうだよこの情報は企業が完全に秘匿して外部で知っているのは私だけ10年前それに気づいた私はコジマ技術を発見したレイレナードの壊滅をしたの」

「そうか……………では1つ質問だ。コジマ粒子と適性実験とORCA旅団は何か関係があるのか？」

「さっすがちーちゃん鋭いね！！でももう気づいてるんじゃないの……………ORCA旅団の主要人物はレイレナードで実験体になれた人物」

「壊滅させたお前はそいつらを集めテロを仕向けさせた」

「それは違うな、彼らは自ら戦うと言ったから、私はそれに援助と密約してあげたんだよ」

「密約？」

「そう私だけじゃ資金面で不足だからね。GAを攻撃しないと  
名目で資金援助と武器援助をして貰う内容で密約を交わしたんだよ」

「なんでそこまで話す?」

「だってちーちゃんならすぐわかつちやうからね」

そこで会話が終わりしばらく沈黙が続き波が岩にぶつかる音だけしか聞こえなくなった。

束は海を眺め織斑先生はその束を見て、亮平は遠くを見て何かを考えていた。

「そっか……じゃあね、ちーちゃん!」

フツと束は崖から飛び降りた、それは瞬きをするひまもなく、まるでどこかえ消えようだった。

「じゃあ俺も帰りますね」

亮平は考えるのを辞めて織斑先生に一言言つと来た道に戻って行った。

シャルロットは亮平にバレないように息を殺しながら岩の陰に隠れやり過ごした。



やがて織斑先生も亮平の後を追うように旅館に戻ろうとシャルロットの前を通りかかった。

「デュノアこの事は誰にも話すなよ」

「!?!」

もう大丈夫だとひと安心した瞬間に織斑先生による忠告だったのでシャルロットは咳き込んでしまった。

「……………はい」

織斑先生はその言葉を聞くと何も言わずに再び旅館に向かって歩き出して行った。“まさかバレるとは”今さら後悔したって戻る訳ではなかったが後悔せずにはいられないシャルロットは自分の心を落ち着かせて織斑先生がいないことを確認し旅館に帰った。

「シャルロットさん亮平さんは見つかりましたか？」

「いや、見つからなかった……………」

あまりにも落ち込んでいたように見えたセシリアはどっぴかシャルロットを励まそうとした。

「そうですね。まあまた次の機会ですね」

こうして専用機持ちには苦痛で長かった臨海学校は終わり翌日生徒は無事に学園に帰って行った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5257s/>

---

IS インフィニット・ストラトス 【白い閃光】

2011年6月16日11時49分発行